Interviewer (0:00): Nathalie, thank you so much for, uh, talking with me today. ナタリーさん、今日は、ええと、お話しする時間を取っていただき本当にありがとうございます。

Nathalie (0:03): It's a pleasure. こちらこそ、お話しできて嬉しいです。

Interviewer (0:04): My first question: how do I pronounce your name properly? 最初の質問なのですが、あなたのお名前はどう発音するのが正しいのでしょうか？

Nathalie (0:08): Well, um, so, since I've been here for a while, I'm used to the Japanese way: *Natari*. そうですね、ええと、日本に来て結構長くなるので、日本語の発音である「ナタリ」に慣れてしまっていますね。

Interviewer (0:15): *Natari*. ナタリ。

Nathalie (0:16): But in French, we say Nathalie. でもフランス語では、「ナタリ」と発音します。

Interviewer (0:17): Natali. Okay. So that's what your mother would call you? ナタリですね。なるほど。では、お母様からはそう呼ばれているのですか？

Nathalie (0:21): No, she would go for Nathalie Alexandra (inaudible). いいえ、母なら「ナタリ・アレクサンドラ…（聞き取り不能）」と呼ぶでしょうね。

Interviewer (0:23): Oh my goodness! Oh, okay. Well, you've, uh, you've, uh, sort of given away my next question, which is, uh, where are you from? Where were you born? おやまあ！なるほど、分かりました。さて、あなたは、ええと、何というか、私の次の質問の答えをフライングして言ってしまいましたね。次の質問というのは、ええと、ご出身はどちらですか？ どこで生まれたのですか？ ということです。

Nathalie (0:32): I'm, I'm born in Belgium. 私は、ベルギー生まれです。

Interviewer (0:33): Okay. So, uh, Belgium is, uh, not a huge country, but there's different groups of people living there. I know there's a Dutch Belgian side and a French Belgian side. Whereabouts are, are you from? なるほど。それで、ええと、ベルギーは、ええと、巨大な国というわけではありませんが、異なる人々のグループが暮らしていますよね。オランダ語系のベルギー側と、フランス語系のベルギー側があることは知っています。あなたは、どの辺りのご出身ですか？

Nathalie (0:48): And there's also a German Belgian side. それから、ドイツ語系のベルギー側もありますよ。

Interviewer (0:49): Oh my goodness! おやまあ！

Nathalie (0:50): But yeah, well, officially it's, it's, it's part of Belgium now. Uh, since recent events in history have called for a bit of Germany to be brought to Belgium. でもそうですね、ええと、公式には今ではそこもベルギーの一部です。ええと、歴史における最近の出来事によって、ドイツの一部がベルギーに組み込まれることになったからです。

Interviewer (1:02): When was this? それはいつ頃のことですか？

Nathalie (1:03): After Second World War. 第二次世界大戦の後です。

Interviewer (1:05): Oh, okay. Okay. Okay. あ、なるほど。分かりました、分かりました。

Nathalie (1:06): And, uh, well, recent, you know. それで、ええと、最近と言っても、その。

Interviewer (1:07): Sure. Sure. そうですね。分かります。

Nathalie (1:07): Relatively recent. 比較的最近ということです。

Nathalie (1:08): Um, so, um, I was born in Brussels. Very basic. Capital city. And, uh, from a Belgian mom and a French father. So I got both nationalities. ええと、それで、私はブリュッセルで生まれました。ごく普通の、首都ですね。そして、ええと、ベルギー人の母とフランス人の父の間に生まれました。ですから、両方の国籍を持っています。

Interviewer (1:23): So you have a French passport and a Belgian passport? ということは、フランスのパスポートとベルギーのパスポートを持っているのですか？

Nathalie (1:26): Yes I do, and I use them alternatively. はい、持っています。交互に使い分けていますよ。

Interviewer (1:30): Oh, okay. へえ、なるほど。

Nathalie (1:31): And I'm born in a city where, officially, we speak two languages, right? But there are more than 200 nationalities mixed up. It's very multicultural. そして私は、公式には 2 つの言語が話されている都市で生まれたわけですが、実際には 200 以上の国籍の人々が混ざり合っています。とても多文化的です。

Interviewer (1:39): In Brussels? ブリュッセルでですか？

Nathalie (1:40): Just in Brussels. ブリュッセルだけで、です。

Interviewer (1:41): And was it always that way growing up, or did it become more multicultural over time? 子供の頃からずっとそういう環境だったのですか？ それとも、時間が経つにつれてより多文化的になっていったのでしょうか？

Nathalie (1:46): Oh, um, it was always that way. But I remember a very, um, kind of, you know, what do you call that, um, shocking event. That is that Belgium actually instituted, um, kind of a, declared a language barrier when I was a child. So we used to have one country. We still had one country, but then it was kind of cut in two by the language, um, line. Which used to not be before I was… I don't know what, what, how old I was, but I remember it very clearly. あ、ええと、ずっとそういう環境でした。ただ、とても、何というか、何て言えばいいのかな、衝撃的な出来事を覚えています。それは、私が子供の頃に、ベルギーが実際に, ある種の、言語の境界線を宣言して設けたことです。それまでは一つの国でした。今でも一つの国ではありますが、当時はその言語の、ええと、境界線によって国が二つに分断されたような感じでした。私が…何歳だったかは覚えていませんが、そうなる前はそんなものはなかったのに、その時のことはとてもはっきりと覚えています。

Interviewer (2:20): And so that language line would be Dutch-French? その言語の境界線というのは、オランダ語とフランス語のものですか？

Nathalie (2:22): Yeah. そうです。

Interviewer (2:23): Okay. And so why was that policy started? なるほど。では、なぜそのような政策が始まったのですか？

Nathalie (2:26): Oh, it's a complicated story. Well, we, we could, but we'd have the whole interview go about that. But yeah, in that sense, Belgium is, uh, like every country, ever-changing. Um, but at the time, yeah, they kind of separated, uh, linguistically the country. It used to be already kind of, uh, separated. You know, we have what we call provinces, what would be prefectures in Japan. We have, uh, regions, uh, like you have regions in Japan. It's the same. But, um, the only thing is that they, they kind of put an accent on the fact that in the north we only speak Dutch—or Flemish, if you want. In Belgium, it's Flemish. It's called Flemish from Flanders, like *A Dog of Flanders*, if you know the story, the novel. And then in the south, it's French. Uh, the region is called Wallonia. But yeah. ああ、それは複雑な話なんです。まあ、話そうと思えば話せますが、インタビューが丸ごとその話になってしまいますね。ベースで言えば、ベルギーは、ええと、どの国とも同じように、常に変化しています。ええと、世紀の変わり目、そうですね、国を言語的に、ええと、分離したような形になりました。それまでもすでに、ある程度は分かれていたんです。ご存知のように、私たちには「州」と呼ばれるものがあり、これは日本でいう都道府県にあたります。それから「地域」もあり、これも日本にある地方のようなものです。同じですね。ただ、ええと、唯一違ったのは、北部ではオランダ語——あるいは言ってみれば「フラマン語」だけを話すという点に、国が重点を置いたことです。ベルギーではフラマン語と呼ばれています。フランダース地方の言葉なのでフラマン語（Flemish）と呼ばれていて、もしその物語、小説をご存知なら『フランダースの犬』のフランダースですね。そして南部ではフランス語です。ええと、その地域はワロン地方と呼ばれています。そんな感じですね。

Interviewer (3:11): So, it was explained to me one time that, uh, Belgium has two official languages, but that in reality, while everybody speaks French, not everybody speaks Dutch. では、以前私がある人から説明されたことがあるのですが、ええと、ベルギーには 2 つの公用語があるけれど、現実には、誰もがフランス語を話す一方で、全員がオランダ語を話すわけではない、というのは本当ですか？

Nathalie (3:25): True. 本当です。

Interviewer (3:26): That is true? それは本当なのですか？

Nathalie (3:27): It is a true fact. 紛れもない事実です。

Interviewer (3:27): Okay. And so, is it fair to say that, politically, French-speaking parts of Belgium are dominant? なるほど。では、政治的には、ベルギーのフランス語圏が優位に立っていると言ってもいいのでしょうか？

Nathalie (3:37): Nope. いいえ。

Interviewer (3:38): Not true? そうではないのですか？

Nathalie (3:39): Actually, um, I think at the moment, still, there are actually more people, uh, living in the Flemish part. But Flemish, or Dutch if you want to make it very easy, uh, is not a very, uh, wide language. Unfortunately, it's not spoken everywhere. So by, uh, culturally, uh, by cultural norms, French is predominant. And obviously all Flemish people will have to learn French at some point, um, and will do it very easily. Um, just because, again, Flemish or Dutch is not a predominant language in this world. On TV, they have no dubbed movies. They learn English from a very young age. So people from the Flemish-speaking part, from Flanders, are very good with languages. They're really good at learning them, and even if they don't speak them every day, they definitely understand French. 実は、ええと、現在のところもまだ、実際にはフラマン語圏に住んでいる人の方が、ええと、多いと思います。でもフラマン語、あるいは非常に分かりやすく言うならオランダ語は、ええと、それほど、ええと、広く使われている言語ではありません。残念ながら、どこでも通じるわけではないのです。ですから、ええと、文化的、ええと、文化的な規範としては、フランス語が優勢です。AND 当然ながら、フラマン語圏の人たちはみんな、ある時点でフランス語を学ばなけれ

ばならず、ええと、とても簡単に習得してしまいます。ええと、なぜなら、繰り返しになりますが、フラマン語やオランダ語はこの世界において主要な言語ではないからです。テレビでは、映画の吹き替え版がありません。彼らはとても幼い頃から英語を学びます。ですから、フラマン語圏、つまりフランダース地方の人たちは、語学がとても得意です。習得するのが本当に上手で、たとえ毎日話さなくても、フランス語は間違いなく理解できます。

Interviewer (4:36): So if you don't speak French or you don't speak English, you're limited to just living in a very, very, very small area. Is that what you're saying? ということは、もしフランス語も英語も話せなければ、本当に、本当に、本当に狭い地域の中だけで生きることに限定されてしまう。そういうことですか？

Nathalie (4:43): Living or even communicating, you know. If you—it's the same in Japan. If you know Japanese and English, just tell me how much research you do on Google in Japanese. And then if you do the same research in English, how much more events or information you're going to find? 生きることや、コミュニケーションをとることさえも、ですね。もしあなたが——日本でも同じことです。日本語と英語が分かるとして、Google で日本語を使ってどれくらい検索をするか教えてください。そして、同じ検索を英語した場合、どれほど多くの出来事や情報が見つかるでしょうか？

Interviewer (5:02): Quite a big difference. かなりの大差ですね。

Nathalie (5:03): Right. So it's the, it's the same in, in Belgium. So we have that very small community. Um, so we understand the people from Holland, from the Netherlands. The language is basically the same. I'm, I'm really exaggerating because there are obviously nuances and differences. そうなんです。ですから、ベルギーでもそれとまったく同じです。私たちはそのとても小さなコミュニティを持っています。ええと、ですから私たちはオランダの人たちの言葉が分かります。言語は基本的に同じですから。もちろんニュアンスや違いはあるので、私はかなり大げさに言っていますけどね。

Interviewer (5:22): But you can communicate? でもコミュニケーションは取れるのですね？

Nathalie (5:23): We understand, yeah, we understand each other. And then we could potentially understand a little bit of Afrikaans, which is the language they speak in South Africa. 理解できます、ええ、お互いに理解し合えます。それから、南アフリカで話されている言語であるアフリカーンス語も、おそらく少しは理解できるでしょうね。

Interviewer (5:28): Yeah, the Boer. ええ、ボーア人の言葉ですね。

Nathalie (5:29): Right. So it's not the same language, right, but there are links, we could link those, and then that's it. So if you go worldwide, you're kind of limited. So you're, you're from a very young age, you get a push to just, you know, (speaks Dutch). And then I switched over to English. (speaks French) And it's normal for us in Belgium to just, you know, we can randomly speak, um, different languages with each other and understand each other. I have that with friends; we communicate in two different languages. Let's say you speak *Osaka-ben* and I speak *Kumamoto-ben*, but we understand each other. Kind of the same, but it's different languages. そうです。ですから同じ言語というわけではありませんが、繋がりがあり、それらを結びつけることができる、というだけで、それでおしまいです。ですから、世界規模で見ると、どうしても限定されてしまいます。そのため、とても幼い頃から、とにかく、何というか、（オランダ語を話す）。そして今度は英語に切り替えます。（フランス語を話す）そして、ベルギーの私たちにとって、何というか、お互いにランダムに、ええと、異なる言語を話し合って理解し合うのは普通のことなんです。友達ともそういうことがあって、私たちは 2 つの異なる言語でコミュニケーションを取ります。例えば、あなたが*大阪弁*を話し、私が*熊本弁*を話しているけれど、お互いに理解し合えているようなものです。それと似たような感じですが、実際には異なる言語同士なのです。

Interviewer (6:10): Sure. And so French and, uh, Flemish or Dutch, are these languages very similar or are they quite different? なるほど。では、フランス語と、ええと、フラマン語やオランダ語というのは、とても似ている言語なのですか？ それとも全く違うものですか？

Nathalie (6:16): Well, um, so if I speak on a linguistic, um, from a linguistic point of view, Dutch comes from German, right? It's born from old German. Uh, so it sounds quite alike. There are words that are literally the same. Um, and they don't follow the same grammatical rules because I would say, to me, uh, Dutch is a bit easier to get. It's closer to English for the, the grammar, to me. And then French is Latin. So it's completely different. And we, we joke a lot in Belgium. We have a lot of humor. Luckily, we need it. We need humor. Um, we, we joke a lot about the different cultural differences that come actually from those languages. Because to me, a language is a culture. そうですね、ええと、言語学的な、ええと、言語学的な観点から話すと、オランダ語はドイツ語に由来していますよね？ 古代ドイツ語から生まれたものです。ええ、ですから響きがとてもよく似ています。文字通り同じ単語もあります。ええと、そして文法規則は同じではありません。というのも、私にとっては、ええと、オランダ語の方が少し理解しやすいからです。私にとっては、文法が英語に近いですね。そしてフランス語はラテン語系です。ですから完全に異なります。そして、ベルギーではよく冗談を言い合います。私たちはユーモアがたっぷりあります。ありがたいことに、私たちにはそれが必要なんです。ユーモアが必要なのです。ええと、私たちは、実際にそれらの言語から生まれる様々な文化の違いについて、よくジョークを言います。なぜなら、私にとって言語とは文化そのものだからです。

Interviewer (7:07): That's right. その通りですね。

Nathalie (7:08): And in Belgium, you experience it so widely, so widely. そしてベルギーでは、それを本当に広く、本当に広く体験することになります。

Interviewer (7:14): So you become a different person when you're speaking French than when you're speaking Flemish. では、フラマン語を話している時と、フランス語を話している時では、違う人格になるのですね。

Nathalie (7:18): Most definitely. And Japanese again. 間違いなくそうです。そして日本語の時もまたそうですね。

Interviewer (7:20): Oh, you were just saying before we started that you become a different person when you switch to Japanese. おや、私たちがインタビューを始める前にも、日本語に切り替えると別の人格になるとおっしゃっていましたね。

Nathalie (7:25): Yeah, of course. I mean, because I have all the baggage in that language with me. That's my experience in Japanese. And then when I switch to English, I'm going to use all the English I know. And it's going to bring in my head all the stuff I link with English and all that, that, that culture I know from having met American people, but then also Australian people, and then people from the UK. And that whole mix is going to be in my English language, in my, in my culture, because I'm not native. はい、もちろんそうです。つまり、私はその言語の中にすべての経験や背景を詰め込んでいるからです。それが私の日本語での経験です。そして英語に切り替える時は、自分が知っているすべての英語を使います。そうすると、英語と結びついているすべての事柄や、アメリカ人だけでなくオーストラリア人、それからイギリス人の人たちと出会ったことで知った、あの、あの文化が頭の中に蘇ってきます。そして、私はネイティブではないので、そのすべてのミックスが私の英語という言語の中に、私の、私の文化の中に組み込まれることになります。

Interviewer (7:53): Right. Right. なるほど。よく分かります。

Nathalie (7:55): And then Japanese is going to be all my experience in Japan, which is for almost 13 years, soon to be 13 years. And which is a happy feat. I really love, I enjoy my experience a lot. I've

learned so much about myself, so much, uh, moving here. Uh, it's basically why I did it, too. I think I needed it. But then I switch back to French, and then that's, that's my at-home language. I'm losing it. To be honest with you, I'm losing my French because I use so much of English or, or, or, um, Japanese, uh, for the last 10 and more years that my French is actually getting very bad. But still, it conveys all my culture. It conveys all… So language is basically communication and language. It doesn't have to be oral. It can be body language, as it can be sign language for people who speak it. Um, you know, it, it conveys your whole culture. そして日本語は、日本での私のすべての経験、つまりもうすぐ 13 年になる、約 13 年間の経験そのものになります。そしてそれは幸せな偉業です。私は自分の経験が本当に大好きで、とても楽しんでいます。ここに移り住んで、自分自身について本当に多くのことを、本当に多くのことを、ええ、学びました。ええ、基本的にはそれがここに来た理由でもあります。自分にはそれが必要だったのだと思います。でも、そこからフランス語に戻ると、それは私の家庭内での言語になります。私はそれを失いかけています。正直に言うと、ここ 10 年以上の間、英語や、あるいは、あるいは、ええと、日本語をあまりにもたくさん使ってきたので、私のフランス語は実際にとても下手になってきています。それでも、それは私の文化のすべてを伝えてくれます。すべてのものを…ですから、言語とは基本的にはコミュニケーションであり言葉です。口頭である必要はありません。ボディランゲージでもいいですし、それを話す人たちにとっては手話でも構いません。ええと、何というか、それはあなたの文化全体を伝えるものなのです。

Interviewer (8:49): Yeah. No, I absolutely agree with that. Uh, especially when you talk about, uh, switching between languages and sort of switching between versions of yourself. I certainly relate to that. Um, getting back to your childhood, what was it like growing up in Brussels? Was it a happy childhood? ええ。いや、私も全く同感です。ええ、特に、ええと、言語を切り替えることや、何というか、自分自身の別バージョンを切り替えることについてのお話は、確かにとても共感できます。ええと、子供の頃の話に戻りますが、ブリュッセルで育つというのはどのような感じだったのでしょうか？ 幸せな子供時代でしたか？

Nathalie (9:05): Oh, I have, I, I have… I'm very privileged, right? I'm white. Um, my parents, uh, well, my father and my mother worked before I was born. Then my mother quit her work to take care of me. And I have two little sisters. Uh, well, they're, they're big now. But um, so I've been very privileged. I have a childhood that, I would say… Well, you know, you have those occasional crises of childhood and those personal problems, but I was never badly influenced. I've had no, you know, big traumas. Um, so I, I find myself in a very privileged household. Um, in Brussels, which is… You live very well in Brussels. あ、私は、私は…とても恵まれていましたね。白人ですし。ええと、私の両親は、ええと、そうですね、父も母も私が生まれる前は働いていました。その後、母は私を育てるために仕事を辞めました。私には 2 人の妹がいます。ええと、まあ、彼女たちは今はもう大きくなっていますけどね。でも、ええと、そんなわけで私はとても恵まれていました。私の子供時代は、何と言えばいいか…まあ、ご存知のように、子供時代によくある一時的な危機や個人的な問題はありましたが、悪い影響を受けることは決してありませんでした。大きなトラウマなども、何というか、ありませんでした。ええと、ですから私は自分がとても恵まれた家庭にいると感じています。ええと、ブリュッセルでの暮らしですが、そこは…ブリュッセルではとても快適に暮らせますよ。

Interviewer (9:46): So, standard of living is quite high? では、生活水準はかなり高いのぜ？

Nathalie (9:47): Um, it, yeah, I mean, socially, right? Uh, I'm not saying that, uh, there are, there aren't poor people in Belgium. That's not true. We have. But in my case, I was very well born, and I have, I've had the chance to have, uh, um, relatively calm and, um, safe upbringing, right? Uh, we, we all have look, you know, those little things. But still, in general, very easy. And Brussels, I find, if I must compare it to, um, Osaka, which is my second, um, city, because from Brussels I moved to Osaka. Sometimes you hear some weird Japanese (from the next room). It comes from Kansai dialect. ええと、そう、そうですね、つまり社会的な意味で、ですね？ あ、ベルギーに貧しい人がいないと言っているわけではありません。それは違います。貧しい人もいます。ただ私の場合は、と

ても良い環境に生まれ、ええと、比較的穏やかで、ええと、安全な育ち方をさせてもらう機会に恵まれましたね。あ、私たちはみんな、ほら、何というか、ちょっとしたことはありますよね。それでも全体的には、とても平穏でした。そしてブリュッセルですが、もしそれを、ええと、私の第二の、ええと、故郷である大阪と比較しなければならないとしたら——というのも、私はブリュッセルから大阪に移り住んだからです。（隣の部屋から）時々ちょっと変な日本語が聞こえることがありますよね。それは*関西*弁から来ているんです。

Interviewer (10:28): Oh, don't worry, please. ああ、どうかお気になさらないでください。

Nathalie (10:30): Um, but to me, um, Brussels was really, you know, it's multicultural. It's, and it's, it's very warm, and Osaka has the same feeling to me. But the language. You're going to think I'm a maniac, but that's true. I'm a freak. I'm a language freak. And having lived after 4 years in Japan, I actually had some sort of depression. And I realized afterwards that it was linked to the language. Because in Japan, I, I never heard as much languages as I did in Brussels. ええと、ベッド、私にとって、ええと、ブリュッセルは本当に、何というか、多文化的でした。そして、とても温かみがあって、大阪も私にとっては同じような感覚があります。でも言語に関しては違います。私のことをマニアだと思うかもしれませんが、本当なんです。私はオタクなんです。言語オタクなんです。日本に住んで 4 年が経った頃、私は実際にある種のうつ状態になりました。そして後になって、それが言語と結びついていることに気づいたのです。なぜなら日本では、ブリュッセルにいた頃ほど多くの言語を耳にすることが決してなかったからです。

Interviewer (11:07): People don't talk to each other the same? 人々がお互いに交わす会話が同じではないということですか？

Nathalie (11:09): No, no, they talk, but they only talk, speak in Japanese. いえいえ、会話はしますが、みんな日本語だけで話し、会話をするということです。

Interviewer (11:12): Oh, I see what you mean. ああ、おっしゃる意味が分かりました。

Nathalie (11:14): It's language-related, like, literal language. 言語に関すること、つまり、文字通りの「言葉」のことです。

Interviewer (11:16): And yet Osaka is probably the most multicultural place. それなのに、大阪はおそらく最も多文化的な場所ですよね。

Nathalie (11:18): After Tokyo, right? 東京の次くらいに、ですよね？

Interviewer (11:20): Yeah. But even, I mean, they have settled populations of, you know, Nikkei Brazilians, and, uh, and of course of the, the *Zainichi*, uh, communities. ええ。でもそれにしても、つまり、そこには定住している人口として、ほら、日系ブラジル人や、ええと、そしてもちろん、在日の、ええと、コミュニティなどがありますよね。

Nathalie (11:32): Yeah, of course, but the language is only Japanese. ええ、もちろんですが、使われている言語は日本語だけです。

Interviewer (11:35): Just Japanese. 日本語だけですね。

Nathalie (11:36): So, well, what I experienced in the first few years… And then I changed my lifestyle to be able to meet foreign people, and I developed, um, a different, uh, way of life that actually helped me because I missed it. Very simply put, I missed hearing so many languages. The experience you get in Brussels, especially growing up, so it was kind of inculcated in my brain. I always heard so many different languages and accents, and, um, you get used to that. So when I moved to Japan, which was my first move, I kind of switched out completely the language part, and I missed it so much. だから、ま

あ、最初の数年間に私が経験したのは…それから私は外国人の人たちと出会えるようにライフスタイルを変え、ええと、これまでとは違う、ええと、生活様式を作り上げました。それが実際に私を助けてくれました。恋しかったからです。極めてシンプルに言うと、たくさんの言語を耳にすることが恋しかったのです。ブリュッセルで得られる経験、特に育っていく中での経験は、私の脳にある種刷り込まれていました。私はいつも非常に多くの異なる言語やアクセントを耳にしていて、ええと、それに慣れてしまうのです。ですから、私が初めて移住した先である日本に来た時、言語に関する部分を何というか完全に遮断してしまい、それがたまらなく恋しくなってしまったのです。

Interviewer (12:15): People sometimes say that in Japan, or very, um, what's the word I'm looking for? Places where there's really just one group of people, uh, they often don't like it when other people speak different languages. It makes them uncomfortable. Whereas in very multicultural societies, people don't care what language you speak. Do you think that's a factor at all in Osaka? People intentionally don't speak the other languages that they can speak in public? 日本では、あるいは、ええと、何て言えばいいのかな？ 本当に一つのグループの人たちしかいないような場所では、他の人たちが違う言語を話すのを嫌がることがよくある、と人は言います。居心地が悪くなるんですね。一方で、非常に多文化的な社会では、人々はあなたが何語を話そうが気にしません。大阪ではそれが少しは要因になっていると思いますか？ 人々が公の場で、自分が話せるはずの他の言語を意図的に話さないようにしている、ということはありますか？

Nathalie (12:46): I think it's not limited to Osaka. I think in Japan, we have a tendency to kind of want to blend in as a foreign person. So, um, I will not, in front of Japanese people, yeah, even speak, um, my language to my daughter. それは大阪に限ったことではないと思います。日本にいると、外国人として何というか周りに溶け込みたいと思ってしまう傾向がある気がします。ですから、ええと、私は日本人の前では、そうですね、娘に対して自分の母国語で話すことさえしません。

Interviewer (13:00): Me neither. Yeah. 私も同じです。そうですね。

Nathalie (13:02): Which is a problem because I want my daughters to speak French. At least, if not more languages. And when we're just both of us, I will speak in French to her. But even on the tramway… We're in Kumamoto City, she loves going to Kumamoto City, you know, spending a night in a hotel with mom, yay! We go out, we go to the Suizenji and we get tea, right? My daughter loves tea. And, um, the whole feeling it brings, right, it's not just a tea. It's, it's the whole thing. She's very Japanese in that sense. She's four and a half, right? But she knows. And so we get there and there are other people around. And I don't know, it's, um, I get the feeling I need to switch to Japanese to talk to her when, um… I feel pressured into that because the Japanese public is going to think of me that I'm kind of just a tourist. それは問題なんです。なぜなら、娘にはフランス語を話せるようになってほしいからです。それ以上の数の言語とは言わないまでも、少なくともフランス語は。だから、二人きりの時は彼女にフランス語で話しかけます。でも、路面電車に乗っている時でさえ…私たちは熊本市にいるのですが、娘は熊本市に行くのが大好きで、お母さんとホテルに一泊するとなると「わーい！」って大喜びします。一緒に出かけて、水前寺に行って、お茶をいただきますよね？ 娘はお茶が大好きなんです。そして、ええと、そこから得られる雰囲気全体、そう、ただのお茶を飲むだけではないんです。その空間すべてなんです。そういう意味で、娘はとても日本人らしいですね。まだ4歳半ですよ？ でも分かっているんです。それで現地に着くと、周りに他の人がいます。そうすると何というか、ええと、彼女に話しかける時に日本語に切り替えなきゃいけないような気がしてくるんです、ええと…日本の一般の人たちから、私のことをただの観光客みたいに思われてしまうんじゃないかって、プレッシャーを感じるからですね。

Interviewer (14:02): You'll get treated a different way. 違う扱いを受けることになりますからね。

Nathalie (14:03): Yeah. そうなんです。

Interviewer (14:04): I relate to what you're saying 100%. I act exactly the same way. あなたのおっしゃることに 100%共感します。私も全く同じように行動しますよ。

Nathalie (14:07): Well, I try not to. I really, I, I kind of sometimes I really do the effort and I'm like, "Okay, all right. I'm here with my daughter. We have our time. I need her to be French speaking someday in her life." She understands all of my French. She doesn't speak it. ええと、そうしないようにはしているんです。本当に、何というか、時々は本当に努力して「よし、大丈夫。今は娘と一緒にいるんだ。私たちの時間なんだから。彼女の人生のいつか、フランス語を話せるようになってもらわなきゃいけないんだ」と言い聞かせています。娘は私のフランス語をすべて理解しています。話せはしませんけど。

Interviewer (14:21): Yeah, output is often a little bit hard. ええ、アウトプットするというのは往々にして少し難しいですよね。

Nathalie (14:24): Yeah. So, I try as much as I can to, um, talk to her in French now. But because I realized I was doing that weird, um, blending into Japan thing, right? And at home, it's the same. My husband doesn't speak French, and we live with my mother-in-law. She doesn't speak French. Obviously, she's 83. I'm not asking of her that she speaks French. But this prompts me to spend more time speaking Japanese with my daughter. Why? I shouldn't. I shouldn't care. But just imagine every time I say something to her, "(speaking French) Do you, do you want some tea, Asa?" She's going to go, "Yeah." And then my mother-in-law is going to look at me like, "What have you just said?" Not saying anything. It's not a judgment. But I'm going to feel that, that look, and I'm going to say the same phrase again: Asa, *ocha wo nomu?* Then she's going to answer in Japanese. Because she says *oui* in French. Yes, she says yes in French, but, but not much more. But then, and then I feel it's stable again, like I take, I take the balance again, right? So it's hard for me because speaking twice about everything and, um, yeah, to me that huge difference of not many languages around, so we have to fit into Japanese, is the biggest difference with Brussels, and between Japan in general and Brussels. そうなんです。だから、今はできる限りフランス語で、ええと、話しかけるようにしています。自分が日本に溶け込もうとするあの奇妙な、ええと、行動をしていることに気づいたからです。家でも同じです。夫はフランス語を話しませんし、私たちは義理の母と同居しています。彼女もフランス語は話しません。当然ですよね、83 歳ですから。お義母さんにフランス語を話してなんて求めていません。でも、これが引き金になって、私は娘と日本語で話す時間を多く過ごしてしまうんです。なぜでしょうね？ そうすべきではないのに。気にする必要はないはずです。でも、私が娘に何か言うたびに「（フランス語で話す）アーサ、お茶飲む？」と言って、娘が「うん」と答える場面を想像してみてください。そうするとお義母さんが「今なんて言ったの？」という目線で私を見るんです。何も言いませんよ。非難しているわけではありません。でも、私はその、その視線を感じて、同じフレーズをもう一度言うことになるんです。「アーサ、お茶を飲む？」って。すると娘は日本語で答えます。娘はフランス語で「ウィ」とは言いますけど。はい、フランス語でイエスとは言えますが、でも、でもそれ以上はあまり言葉が出ません。でもそう言い直すと、また安定した状態に戻ったように感じるんです。何というか、またバランスが取れたような、そうですよね？ だからすべてのことを 2 回言うのは私にとって大変ですし、ええ、私にとって周りにあまり多くの言語がないというあの大きな違い、つまり日本語に合わせなければいけないということが、ブリュッセルとの、そして日本全般とブリュッセルとの間にある一番大きな違いです。

Interviewer (15:52): So, uh, talking about your school life a little bit: was your school life also very multicultural, very free in that sense? では、ええと、学校生活について少しお聞きしますが、あなたの学校生活もやはり非常に多文化的で、そういう意味でとても自由なものでしたか？

Nathalie (15:59): Um, it could have been more, but, um. So I'm, I'm from a French-speaking, uh, family, right? My, my, my father was French from France, and my mother is French-speaking Belgian. Mainly. She could potentially put out some Dutch, but it's hard. So it's a French-speaking household. And, but when I go out in the street and I go to school, my school is in Flemish. In Dutch. I've, I grew, I

grew up in a Dutch-speaking environment at school. ええと、もっとそうであってもよかったのですが、でも、ええと。私はフランス語圏の、ええと、家庭の出身なんです。私の、私の、私の父はフランス出身のフランス人で、母はフランス語を話すベルギー人です。主に。母はもしかしたらオランダ語を少しはひねり出せるかもしれませんが、難しいですね。ですからフランス語を話す家庭です。それなのに、一歩通りに出て学校に行くと、私の学校はフラマン語だったんです。オランダ語ですね。私は、私は学校ではオランダ語を話す環境で育ちました。

Interviewer (16:28): Interesting. 興味深いですね。

Nathalie (16:32): So, in school it was *ya*, and at home it's *oui*, right? And so I learned when I was two… So when I was, uh, going to kindergarten, I switched to Dutch, right? You want a weird but funny memory? だから、学校では「ヤー（はい）」で、家では「ウィ（はい）」だったんです、そうですよね？ それで 2 歳の時に学んで…だから私が、ええと、幼稚園に通うようになった時に、オランダ語に切り替えたわけです。奇妙だけど面白い思い出話を聞きたいですか？

Interviewer (16:44): Please! ぜひお願いします！

Nathalie (16:45): All right. I had to doodoo, go for the big one. And, um, at home I know we say *caca*, to do the big one, right? I, I think I was four, maybe three or four years old. It's one of my earliest memories, and it's language-related, telling you something about my brain. So, I'm in a Dutch-speaking school where we're not allowed to speak French. The rule is no French. Because Dutch is a minority language, so we protect it. And me being a child, totally agree with the rule, never going to go again against it. And I'm looking at my teacher, and I don't know how to say *caca* in Dutch. I don't know. And so I still have the guilt in me. I lied, saying I was going for the small one, which is *pipi*, whilst I was actually going for the big one, which is *caca* in French. 分かりました。うんち（大きい方）に行きたくなったんです。そして、ええと、家では大きい方をするのを「*カカ*」と言うのを知っていました。私、私は 4 歳、たぶん 3 歳か 4 歳だったと思います。私の最も古い記憶の一つなのですが、それが言語に関することだというのは、私の脳のあり方を物語っていますよね。それで、私はフランス語を話してはいけない、オランダ語を話す学校にいました。ルールは「フランス語禁止」です。オランダ語は少数派の言語なので、私たちはそれを保護しているのです。子供だった私はそのルールに完全に同意していて、絶対にそれに逆らわないつもりでした。そして先生を見たのですが、オランダ語で「*カカ*」をどう言えばいいのか分かりませんでした。知らなかったのです。そのため、私は今でも罪悪感を抱いています。本当はフランス語でいう「*カカ*」（大きい方）に行きたかったのに、「*ピピ*」（小さい方）に行くと嘘をついてしまったのです。

Interviewer (17:45): And of course, they teach you not to lie. And so… そしてもちろん、学校では嘘をついてはいけないと教えられます。そうなると…

Nathalie (17:46): Oh, I shouldn't lie, I'm a good, I'm a good kid. So, um, I told my teacher because I knew in Flemish, in Dutch, it's *pipi*, (speaks Dutch). But I actually wanted to go for the big one. So, I lied. And I still remember this to this day, getting out of the toilet, um, just tell it to my friend, I think. I think I told it to a friend who told me, "But in Dutch it's *caca* too." So, I learned that day, um, fantastic word. When you have to poo, you say *caca* in French and in, in Dutch. So, well, in, in Belgian Dutch at least. Um, sorry for the Northern guys. Um, but so I still have this memory of me being shocked by my own unability to speak the right language at the right time. And I must say it still affects me to this day when I am in a situation where I can't find words in a certain language and I know no other language will go through. It's one of my biggest fears: not to be able to be clear with someone, not to be able to communicate in the right language. It's something that really, um, brings me fear. ああ、嘘をついてはいけない、私は良い子、良い子なんだからって思いました。それで、ええと、フラマン語、つまりオランダ語でそれが「*ピピ*」だとは知っていたので、先生にそう伝えて（オランダ語を話す）。でも本当は大きい方に行きたかったんです。だから嘘をつきました。そして今でもこのことを覚えているのですが、トイレから出てきて、ええと、確か友達にそのことを話したんだ

と思います。友達に話したら「でもオランダ語でも*カカ*だよ」と言われたんです。だからその日、私は、ええと、素晴らしい言葉を学びました。うんちをしたい時は、フランス語でも、オラン、オランダ語でも「*カカ*」と言うのだと。まあ、少なくともベルギーのオランダ語では、ですが。ええと、北の方（オランダ本国）の人たちには申し訳ないですけど。ええと、でもそんなわけで、適切な時に適切な言語を話せないという自分自身の無能さにショックを受けた記憶が、今でも残っています。そして、ある言語で言葉が見つからず、他のどの言語も通じないという状況に陥った時、この記憶が今でも私に影響を与えていると言わざるを得ません。誰かに対して明確に表現できないこと、正しい言語でコミュニケーションをとれないことは、私の最大の恐怖の一つです。それは本当に、ええと、私に恐怖をもたらすものなのです。

Interviewer (19:02): And, and this is coming from somebody who can already speak four languages without problem. So, I mean, for… しかも、これはすでに 4 つの言語を問題なく話せる人から出てくる言葉なわけですからね。ということは、つまり…

Nathalie (19:08): Again, without problem to a certain point where I'm, I'm going to start looking for words where, when, when I don't know how to say something. Because that happens in any language. In my own language. 繰り返しになりますが、問題なくというのはある程度までの話で、何かをどう言えばいいか分からない時は、言葉を探し始めることになります。そんなことはどの言語でも起こりますから。私の母国語でさえもです。

Interviewer (19:20): In English I search for words sometimes, of course. 英語でも、もちろん私も時々言葉を探します。

Nathalie (19:22): So, yeah, and in, in Japanese my husband as well. And, um, I, I think… And it's human to be like that, it's… I'm just human, right? But at the same time, it's something I really don't like about myself when I have to hesitate about, uh… Because I want to communicate properly. Uh, I really want to get the message through, and it's, it's really hard sometimes. Uh, and that's why I, I think of myself as a crazy person because I moved to a place where we have a different culture, a different language, and just complicate my (life), you know. And at the same time, I have such a thing for alphabets and languages and those ways of communicating. ですから、そう、そして日本語、日本語では私の夫もそうです。そして、ええと、私は、私は思うのですが…そうなるのが人間ですし、それは…私はただの人間ですからね。でも同時に、ええと…についてためらわなければならない時の自分のことが、本当に嫌いなんです。きちんとコミュニケーションを取りたいですから。ええ、本当にメッセージを伝えたいのに、それが、それが時々本当に難しいんです。ええ、だから自分のことを風変わりな人間だと思ってしまうのは、わざわざ文化も言語も違う場所に移住して、自分の（人生）をただ複雑にしているからです。それと同時に、私は文字や言語、そういったコミュニケーション方法に対して強いこだわりがあるのです。

Interviewer (20:01): Well, obviously you like a challenge; otherwise, you wouldn't have moved here. まあ、明らかにあなたは挑戦が好きなのですね。そうでなければ、ここには移住してこなかったでしょう。

Nathalie (20:04): Yes! And at the same time, Japanese is so easy, you know. Yes. You know why? Because of the Japanese people. No, no, no, no. Not the language. The language is not easy. The language is extremely complicated. そうです！そして同時に、日本語ってとても簡単なんですよ。ええ。なぜか分かりますか？ 日本の人たちのおかげです。いえいえ、とんでもない。言語のことではありません。言語は簡単ではないです。言語はものすごく複雑です。

Interviewer (20:18): Oh, okay. Thank you. ああ、なるほど。ありがとうございます。

Nathalie (20:19): Japanese people, when they see you try to speak their language, are so lovely. 日本の人たちは、あなたが彼らの言語を話そうと努力しているのを見ると、本当に優しく接してくれます。

Interviewer (20:25): Ah, I would agree with that. ああ、それには同感ですね。

Nathalie (20:26): Oh my god. So many times have I hesitated, and people understood me, and they have tried so hard. It's really interesting. なんということでしょう。私が何度もためらったのに、人々は私のことを理解してくれて、一生懸命対応してくれました。本当に興味深いことです。

Interviewer (20:33): Yeah, I find people will certainly accommodate you and pretend to understand me, in my case. Uh, and then I'll figure out afterwards, "oh, they probably didn't understand what I was trying to say." ええ、私の場合は、人々は確かに親切に合わせてくれて、理解してくれたフリをしてくれるなと感じます。ええ、それで後になってから「あ、彼らはきっと私が言おうとしていたことを理解していなかったんだな」と気づくんです。

Nathalie (20:46): But, but at the same time, they're being so lovely about it. でも、でも同時に、彼らはそれに対してとても優しく接してくれているわけですよね。

Interviewer (20:47): No, I agree. ええ、同感です。

Nathalie (20:48): No, because I was afraid of that teacher maybe being angry at me for not saying the right *pipi poopoo* thing. But here, every day I'm confronted with that. Because my Japanese is not that good. いいえ、だって私はあの先生が、正しい「*ピピ・プープー*」の言葉を言わなかったことで自分に怒るんじゃないかって怖がっていたわけですから。でもここでは、毎日そのことに直面しています。私の日本語はそこまで上手ではないですから。

Interviewer (20:59): Well, it takes time. まあ、時間がかかりますよ。

Nathalie (21:00): Yeah. I've been speaking for 12 years every day, right, or almost—I've been on holidays, too—but and still every language is so deep. I mean, you could learn French for 30 years but still not know the end of it. And I know what I'm speaking of. I've been speaking it for 30 plus years. I'm not going to say my age, but… Right. はい。私は 12 年間毎日、そう、あるいはほとんど毎日話してきましたが——休暇を取ることもありましたけど——それでもあらゆる言語はとても深いです。つまり、フランス語を 30 年間学んでも、まだその終わりを知ることはできないでしょう。そして自分が何について話しているかは分かっています。私はそれを 30 年以上話してきましたから。年齢は言いませんけど…そうですね。

Interviewer (21:20): You almost did, very close. 言いかけましたね、極めて近かったです。

Nathalie (21:23): Too old. I'm 38. 歳を取りすぎました。38 歳です。

Interviewer (21:24): Listen, I'm 47. Don't even worry. いいですか、私は 47 歳ですよ。全く気にしないで。

Nathalie (21:26): That's the same age as my husband. 私の夫と同じ年齢ですね。

Interviewer (21:28): Oh? おや？

Nathalie (21:29): We have so much information. Uh, but, but no, truly, the… I, I think my ease in Japan comes from the people. I, I first fell in love with the people of Japan. I met so many lovely people in Osaka the first time I went, and… Probably because (I grew up in) Brussels. The two cities are very close. To me (in my opinion). 私たちはあまりに多くの情報を持っていますね。ええ、でも、でも冗談抜きで、本当に…日本での居心地の良さは人々から来ているのだと思います。私は最初に、日本の人たちのことを大好きになりました。初めて行った時に大阪でたくさんの素敵な人たちに出会いましたし…おそらく（私が育ったのが）ブリュッセルだからでしょうね。私にとっては（私の意見では）、この二つの都市はとてもよく似ています。

Interviewer (21:49): Oh, really? おお、本当に？

Nathalie (21:50): You know, drunk people at 8 in the morning in the streets. Uh, you know, partying until whatever, trying to sell anything to anyone. Uh, and, and being so, you know, international, not international at the same time. To me, it, it's, it's pretty close. ほら、朝の 8 時に通りに酔っ払いがいるところとか。ええ、何時までででもパーティーをして、誰にでも何でも売ろうとするところとか。ええ、そして、そしてとても、何というか、国際的でありながら、同時に国際的ではないところとか。私にとっては、それ、それは、かなり似ています。

Interviewer (22:07): That's interesting. So, I've never heard Osaka and Brussels compared, but you're saying there's actually a lot about Osaka… それは面白いですね。大阪とブリュッセルが比較されるのは聞いたことがありませんでしたが、あなたは大阪について実際多くのことが…とおっしゃるのですね。

Nathalie (22:13): What have you heard about Osaka? 大阪についてどんなことを聞いたことがありますか？

Interviewer (22:14): Oh, I mean, I've visited Osaka quite a bit, and I feel an affinity for Kansai people without ever having lived there because it seems like a more, uh, more inclusive, more relaxed, more… ああ、つまり、私は大阪をかなり何度も訪れたことがあって、そこに住んだことは一度もないのですが、関西の人たちに親近感を覚えるんです。なぜなら、より、ええと、より包容力があって、よりリラックスしていて、より…に思えるからです。

Nathalie (22:30): Belgians get that, too. Sorry, not taking the words out of your mouth, but Belgians, we get that too. We get that. We're very sympathetic, and we're very open. We're very warm. And we bring people in without, you know, kind of judging, because we can't judge. We're just Belgium, you know. And I think Osaka has that kind of pride, non-pride. ベルギー人もそうですよ。すみません、あなたの言葉を遮るつもりはなかったのですが、ベルギー人も、私たちもそうなんです。分かります。私たちはとても思いやりがあって、とてもオープンです。とても温かいです。そして、人々を何というか、批判することなく受け入れます。なぜなら私たちは批判なんてできないからです。私たちはただのベルギーですからね。そして、大阪にはそういう種類のプライドというか、プライドのなさがあると思います。

Interviewer (22:47): Sure, they're not Tokyo. 確かに、彼らは東京ではないですからね。

Nathalie (22:48): Right? そうでしょう？

Interviewer (22:50): They're not Tokyo. 東京ではない。

Nathalie (22:51): And they have that, but they have that special pride of Osaka, you know? It's Osaka. And then, but at the same time, you're welcome. And never, nobody will ever ask you if you still want more tea to put you out of, you know, their, their spot. It's, it's there is something very natural. And I think Belgians have that too. That we're pretty open and natural, and we don't really kind of think of us as serious beings. And… Yeah. そして彼らはそれを持っていますが、大阪という特別なプライドを持っていますよね？ 大阪ですから。そして、でもそれと同時に、歓迎してくれます。そして、誰もあなたを、何というか、彼らの、彼らの場所から追い出すためにお茶のおかわりはいかがですか、なんて聞いてきたりは絶対にしません。そこには、そこにはとても自然な何かがあります。そしてベルギー人もそれを持っていると思います。私たちはかなりオープンで自然体ですし、自分たちのことをそれほど堅苦しい存在だとは思っていません。そして…ええ。

Interviewer (23:14): Well, it's interesting that you say that because as a Canadian, we live next to America. And so nobody in Canada… I mean, recently it's changed, but when I was growing up, nobody thought Canada was anything special because anybody who was special in Canada would go to the

States. いやあ、そうおっしゃるのは興味深いですね。というのも、カナダ人として、私たちはアメリカの隣に住んでいますから。そのためカナダでは誰も…つまり、最近は変わってきましたが、私が育った頃は、誰もカナダが何か特別な国だとは思っていませんでした。なぜなら、カナダで特別な才能を持つ人はみんなアメリカに行ってしまうからです。

Nathalie (23:33): No way. まさか。

Interviewer (23:34): Yeah. I mean, they just pay more; there's more opportunity. ええ。つまり、あちらの方が給料が高く、チャンスも多いですから。

Nathalie (23:36): It's the same with Paris. They go to France. Belgians go to France. It's the same. パリと同じですね。みんなフランスへ行きます。ベルギー人はフランスへ行きます。同じことです。

Interviewer (23:40): Right. Right. その通りですね。その通り。

Nathalie (23:41): Oh, it's interesting. We're the Canada of, uh… ああ、面白いですね。私たちは、ええと…のカナダなわけですね。

Interviewer (23:45): The Canada of Europe. I'm so sorry to hear that. ヨーロッパのカナダですね。それを聞いて同情します。

Nathalie (23:47): No, no, it's a good thing. But I'm very proud to be like (that). If we were at least (makes a finger gesture to indicate a small size), if we were that of Canada with Belgium, that would be cool, but we're not. いえいえ、それは良いことですよ。でも私は（そういう存在）であることをとても誇りに思っています。もし私たちが少なくとも（小さなサイズを示すジェスチャーをして）、ベルギーを伴ったカナダのあのような存在であればカッコいいですが、私たちは違います。

Interviewer (23:54): But well, if you had our natural resources, it would be a different story. ですが、まあ、もしあなた方に私たちの天然資源があれば、話は別だったでしょうね。

Nathalie (23:58): Yeah, that's true. ええ、それは本当ですね。

Interviewer (23:59): Let's talk after this interview. We'll make a deal. このインタビューの後に話しましょう。取引をしましょう。

Nathalie (24:01): Sure. いいですよ。

Interviewer (24:02): So, uh, talking a little bit more about your childhood, uh, what kind of hobbies were you into? What did you do for fun? では、ええと、あなたの子供時代についてもう少しお聞きしますが、ええと、どのような趣味にハマっていましたか？ 楽しむために何をしていましたか？

Nathalie (24:10): Um, archaeology. I, I, I definitely love history. I actually wanted to be a, a researcher, and I wanted to, you know… I had never seen the Indiana Jones movies, like, when I was a child. I was Indiana Jones without knowing Indiana Jones. Um, and I, I loved, uh—I have never—you're going to laugh, but I have never been to Egypt, but I loved the Egyptian civilization, the history, right? ええと、考古学です。私は、私は、私は間違いなく歴史が大好きです。実は、ええと、研究者になりたかったんです。それで、何というか…子供の頃は『*インディ・ジョーンズ*』の映画なんて一度も見たことがありませんでした。私は『*インディ・ジョーンズ*』を知らないまま『*インディ・ジョーンズ*』だったんです。ええと、そして私は、ええと…笑われるでしょうけど、エジプト

には一度も行ったことがないのに、エジプトの文明や歴史が大好きだったんです、そうでしょう？

Interviewer (24:33): That's everybody; that's not just you. それはみんなそうですよ、あなただけではありません。

Nathalie (24:37): Yeah, but I, I got those, um, what do you call those magazines sent through post because at the time we didn't have internet. ええ、でも私は、私はあの、ええと、何て呼ぶのかな、定期購読の雑誌を郵送で受け取っていました。当時はインターネットがありませんでしたから。

Interviewer (24:43): National Geographic and things like that? 『*ナショナル ジオグラフィック*』とか、そういったものですか？

Nathalie (24:45): No, cheaper stuff. Um, it's like France, France edits those, uh, for kids, you know, and you get all information. You have games and you learn about like Egyptian mythology and… いいえ、もっと安いやつです。ええと、フランス、フランスが子供向けに編集しているようなもので、何というか、すべての情報が載っているんです。ゲームがあったり、エジプト神話について学べたりして…

Interviewer (24:57): Sounds great. 素晴らしそうですね。

Nathalie (24:58): Well, not only, but yeah, um, Egypt was a very big thing. Um, there was a time I wanted to be a firefighter, and then there was a time, um… Yeah, basically archaeology was very big for a very long time. And then I had to go to class, and I forgot a little bit about that. And then, yeah, I swam a lot. まあ、それだけではありませんが、でもそうですね、ええと、エジプトはとても大きな存在でした。ええと、一時期は消防士になりたかったこともありましたし、それから一時期は、ええと…ええ、基本的には考古学がとても長い間、自分の中で大きな位置を占めていました。それから学校の授業を受けなければならなくなって、そのことを少し忘れてしまいました。それから、そう、たくさん泳ぎました。

Interviewer (25:23): Oh, okay. So there was a swimming club? ああ、なるほど。では、水泳クラブに入っていたのですか？

Nathalie (25:26): Yeah, kind of, yeah. Yeah, I did a few competitions in Belgium that time, and then I quit because it was too much swimming. Also, also, uh, I, I, I, I just realized that I get, I get bored very easily. So I need a lot of change. ええ、そんな感じです、ええ。ええ、当時はベルギーでいくつかの大会に出場しましたが、あまりにも泳ぎすぎて辞めてしまいました。あと、あと、ええ、私、私、私、私は自分がとても飽きっぽいことに気づいたんです。だからたくさんの変化が必要なのです。

Interviewer (25:44): A lot of (mental) stimulation. たくさんの（精神的な）刺激ですね。

Nathalie (25:45): You know the *akishō* thing. あの、飽き性というやつです。

Interviewer (25:46): Yeah. Oh, yeah. ええ。ああ、そうですね。

Nathalie (25:51): Definitely, 100%. I don't even know if it exists in English, but I, yeah, I get bored very easily. 間違いなく、100%そうです。英語にその言葉があるのかさえ分かりませんが、でも、ええ、私はとても簡単に退屈してしまいます。

Interviewer (25:53): No. Um, I, I think you would need more words to explain it in English, but yeah, you need constant stimulation. Your brain needs to be stimulated. You need to be doing something

challenging, something new. ないですね。ええと、英語で説明するにはもっと多くの言葉が必要だと思いますが、でもそうですね、絶え間ない刺激が必要なわけです。あなたの脳は刺激される必要があります。何かやりがいのあること、何か新しいことをしている必要があるのですね。

Nathalie (26:04): Yeah. Yeah. People call it like ADHD or that kind of things now. I don't think I'm ADHD. I just love doing different things that I like. So, yeah. You know, for example (holds up a ceramic plate). Yeah. Uh, or I did those, um, windows in, in (the other room). It's the same. I work with glass and ceramics, um, because I need to hold my hands busy when I'm not doing anything else. そうなんです。そう。最近の人はそれを ADHD とかそういう風に呼びますよね。私は自分が ADHD だとは思いません。ただ自分が好きな様々なことをするのが大好きなだけです。だから、そう。ほら、例えば（陶芸のお皿を掲げる）。そう。あ、あるいは（別の部屋の）あの、ええと、窓を作ったりもしました。それと同じです。私はガラスや陶芸の仕事をしています、ええと、他に何もしていない時は、手を動かして忙しくしている必要があるからです。

Interviewer (26:31): Well, okay. We're going to talk all about that. Uh, but first, uh, why did you come to Japan? How did you get from, from, from Belgium to Osaka? さて、分かりました。そのことについては後でたっぷりお聞きします。ええ、でもまず、ええと、なぜ日本に来たのですか？ どうやってベルギーから、から、から大阪へやってきたのでしょうか？

Nathalie (26:43): Um, okay. There's many, many reasons, so, uh, I'm going to try and sum, sum up a few. Um, so I was very lonely and, um, bored. Again. Uh, Belgium is a small country, so you can get easily everywhere around, and, uh, Europe was too, too close. And then, uh, I love to travel. I, I discovered that around 17 years old, and then I started traveling like a crazy person. And I traveled to Japan. And then I traveled again. And in the meantime, I was taking classes. So I studied Japanese for six years in evening class, you know, those like two hours a week. ええと、分かりました。たくさん、たくさんの理由があるので、ええ、いくつか要約、要約してみます。ええと、それで私はとても孤独で、ええと、退屈していました。またですが。ええ、ベルギーは小さな国なので、どこへでも簡単に行けてしまいますし、ええと、ヨーロッパは近、近すぎました。それから、ええ、私は旅行が大好きなんです。私、私は 17 歳くらいの時にそのことに気づいて、それから狂ったように旅行をし始めました。そして日本へ旅行しました。それからまた旅行しました。そしてその間、私は授業を受けていました。ですから、夜間クラスで 6 年間日本語を勉強したんです、ほら、週に 2 時間といったような形式のものです。

Interviewer (27:29): Oh, wow! おお、すごいですね！

Nathalie (27:31): Okay. So you had like a basics. I could say, *"Natari desu,"* and then I had, I could speak *hyōjungo*, you know. I can't anymore. It's gone. It's somewhere else now. But, um, and, and then, and then, you know, I moved. I, I, I traveled four times: uh, 1 month, 3 months, 2 months, 3 months. そう。だから基礎のようなものはありました。私は「ナタリです」と言えましたし、それから、標準語を話すことができたんです、ほら。今はもう無理です。消えてしまいました。今はどこか別の場所に行ってしまいました。でも、ええと、それから、それから、何というか、移住しました。私、私、私は 4 回旅行しました。ええと、1 ヶ月、3 ヶ月、2 ヶ月、3 ヶ月です。

Interviewer (27:49): Oh, wow. So these are long trips. This is not just, you know, a weekend. おお、すごい。これらは長期の旅行ですね。ただの、ほら、週末の旅行ではない。

Nathalie (27:53): I was working at the TV in Belgium at the time as a editor, as a cutter for news, uh, and for documentaries, that kind of things. So I wasn't really like, you know, um, busy. I could take holidays. 当時はベルギーのテレビ局でエディターとして、ニュースの、ええ、それからドキュメンタリーなどのカッティングの仕事をしていました。ですから、何というか、ええと、忙殺されているわけではありませんでした。休暇を取ることができたのです。

Interviewer (28:09): So that job gives you a lot of free time? では、そのお仕事のおかげでたくさんの自由時間があったのですか？

Nathalie (28:12): Yeah, I was a freelance. I could, I could whatever I wanted. And they would take me back. So I was happily enough, and I did that. And then the fourth time happened to be, um, I arrived in Japan on that trip on the 13th of February 2011. Gone three months. That includes a huge earthquake, a catastrophic accident, uh, at nuclear power plant. And, um, so if you take it all together, I spent a very weird trip, right? My plan… I, so I went north to Hokkaido for the first time at that time. And I arrived right after *yuki matsuri*, so mess, messed up my plans. I didn't see it. But I, I met a friend, uh, that I knew from before. And so we took a road trip. Uh, we went to a very small town. Um, this is going to be a long story. Let's just switch it. Anyway, I'm coming back to Kansai, which is my, kind of, HQ. My base there, uh, and then it happens, right? 11th of March, it happens. 11th of March happens. I'm blocked because I wanted to go north again and visit, uh, Akita, and can't, I can't move. And we have those groups with friends. Uh, I have, I have a, I have very good friends that I still love very much. They're not in Osaka anymore, but, uh, they have, um, theater group, and they have those meetings, like, about, “how should we react? What's, what's the point, uh, with, with what's happening now?” Um, and it's very, very interesting. And so I'm like, "Hm, actually like it here." And you know, there's like options. And, and then I meet a Belgian guy. Uh, I have a, I have a dad in Japan, like my dad in Japan. Uh, I lost my, my actual dad, um, around that time as well. But, and then, he kind of became kind of a dad for me. And he said, "You want to live in Japan? Just get the visa and come over." He said that. ええ、フリーランスでしたから。私は、私は自分のやりたいように何でもできました。そして彼らはまた私を雇ってくれました。ですから十分に幸せでしたし、そうしていました。それから 4 回目の時だったのですが、ええと、その旅で私は 2011 年の 2 月 13 日に日本に到着しました。3 ヶ月間の滞在予定です。そこには巨大な地震、原子力発電所での破滅的な事故、ええ、が含まれていました。そして、ええと、だからそれらをすべて合わせると、私はとても奇妙な旅を過ごしたことになりますよね？ 私の計画は…私は、その時初めて北の北海道へ行きました。そしてちょうど雪まつりの直後に到着したので、予定がめちゃくちゃ、めちゃくちゃになってしまいました。見られなかったのです。でも私は、ええ、以前から知っていた友人に会いました。それで私たちは自動車旅行をしました。ええ、とても小さな町に行きました。ええと、これは長い話になりそうですね。別の話に切り替えましょう。とにかく、私は自分の、いわば本拠地である関西に戻ってきました。そこが私の拠点だったのですが、ええ、そしてそれが起こるわけです、そうでしょう？ 3 月 11 日、それが起こります。3 月 11 日が起こります。私はまた北へ行って、ええと、秋田を訪れたかったので足止めを喰らい、動けなくなってしまいました。そして私たちには友人たちとのグループがありました。ええ、私には、私には、今でもとても大好きな大親友たちがいます。彼らはもう大阪にはいませんが、ええ、彼らは、ええと、劇団をやっていて、「私たちはどう対応すべきか？ 今起きていることの、ええ、意味は何だろう？」といったことについての集まりを開いていました。ええ、そしてそれはとても、とても興味深いものでした。それで私は「うーん、実はここが気に入っているな」と思ったんです。そして、ほら、選択肢のようなものが見えてきます。そして、それから私はあるベルギー人の男性に出会います。ええ、私には、私には日本にお父さんがいるんです、日本での私のお父さんのような存在です。ええ、私は実の、実の父親を、ええと、ちょうどその頃に亡くしていました。でも、それから、彼が私にとってある種のお父さんのようになってくれたのです。そして彼は言いました。「日本に住みたいのか？ ならビザを取って来ちゃいなよ」と。彼がそう言ったんです。

Interviewer (30:20): He said that. 彼がそう言ったのですね。

Nathalie (30:21): Not me. I can put it on him. 私ではありません。彼のせいにできます。

Interviewer (30:23): Oh, okay. ああ、なるほど。

Nathalie (30:26): So I said, "All right, daddy, I'm going to go back." Uh, since I'm half French, I can use the working holiday visa, right? だから私は言いました。「分かったわ、お父さん、一度戻るね」と。ええ、私はフランスとのハーフなので、ワーキングホリデービザが使えますよね？

Interviewer (30:32): Yeah, yeah, yeah. ええ、ええ、その通りです。

Nathalie (30:34): So, I have that magical, uh, option. Beep. Uh, I'm going back. Uh, my flight is on the 26th of April. Uh, and you know, because I'm French, the French embassy wants all the French people, because of Fukushima happening, all the French people to go back. But I don't. And my mom calls the embassy, and like, “I'm okay, I'm not going back. My flight is on the 26th of April, I'm staying in Japan until then. I'm in Kansai, I'm safe, I'm okay.” だから、私にはあの魔法のような、ええと、選択肢があるんです。ピピッ。ええ、私は戻ります。ええ、私の飛行機は 4 月 26 日です。ええ、そしてご存知のように、私はフランス人なので、フランス大使館は福島（の事故）が起きたために、すべてのフランス人に帰国してほしいと考えていました。でも私は帰りませんでした。そして私の母が大使館に電話をして、「私は大丈夫です、帰りません。飛行機は 4 月 26 日なので、それまで日本に滞在します。私は関西にいて、安全ですし、大丈夫です」と伝えてくれたんです。

Interviewer (30:59): Yeah, yeah. ええ、ええ。

Nathalie (30:59): Flying back on the 26th of April, getting back to Brussels, I'm making up my papers. The next week I'm going to the French, uh, Japanese embassy in, in Paris, in France. And a week later, I got my visa. 4 月 26 日に飛行機で戻り、ブリュッセルに帰って、書類を準備しました。その翌週、私はフランスの、ええと、フランスのパリにある日本大使館に行きました。そして 1 週間後には、ビザが手に入りました。

Interviewer (31:13): That's incredibly fast. それは信じられないほど早いですね。

Nathalie (31:15): Yeah. So, on the 17th of July—cuz I booked my flight already the day I got back to Brussels—I'm leaving again for Japan, but to live. And that's how I moved. はい。それで、7 月 17 日に——ブリュッセルに戻ったその日にすでに飛行機を予約していたので——私は再び日本に向けて出発しました。今度は住むために。そうやって私は移住したのです。

Interviewer (31:27): Oh, okay. So, you first… ああ、なるほど。では、あなたは最初に…

Nathalie (31:31): I didn't have a job, you didn't have a house, nothing. 仕事もありませんでしたし、家もありませんでした、何も。

Interviewer (31:30): But on a working holiday visa? でもワーキングホリデービザで？

Nathalie (31:31): Yeah. そうです。

Interviewer (31:32): Oh, okay. So, did you know a lot about Japan before you came? You mentioned that you studied, uh, for six years in night school. ああ、なるほど。では、来る前に日本のことをたくさん知っていたのですか？ 夜間学校で、ええと、6 年間勉強したとおっしゃっていましたね。

Nathalie (31:41): Well, I studied Japanese. The grammar, so I know everything about conditionals and passive and verbs, and I can, I can do a lot of stuff with the language. But, um, that's it. ええと、私は日本語を勉強しました。文法を、ですので条件形や受動態、動詞については何でも知っていますし、その言語を使ってたくさんのことができます。でも、ええと、それだけです。

Interviewer (31:53): So, about the culture? では、文化については？

Nathalie (31:54): Nothing. 何も。

Interviewer (31:55): So, growing up, did you have any…? では、子供の頃、何かそういったものは…？

Nathalie (31:57): Nothing. 何もありませんでした。

Interviewer (31:58): So, you didn't watch Japanese anime or read manga? では、日本の国のアニメを見たり漫画を読んだりはしなかったのですか？

Nathalie (32:01): No. We had almost no TV at home sometimes. But then, um, I don't remember much. I still don't know nothing about manga and anime. I'm sorry. しませんでした。家には時々テレビがほとんどないこともありましたから。でもそれから、ええと、あまり覚えていません。私は今でも漫画やアニメについては何も知りません。ごめんなさい。

Interviewer (32:10): Yeah, me neither. Uh… ええ、私も同じです。ええと…

Nathalie (32:14): Yeah, but you know, I should at some point. ええ、でもほら、いつかは知るべきですよね。

Interviewer (32:15): Should you? そうすべきですか？

Nathalie (32:16): Well, in my job now, uh, it actually relates, so, yeah, I should, I should. Japanese culture is important; manga and anime are very important. It's a huge part of Japanese culture, and I understand that. I'm just not, uh… I need a teacher. I need someone to teach me the good stuff. Well, I know, I know a few because my husband… Being not really a fan, and he understands me, uh, to a certain point, and… But he, he told me about a few very good movies that I would recommend to anyone who starts with it. And obviously, we're big Ghibli fans because that works in Europe. So, obviously— ええと、今の私の仕事、ええ、に実際に影響してくるので、そう、ええ、知るべき、知るべきですね。日本の文化は重要ですし、漫画やアニメは非常に重要です。それは日本文化の巨大な一部であり、それは理解しています。私はただ、ええと…私には先生が必要です。誰か良い作品を教えてくれる人が必要です。まあ、いくつか知っては、知ってはいます。夫が…それほど熱狂的なファンというわけではなく、彼は私のことを、ええと、ある程度まで理解してくれていて、それで…でも彼は、これから始める人に勧めたい、いくつかの非常に良い映画について教えてくれました。そして当然ながら、私たちは大のジブリファンです。ヨーロッパでも人気がありますから。だから、当然——

Interviewer (32:50): Oh, so you did watch Ghibli movies? おお、ではジブリ映画は見られたのですね？

Nathalie (32:52): Um, not much before, no. ええと、以前はそれほど見ませんでしたね、はい。

Interviewer (32:54): Oh, okay. So, uh, so you personally, you didn't grow up watching these things or reading comic books. But in Belgium, in Brussels, was there a lot of Japanese popular culture? ああ、なるほど。では、ええと、あなた個人としては、そういったものを見たりコミック本を読んだりして育ったわけではないと。でもベルギーのブリュッセルには、日本のポップカルチャーがたくさんあったのですか？

Nathalie (33:09): At the time, not that much. Well, they were discrete. But okay, there are actually two or three events. Uh, when I was two, we had a Japanese neighbor family. 当時はそこまで多くありませんでした。まあ、目立たない感じでした。でもそうですね、実際に 2 つか 3 つの出来事があります。ええ、私が 2 歳の時、隣の家に日本の家族が住んでいました。

Interviewer (33:17): Oh, okay. ああ、なるほど。

Nathalie (33:17): Worked at Toyota. Toyota has its headquarters in Europe, in Belgium. Right, north of Brussels. And they were here. Uh, Junko, uh, she's, I think, one year older than me. Uh, at the time she was three, I was two. She was going to the Japanese school, and we were invited a few times. And my mom was friends with her mom. She teach French to her mom kind of, you know, just in a play (casually). Not really, not for real, like no, no class. And then, so… I think Junko still lives in Nagoya, but I'm not sure. I should, I should contact her. Um, so there's that. And then the first time I came to Japan on a holiday, just for fun, uh, when I came back, my father told me he had been to Japan. My father. トヨタで働いていました。トヨタはヨーロッパの本部をベルギーに置いているんです。ちょうどブリュッセルの北に。そして彼らがここにいました。ええ、ジュンコさん、ええ、彼女は確か私より 1 つ年上です。ええ、当時彼女が 3 歳で、私が 2 歳でした。彼女は日本人学校に通っていて、私たちは数回招待されました。そして私の母は彼女の母と友達でした。母は彼女の母にフランス語を教えていました、何というか、ほら、ただの遊び（カジュアルな感じ）として。本格的なものではなく、本当の、授業のようなものではありません。それから、それで…ジュンコさんは今でも名古屋に住んでいると思いますが、確信はありません。彼女に連絡を、連絡を取るべきですね。ええと、そんなことがありました。それから私が初めて休暇で、ただの遊びで日本に来た時、ええ、帰国した後に、父が日本に行ったことがあると教えてくれたんです。私の父親が。

Interviewer (34:04): Oh, and you didn't know that? おお、そしてあなたはそれを知らなかったのですか？

Nathalie (34:05): I didn't know that. 知りませんでした。

Interviewer (34:06): Oh, interesting. おお、面白いですね。

Nathalie (34:08): Yes. My father was a very interesting character. Um, very, very shy and quiet. Um, volcano type. And, um— はい。私の父はとても興味深いキャラクターでした。ええと、ものすごく、ものすごくシャイで静か。ええと、火山タイプでした。そして、ええと——

Interviewer (34:18): Volcano meaning— 火山というのは、つまり——

Nathalie (34:20): Oh yeah. Outbursts. ああ、そうです。爆発するんです。

Interviewer (34:22): He would blow up and no one would see it coming? Yeah, yeah. I can relate to that. 怒りが大爆発して、誰もそれが来ると予想できないような？ ええ、ええ。それは共感できます。

Nathalie (34:26): You know, some people are volcanoes. And, um, interestingly, he told me he had been to the expo in the '70s in Osaka. ほら、世の中には火山のような人がいますよね。そして、ええと、興味深いことに、彼は 70 年代に大阪の万博に行ったことがあると言ったのです。

Interviewer (34:35): In Osaka? The first, the first *banpaku*. Oh, wow. Okay. 大阪でですか？ 最初の、最初の万博ですね。おお、すごい。なるほど。

Nathalie (34:40): And that touched me a lot, um. And interestingly, I actually worked at the expo, um, site afterwards in Japan. So, yeah, to me, that's a very big link. Very short but very big link. And from that trip, actually came a letterer; he met people and they corresponded for a while, and I had an address. Yeah. そしてそのことに私はとても感動しました、ええと。そして興味深いことに、私はその後、日本で実際に万博の、ええと、会場で働いたんです。だから、そう、私にとってそれは非常に大きな繋がりです。とても短いけれど非常に大きな繋がり。そしてその旅から、実際には

文通相手ができました。彼は人々と出会い、しばらくの間文通をしていたので、私には住所がありました。ええ。

Interviewer (35:05): Um, what about, uh, for example, food? Uh, can you get… I mean, were you exposed to Japanese food before coming over? ええと、例えば、ええと、食べ物はどうですか？ ええ、手に入る…つまり、こちらに来る前に日本食に触れる機会はありましたか？

Nathalie (35:13): No. いいえ。

Interviewer (35:16): Not at all. So you really, you experienced everything after you came? 全くなかったのですね。では、あなたは本当に、来た後にすべてを経験したのですね？

Nathalie (35:19): Yeah, after my first trip, for sure. はい、最初の旅の後に、間違いなく。

Interviewer (35:21): Oh, okay. So what was— ああ、なるほど。では、何が——

Nathalie (35:22): I may have been to some sushi place, but it must have been Chinese, so… This is not what brought me to Japan. Obviously. It's the language. どこかのお寿司屋さんに行ったことはあったかもしれませんが、そこは中国系のお店だったに違いないので…これが私を日本に導いたわけではありません。明らかに。言語です。

Interviewer (35:31): That's very interesting. So it wasn't… Many people do come over for the popular culture, but that wasn't you. Okay, that's… それはとても興味深いです。では…多くの人はポップカルチャーのためにこちらへ来ますが、あなたは違ったのですね。なるほど、それは…

Nathalie (35:37): Not at first. Um, so yeah, I, I, I, I took those classes, right? And so the third year, after the third year, I did my first Japanese holiday trip that one month, where I definitely said, "All right, I really love this place. I need to go on with the classes. I need to learn more Japanese. I want to communicate with the people." That, that, that actually originated in Japan the first time I came. 最初は違いました。ええと、そう、だから私は、私は、私は、私はあの授業を受けていたんですよね？ それで 3 年目、3 年目の後に、最初の日本の休暇旅行であるあの 1 ヶ月間の旅をして、そこで私ははっきりと「よし、私はこの場所が本当に大好きだ。授業を続けなきゃいけない。もっと日本語を学ばなきゃ。人々とコミュニケーションを取りたい」と思ったんです。それ、それ、それは実際に私が初めて来た時に日本で生まれた感情です。

Interviewer (36:01): So tell me about your first impression after you came to Japan. では、日本に来た後のあなたの第一印象について教えてください。

Nathalie (36:09): To be honest with you, it was kind of a “wow.” 正直に言うと、何というか「わあ！」という感じでした。

Interviewer (36:13): So, what was it that, that stuck out? What surprised you? では、何が、何が印象に残りましたか？ 何に驚きましたか？

Nathalie (36:19): I don't know, because it felt half natural. Like, it felt very natural to me to be in Japan. And also I was lost because I understood my language skills were so bad that I couldn't communicate effectively enough. What was very interesting was, um, I met those friends I was talking to you about. Those theater guys, right after my first trip. They were in Belgium for a tour? 分かりません。半分は自然に感じられたからです。例えば、日本にいることが私にとって非常に自然に感じられました。それと同時に、自分の語学力が非常に低くて十分なコミュニケーションが取れないと分かっていたので、途方に暮れてもいました。非常に興味深かったのは、ええと、先ほどお話ししたあの友人たちに出会ったことです。あの劇団の人たちに、最初の旅のすぐ後に出会いました。彼らはツアーでベルギーに来ていたのかな？

Interviewer (36:49): Oh, interesting. おお、面白いですね。

Nathalie (36:48): They're fantastic. And I met them at a concert, Japanese music concert, obviously. And I basically, I think that was a link, like the main link came from that encounter. 彼らは素晴らしいです。そして私は彼らにコンサート、当然ながら日本の音楽のコンサートで出会いました。そして私は基本的に、それが繋がりだった、主要な繋がりがあの出会いから生まれたのだと思っています。

Interviewer (37:04): And so these are… It's a Japanese theater group. では、これらは…日本の劇団なのですね。

Nathalie (37:07): Yeah. They don't exist anymore. Uh, the group itself has been disbanded, but people are still working in the same kind of ways they were before. Group evolved as well over the last, you know, 10, 15 years. They've been active for a very long period of time. And now I miss them. I haven't seen them for a while. But, uh, those people are my main link, probably, with my coming to Japan and my, you know, they are like the very basics of it. Yeah, definitely. はい。彼らはもう存在していません。ええ、グループ自体は解散してしまいましたが、人々は今でも以前と同じような方法で活動しています。グループもこの、ほら、10 年、15 年の間に進化しました。彼らは非常に長い期間活動していました。そして今、彼らが恋しいです。しばらく会っていませんから。でも、ええ、あの人たちが私の主要な繋がりです、おそらく、私が日本に来たことと私の、ほら、彼らはそのまさに基礎のようなものです。ええ、間違いなく。

Interviewer (37:34): So tell us now a little bit about what you're doing. You've, you started out in Osaka, and now you're here in Aso City. Uh, what are you… Uh, so you're married to a Japanese man, you have a small daughter. What are you doing these days? では、あなたが今何をされているのか、少し教えてください。あなたは、あなたは大阪からスタートして、今はここ阿蘇市にいます。ええ、あなたは何を…ええ、ではあなたは日本人の男性と結婚されて、小さなお嬢さんがいます。最近は何をされているのですか？

Nathalie (37:56): Okay. Um, so short story first, in coming to Japan, I did a lot of jobs. You know, with the working holiday, there is no real like limit to what you can (do)… Well, yes, there are, but, but in that sense, you can actually do a lot of stuff. And I did a lot of stuff. And then I had to renew my visa, right? So, um, I started working in a video company, uh, that rents out, um, what do you call that, um, equipment. 分かりました。ええと、ではまず短い話から。日本に来て、私はたくさんの仕事をしました。ほら、ワーキングホリデーでは、できることに本当の意味での制限はあまり（ない）…まあ、はい、ありますが、でもそういう意味では、実際にたくさんのことができます。そして私はたくさんのことをしました。それからビザを更新しなければならなくなりましたよね？ だから、ええと、私は映像会社で働き始めました、ええ、そこは、ええと、何て呼ぶのかな、ええと、機材をレンタルする会社です。

Interviewer (38:23): Oh, so not like a Tsutaya or something like that, but like a real… Like a… Camcorders, microphones… ああ、TSUTAYA とかそういったものではなくて、本物の…ような…ビデオカメラとか、マイクとか…

Nathalie (38:31): Projectors. And I did projection mapping. That's how I ended up at the expo park. The Tower of the Sun. You know? I projected on that a few times. プロジェクターです。そしてプロジェクションマッピングをやりました。そうやって私は万博記念公園に行き着いたのです。太陽の塔です。知っていますか？ 私はあれに数回プロジェクション（マッピング）をしました。

Interviewer (38:43): Really? So, Taiyo no Tō? 本当ですか？ では、太陽の塔に？

Nathalie (38:46): I love it so much. Sorry, I love it so much. Um, so yeah, that, that's one of my biggest, let's say, um, happiness at that time. Right. But the job was really hard, so I kind of turned, uh… I quit.

Unfortunately, I had to quit. It wasn't doable anymore. Um, it was very, very hard. Like, we didn't, we didn't have holidays. あれが大好きなんです。すみません、あれが本当に大好きなんです。ええと、だからそう、それ、それが当時の私の最大の、何というか、ええと、幸福の一つでした。その通りです。でも仕事は本当にハードだったので、私は何というか方向転換して、ええ…辞めました。残念ながら、辞めざるを得ませんでした。もう続けられませんでした。ええと、ものすごく、ものすごくハードだったんです。例えば、私たちには、私たちには休みがありませんでした。

Interviewer (39:08): So just work all the time? では、ただずっと働いていたのですか？

Nathalie (39:09): All the time. I don't want to—you can believe that, but *buraku kigyō*. So… cut it (cut this part). Uh, but it's true. And then I moved to a design company, uh, located right in front of Umeda Station. Um, Hilton Plaza, highest level, you know. And was paid like almost twice as much from previous job, just by coming into the company every morning, and…. ずっとです。言いたくはありませんが——信じてもらえるでしょうけど、ブラック企業でした。だから…カットして（この部分はカットして）ください。ええ、でも本当のことです。それから私はデザイン会社に移りました、ええ、梅田駅の真ん前にある会社です。ええと、ヒルトンプラザの、最高層のところ、ほら。そして毎朝会社に行くだけで、前の仕事のほぼ 2 倍くらいの給料をもらっていました、そして…

Interviewer (39:31): And so a sign company means you were…? では、看板（サイン）の会社ということは、あなたは…？

Nathalie (39:34): Design. Designing a lot of… It could, could be anything, but I work with video, so yeah, I kind of did that kind of things. But, uh, well. Over time, it was interesting, but still, um, it was a bit a complicated situation. And I got pregnant. Uh, yeah, sorry. In the meantime, so, married and pregnant. Um, and then I gave birth to my daughter in Osaka. *Osaka de umareta*. And then, uh, my mother-in-law had a heart attack. This is what prompted our coming back to Aso City. My husband had worked for 25 years in Osaka, since his studies. He's a hairdresser, and he came back… Well, we came back for his mom and dad, right? So that's how we got here. And then I'm here facing a volcano. This is my, my, my mother-in-law's house right behind here's, right? He's born here, right? My husband is born here. This is his place. We're… It's, it's a fantastic place, but there's like literally no work for me. So I first went to Minamioguni, and I worked with the city. I was installing, um, IT technologies in rice fields to check levels of water to be able to get information for the farmers when they work, blah, blah, blah, blah. It's a long story, but that's what I did. デザインです。たくさんの…何でもあり得ましたが、私は映像を扱っていたので、そう、何というかそういったことをやっていました。でも、あ、まあ。時間が経つにつれて、面白くはなりましたが、それでも、ええと、少し複雑な状況でした。そして妊娠しました。あ、はい、すみません。その間に、だから、結婚して妊娠しました。ええと、そして私は大阪で娘を出産しました。大阪で生まれたんです。それから、ええ、義理の母が心臓発作を起こしました。これが、私たちが阿蘇市に戻ってくるきっかけになりました。夫は学生時代から 25 年間、大阪で働いていました。彼は美容師で、戻ってきた…まあ、彼の父と母のために戻ってきたんですよね？ そうやって私たちはここに来ました。そして私はここで火山と向かい合っています。ここは、私の、私の、私の義理の母の家がすぐこの後ろにあるんです、そうでしょう？ 彼はここで生まれたんですよね？ 私の夫はここで生まれました。ここが彼の場所です。私たちは…ここ、ここは素晴らしい場所ですが、文字通り私のための仕事が全くありません。だから私は最初に南小国町に行き、町役場と一緒に働きました。私は、ええと、農家の人たちが働く時に情報を得られるように、水の量を確認するための IT 技術を田んぼに設置していました、なんたらかんたら。長い話になりますが、それが私のしたことです。

Interviewer (40:59): Right. I thought you were working in some kind of, you know, tourism capacity, but no, you were doing something… そうですよね。てっきり観光関係のお仕事をされているのかと思っていましたが、そうではなくて、何か別のことを…

Nathalie (41:05): Not yet there. Patience. It takes time, I know. (In Minamioguni) that's where I am. But then… Well, I did, I did originate the project, but at the same time, like, “I just, I should have worked with languages, too bad. Okay.” And then we're like, "Okay, we have to go get back to this place because grandma's here, she's alone. That's not okay." So, “I'm sorry, Minamioguni. So sorry. I’m quitting.” Then we get here, and there's, like, literally nothing but actually building our own thing. So we kind of scraped money together. Still not paid completely, but all right. Um, and we built this. So, my husband has a cafe, the head of the shop, and I basically, I'm going to teach classes. That was my idea. And at the same time, while we're building this, I get a call from a guy that says, uh, "Do you want to go on a monitor tour?" Which means you're going to be a client, a foreign customer, uh, tourist, ah, going on a tour in Kumamoto. And it was Kumamoto and Miyazaki or whatever. And we, we shoot pictures and we say, "Yeah, this is good. This is no good," blah, blah, blah. *Anketo*, *anketo*, *anketo*. まだそこまで行ってなかったんです。忍耐ですね。時間がかかるのは分かっています。（南小国に）そこにいたんですよ。でもそれから…まあ、自分でそのプロジェクトを立ち上げはしたものの、同時に「やっぱり語学関係の仕事をすればよかった、残念。まあいっか」という感じで。そしたら「おばあちゃんがここに一人でいるから、戻らなきゃ。一人にさせるわけにはいかない」ということになって。それで「南小国のみなさん、ごめんなさい。本当にごめんなさい、辞めます」となったんです。ここに来てみたら、文字通り本当に何もない状態で、自分たちで一から作るしかありませんでした。だから何とかお金をかき集めて。まだ完全に払い終えてはいますが、まあ大丈夫です。ええ、それでこれを作りました。主人がカフェをやっていて、彼がお店の責任者で、私は基本的に教室を開いて教える予定です。それが私のアイデアでした。そしてこれを建てているまさにその時、ある男性から電話がかかってきて、「モニターツアーに参加しませんか？」と言われたんです。つまり、自分が客、外国人客、あ、観光客になって、熊本のツアーに参加するということです。熊本と宮崎だったかな。写真を撮って、「うん、これは良い。これはダメ」とか何とか言うんです。アンケート、アンケート、アンケート。

Interviewer (42:19): Oh, okay. So, right. So, the purpose is to get feedback from tourists. あ、なるほど。つまり、目的は観光客からフィードバックをもらうことですね。

Nathalie (42:21): Yeah. About that project. Is this going to, is it going to sell well? But I'm biased. I'm very Japanese. そうです。そのプロジェクトについてです。これがうまく売れるかどうか。でも私は偏見があるというか、感覚がかなり日本人化しているんですよね。

Interviewer (42:29): You've been here already 10 years at that point. その時点でもう 10 年も日本にいらっしゃったわけですからね。

Nathalie (42:33): More than 10 years. Yeah. 10 years. More than 10 years. And then I'm like, "Yeah, all right." And then I'm like, "Hey, you know, it's interesting. We had the tour guide, and it's, it's interesting." All right. And then they call me back, and they're like, "Okay, we have another monitor tour, but we want you to guide a bit in Aso. Can you do something quick because it's next week and we got nothing?" So I was like, "All right, I'm, I'm going to do it." And I randomly, I, I kind of very randomly (thought), "Okay, we can bicycle from here to there, blah, blah, blah, we're going to do, um, spring water tour." Why not, right, um? Monzen-*machi*, then you go to Kokuzo, and then whatever, you do your thing.” All right, done. And then I'm like, in the meantime, I've accepted the job, and I work at *michi-no-eki* a few, a few days a month. Just, you know, um, basics. And it's interesting because I get the food in Aso, I get touristic info, um. I meet fantastic people, really. Um, Kana-*san*, you know Kana-*san*? 10 年以上です。そう、10 年、10 年以上ですね。それで私は「ええ、いいですよ」と。それから「ねえ、これ面白いよ。ツアーガイドがついていて、すごく興味深い」ってなったんです。そしたらまた連絡があって、「また別のモニターツアーがあるんだけど、阿蘇で少しガイドをしてもらえませんか？来週のことで何も決まっていないから、急ぎで何か考えてもらえますか？」と言われて。私は「分かりました、やります」と答えました。それで、本当に適当に、かなりランダムに「よし、ここからあそこ まで自転車で行って、あれこれして、湧水ツアーをやろう」って思いついたんです。いいですよね？「門前町に行って、それから国造に行って、あとは適当に自分のやりたいことをやる」。よし、これで完成。そうこうしているうち

に仕事を引き受けることになって、月に数日、道の駅で働くようになりました。ほんの、なんていうか、基本的な仕事です。でも面白かったですよ。阿蘇の食べ物や観光情報が手に入りますし、本当に素晴らしい人たちに出会えます。あの、佳奈さんってご存知ですか？

Interviewer (43:36): Yeah, she's great. ええ、彼女は素晴らしい人ですね。

Nathalie (43:37): She's, she's a delight. And it's her. She called me one day, or it was we, we were working together, and she says, "I've got a Belgian group of people coming. We're going to see the sunrise. Do you want to guide with me?" I'm like, "Yeah," you know. Like 4 in the morning. "Yeah, sure. Call me anytime." And so I was at the time Tagoyama, at that fake bridge thing, watching a fantastic sunrise with 10 Belgian, 15 Belgian people, a fantastic Japanese guide, Kana-*san*, and me with those three, three people, with those foreigners. We know Japan, they don't. We're in front of that fantastic sunrise. We had the *unkai*, the sea of clouds. Perfect. "Okay, I want to do this." And so it clicked, but it took me years. I should have been doing this since the beginning, you know. 本当に素敵な人です。彼女ですよ。ある日電話をくれたか、一緒に働いていた時だったかに、彼女が「ベルギー人のグループが来るの。日の出を見に行く予定なんだけど、一緒にガイドしない？」って言ったんです。私は「やる！」って。朝の 4 時とかですけどね。「うん、もちろん。いつでも呼んで」って。それでその時、田子山のあの偽物の橋みたいなところにいて、10 人か 15 人のベルギー人、素晴らしい日本人ガイドの佳奈さん、そして私とその 3 人の…その外国人たちと一緒に、素晴らしい日の出を見ていたんです。私たちは日本を知っているけれど、彼らは知らない。その見事な日の出を前にして、雲海も出ていました。完璧でした。「よし、これがやりたい」と。そこでピンと来たんですが、何年もかかってしまいました。最初からこれをやっておくべきだったんですよね。

Interviewer (44:30): Well, you certainly have the skill set to do it. まあ、あなたには確実にそれをこなすスキルセットがありますからね。

Nathalie (44:34): At, at that time. Not yet. Not yet. Not yet. And so, um, and I miss, I miss speaking my language. No, I miss speaking French. And those Belgian people are there, we speak French and Dutch, too, of course. And it, it was really good. あの時点では、まだ, まだ、まだそこまででではなかったです。それから、自分の言葉を話せないのが寂しかったんです。いえ、フランス語を話すのが恋しかった。そこにベルギーの人たちがいて、フランス語と、もちろんオランダ語も話して。本当に良かったです。

Interviewer (44:46): Yeah. When you, when you communicate in your mother language, the first language that you learned, or the first languages in your case, it's just a different feeling. そうですね。母国語、つまり最初に学んだ言語、あなたの場合なら最初のいくつかの言語でコミュニケーションをとる時は、やっぱり感覚が違いますよね。

Nathalie (44:55): Right. It, it, it… And I, I missed it again. I had that sudden crisis, if you want, of not, not meeting enough foreigners. Oh, wait. And that was like, that was just the end of Corona, so Japan just, just reopened its doors. We were going to get flooded; we didn't know it, we didn't know it. And so Kana-san had me, invite me, right? And she says, "You know, in 2 days there's another job. Can you take it?" And I'm like, "What? What? What?" And so she gave me a job, and I started that way, doing those one days where, uh, I present *Aso jinjya*, *Aso-san no kakkō*. We go around, blah, blah, blah. And then there was another job. Do you know the preservation center for the highlands? The grasslands of Aso? そうなんです。それが…また寂しくなってしまって。外国人に十分会えていないという、ちょっとした突然の危機を迎えたんです。あ、待って。それはちょうどコロナの終わり頃で、日本がちょうど入国制限を解除したばかりの時期でした。これから観光客が押し寄せることになるなんて、私たちは知る由もありませんでした。それで佳奈さんが私を誘ってくれたんですよね。彼女が「ねえ、2 日後に別の仕事があるんだけど、引き受けられる？」って。私は「え？何？何？」ってなって。そうして彼女が仕事をくれて、そんな風に 1 日ガイドを始めま

した。阿蘇神社や阿蘇山の格好を紹介したり。あちこち回って。それからまた別の仕事がありました。阿蘇の草原の、あの維持管理センターをご存知ですか？

Interviewer (45:46): Oh, okay. I wasn't aware of the association, but I know of the area. The center, you mean? あ、なるほど。その協会のことは知りませんでしたが、場所は分かります。センターのことですね？

Nathalie (45:52): Yeah, it's right in front of *Aso miruku fakutori*. そうです、阿蘇ミルクファクトリーの真ん前にあります。

Interviewer (45:54): Oh, not the museum? おや、博物館ではなくて？

Nathalie (45:55): Yeah. It's a center for preservation, right? So, they do a lot of good, good job. Um, so, and I get to talk to French people about the highland, the grasslands. It's a small gig, you know. It's like, it's not really well paid anyway. But I have to get there. And, and I'm going, and then there I meet someone who brings those groups. So, a tour guide that goes all around Japan. And he says, "I've been doing this for 20 years. I want you to work for me." ええ、保全のためのセンターです。とても素晴らしい活動をされています。それで、私はフランスの人たちに草原について話す機会を得ました。単発の小さなお仕事です。そんなに給料が良いわけでもありません。でも経験を積まないといけないので行きました。そうしたら、そこでそういうツアーグループを連れてくる人に出会ったんです。日本全国を回っているツアーガイドの方で、彼が「私はこれを 20 年やっている。君に私のところで働いてほしい」と言ってくれたんです。

Interviewer (46:24): Great! 素晴らしい！

Nathalie (46:25): Here we go. And here we are. So, it's been a fantastic year. And, um, since I'm kind of a beginner, I'm still green behind my ears, I have to work a lot. Uh, I have to get used to, you know, how you do that, and how I could, you know, make it better. And I'm, I tend to be pretty critical about myself and about the work and about what we do. So, uh, well, it's going slowly, but it's going. そこから始まって、今に至ります。本当に素晴らしい 1 年でした。ただ、私はまだ初心者というか、駆け出しで経験が浅いので、たくさん勉強しなければなりません。その、仕事のやり方や、どうすればもっと良くできるかということに慣れていかないといけなくて。私は自分自身や仕事、自分たちのやっていることに対してかなり批判的になりがちなんです。だから、まあ、ゆっくりですが進んでいます。

Interviewer (46:53): It's, it seems like a tour guide is, uh, very important not just for helping tourists, but in, sort of, interfacing between local residents and local societies and the tourists that are coming in to experience Japan. ツアーガイドというのは、単に観光客を助けるだけでなく、地元の住民や地域社会と、日本を体験しに来る観光客との間を繋ぐインターフェースのような役割として、とても重要であるように思えます。

Nathalie (47:10): Yeah, from a different culture. So, yeah, I always, always, on the first day, have, I have my Japanese drill. I'm like, "Are there any smokers?" "Yes." "No." "No, we're good." "Yes. All right. We don't smoke there, there." And then, "all right, you're in Japan. We say hello. We communicate, and we have manners, and we do this and that, and silent in these places." Were you can do this, were you can't do that. And I explain the whole situation. And then, last but not least, "we have earthquakes." Right. So that's the kind of things. And then, and then we go on the trip, and we have one day here, and then we go one day there, and the people get, you know, a vision of what Japan could be. Basically, my deal is: I have my Japan. You have yours, right? You have your own, very own Japan. You have lived a certain experience that you built a certain way, meeting certain people, having those experiences, right? I have mine. Those people mostly are new to it. So what do I do? I kind of help them build the foundation of their own Japan. This is my idea of, of being a tour guide. I actually give them hints and little information trips, like little, little drops of info to build their own Japan. ええ、異なる文化から来た人たちとの間ですね。だから私はいつも、最初の日に必ず「日本での決まり事」を

叩き込みます。「タバコを吸う人はいますか？」「はい」「いいえ」「私たちは大丈夫です」「そうですか、分かりました。あそこやあそこでは吸えません」といった具合に。それから「いいですか、皆さんは日本にいます。挨拶をしましょう。コミュニケーションをとり、マナーを守り、あれこれをして、こういう場所では静かに」と。ここでできること、できないこと。状況をすべて説明します。核心として最後に、しかしとても重要なこととして「地震があります」と伝えます。そう、そういうことです。それから旅に出て、ここに1日、あそこに1日と滞在するうちに、皆さんは「日本とはこういうものかもしれない」というイメージを膨ませていきます。基本的に、私の考えはこうです。私には私の日本がある。あなたにはあなたの日本がある。そうでしょ？あなただけの、特別な日本があるはずです。特定の出会いや経験を通じて、ある方法で築き上げてきた独自の体験がありますよね。私にもそれがある。ツアーに来る人たちのほとんどは初めてです。じゃあ私は何をするかというと、彼ら自身が自分の日本を築くための土台作りを手伝うんです。これが私の考えるツアーガイドのあり方です。ヒントやちょっとした情報、言わば情報のしずくを少しずつ与えて、彼ら自身の日本を組み立てていってもらうんです。

Interviewer (48:26): Right. Their own Japan. Their own personalized experience of another culture. なるほど。彼ら自身の日本。異文化における、自分流にパーソナライズされた体験ですね。

Nathalie (48:31): Exactly. So that's what I do. That's my job now. その通りです。それが私のしていることで、今の私の仕事です。

Interviewer (48:34): No, that's fascinating. What is your opinion of over tourism and some of the problems that are now talked about in the news? いやあ、興味深いですね。オーバーツーリズムや、最近ニュースで取り沙汰されているいくつかの問題についてはどうお考えですか？

Nathalie (48:45): I think this should be regulated as soon as possible. I don't want to work. Well, like, and I'm very lazy, I'm a human being, right? So, it's true, I really don't want to work. And also, I wish we could actually… That very own Japanese experience, your own Japan, I wish it could be the best. And unfortunately, when you have too many people, it, it, to be honest, it's going to go bad for the visiting people. It's going to go bad for the Japanese. That's the worst. If Japanese people get to hate every single tourist that comes through, then, then why, why are we, you know, still bringing in people? Just close out the country. Then, just don't, don't, because it, it should be a pleasure. Life should be a pleasure. I always say, and I've discovered this recently. But still, I'm saying it almost every day: we only live once. できるだけ早く規制すべきだと思います。私は働きたくありません。まあ、私はとても怠け者な人間ですからね。だから本当に働きたくないというのは本音です。それと、本当に…その人だけの日本での体験、あなた自身の日本というものが、最高のものであってほしいと願っています。でも残念なことに、人が多すぎると、訪れる人々にとっても悪い結果になりますし、日本人の皆さんにとっても悪くなります。それが最悪の事態です。もし日本人がやってくる観光客を一人残らず嫌うようになってしまったら、一体なぜ私たちは今も人を呼び込んでいるのでしょうか？いっそのこと国を閉ざしてしまえばいい。そう、受け入れるのをやめるべきです。だって、それは喜びであるべきだから。人生は喜びであるべきです。私はいつも言っていますし、最近になって気づいたことでもあるのですが、それでも毎日のように言っています。人生は一度きりです。

Interviewer (49:39): True that. 本当にそうですね。

Nathalie (49:40): Probably, right? おそらく、そうでしょ？

Interviewer (49:41): Well, in, in the present, in our present bodies. まあ、現在の、この今の体においてはね。

Nathalie (49:42): Yeah, this character is only going to be here once. It needs to enjoy itself, right? So, uh, and it's the same for every job you could have, every, every life path you choose. And me, in the touristic, um, agencies I work with, in, in, in the groups of people I meet, in those experiences, I wish everyone could have the best experience. And, most of all, the local people should be fine with it. Because I don't want to bring some stupid, you know, very noisy *urusai* French people over to Japan so that they go, "Ahhh." No. That's not my point. Those people should come and enjoy the fantastic country it is, with all its good and bad points, like everywhere. I mean, I'm from Belgium. I know bad countries. We, we have… Oh my god, Belgium can be horrible, but it's fantastic, too. ええ、このキャラクターでいられるのは一度きりです。楽しまなきゃ損ですよね。だから、どんな仕事であれ、どんな人生の選択であれ、同じことが言えます。そして私は、自分が関わっている観光エージェンシーにおいて、出会うグループの人たちにおいて、そうした体験の中で、すべての人が最高の経験をしてほしいと思っています。端的に言って、何よりも、地元の住民がそれで納得している必要があります。だって、私はおバカで、ものすごく騒がしくてうるさいフランス人を日本に連れてきて、彼らに「あーー」なんてやってほしくないですから。そんなのは本意ではありません。そういう人たちには、この素晴らしい国に来て、どこにでもあるような良い点も悪い点も含めて楽しんでもらいたいのです。私はベルギー出身ですから、ひどい国のことは知っています。私たちは…もう、ベルギーは恐ろしい国になり得ますが、同時に素晴らしい国でもあるんですよ。

Interviewer (50:38): So, here's a question. Paris gets lots of tourists, uh, places in Italy get lots of tourists, probably too many. We're not the only place that suffers from over tourism. そこで質問なのですが、パリにはたくさんの観光客が来ますし、イタリアのあちこちにも多くの、おそらく多すぎるほどの観光客が訪れます。オーバーツーリズムに悩まされているのは、ここだけではありません。

Nathalie (50:52): Probably not. おそらくそうではないでしょうね。

Interviewer (50:53): Uh, do those places have infrastructure that we don't have, or how do they address this problem? そういった場所には、ここにないインフラがあるのでしょうか、あるいは彼らはこの問題にどう対処しているのでしょうか？

Nathalie (51:01): Communication. コミュニケーションです。

Interviewer (51:02): Communication? コミュニケーションですか？

Nathalie (51:03): I think everything is related to that. So that's my view of this world, right? Um, well, in Paris, and it may be complicated in other places, but, um, first of all, Japan doesn't speak English, enough to be able to accept all those people. When you check in in a hotel, basic example, and you have a person in front of you, he or she or they have been there for 15 minutes, 20 minutes, and it doesn't go through. Well, when you have one person a day in that hotel, that's okay. What about when you have thousands of them? I, two days ago, I was staying in a hotel in Tokyo. They have a thousand rooms. That means at least, uh, 1,500 people, if not more. Oh my god. So yes, you need very fluent, speedy communication. And I think Japan is a little late on that. すべてはそこに関係していると思います。それが私の世界観です。まあ、パリでもそうですし、他の場所では複雑なこともあるかもしれませんが、何よりもまず、日本はこれだけの人々を受け入れるのに十分なほど英語が通じません。ホテルのチェックインを例に挙げると、目の前にいるお客さんとのやり取りが 15 分、20 分経っても一向に通じない。そのホテルにやってくるのが 1 日に 1 人だけなら問題ありません。でも、それが何千人もいたらどうでしょう？私は 2 日前、東京のホテルに泊まりました。客室が 1000 室あるんです。ということは、少なくとも 1500 人、下手をすればもっと多くの人がいることになります。なんてことでしょう。だからこそ、非常に流暢でスピーディーなコミュニケーションが必要なのです。日本はその点において少し遅れていると思います。

Interviewer (52:08): A little bit? ほんの少しですか？

Nathalie (52:09): It's not, it's not a negative point; it's something we need to adjust, but fast. We need, we need communication to go faster and easier. We have technology for it. We have everything. You know, the most people I meet in my groups, they, they rent those Wi-Fi things because they want to be able to use Google Translate. They know Japan can't communicate in English. Right. So, that's one thing. But then, I feel, I don't know, but the over tourism part… If, if I were able to, if I had the power, I would limit the number of people. I'm sorry to say it, but I would, I would limit the number of people drastically. 否定的な意味で言っているのではなく、調整しなければならない点だということです、それも迅速に。もっと速く、簡単にコミュニケーションが取れるようになる必要があります。そのためのテクノロジーはありますし、すべて揃っています。私のツアーグループで出会うほとんどの人は、Google 翻訳を使いたいからポケット Wi-Fi をレンタルしています。日本人は英語でコミュニケーションが取れないと知っているからです。そう、それが一つ。でも、それから、どうでしょうね、オーバーツーリズムの部分に関しては…もし私にその権限があるなら、人数を制限します。こんなことを言うのは心苦しいですが、私なら人数を劇的に制限するでしょう。

Interviewer (52:57): Just because we don't have, we don't have the infrastructure or the communication ability to handle the numbers that are coming right now. 現在押し寄せている人数を処理するためのインフラやコミュニケーション能力が、今の私たちにはないから、ということですね。

Nathalie (52:58): Take Aso. So how many people stay over? So many people come and see the volcano. They go through, there's no place to stay, there's no hotels. Amakusa has a lot of hotels and restaurants and everything, but they have half (the tourism). I don't know the right numbers… Not that, that much tourism as in Aso. We have so many people coming. We have a volcano. Of course, people come. 阿蘇を例に挙げてみましょう。どれだけの人が宿泊していますか？本当に多くの人が火山を見に来ます。彼らは通り過ぎるだけで、泊まる場所がない、ホテルがないんです。天草にはたくさんのホテルやレストランなどがありますが、観光客は半分（の割合）です。正確な数字は分かりませんが…阿蘇ほど多くの観光客はいません。阿蘇にはものすごくたくさんの人が来ます。火山があるのですから、当然人々はやってきます。

Interviewer (53:19): Sure. It's something to see. 確かに。一見の価値がありますから。

Nathalie (53:21): It's such a fantastic place. It's like Hawaii, but not too hot, and, well, in the summer… But you know Aso is really beautiful. The only thing is, we don't have the capacity. And I wish I had a hotel with like 800 rooms I can fill up like I wanted, but that's not how I want it to be. I want Aso to be cool. I want, I don't want that many people coming. I want them to come to enjoy quality. Not, not those huge, you know, queues of people. Like, was it, uh, Golden Week lately, right? 3 hours to get to the volcano. 本当に素晴らしい場所です。ハワイのようですが、そこまで暑くなくて、まあ夏は暑いですけど…でも阿蘇は本当に美しい。唯一の問題は、受け入れ能力がないことです。800 室くらいあるホテルを所有して、思い通りに満室にできたらいいなと思うこともありますが、そんな風になってほしくはありません。阿蘇には素敵でいてほしい。そんなにたくさんの人に来てほしくないんです。量ではなく、質を楽しみに来てほしい。あの長蛇の列に並ぶためではなく。例えば、最近だとゴールデンウィークがそうでしたよね？火山にたどり着くまでに 3 時間ですよ。

Interviewer (53:54): Well, it seems like, uh, if you're the government in Tokyo or even in Kumamoto, you see the economic benefit, but you don't see the cost to local people. そうですね、東京の政府や熊本の自治体にしても、経済的なメリットは見えても、地元の人々が払っている代償は見えていないようですね。

Nathalie (54:06): Local people, but also the people coming. Is it enjoyable to go 3 hours in a car to see a crater? I mean, yes, Aso is fantastic, but is it really worth it, getting nervous and, and cringey and, and go, "Still not there," blah, blah, blah? “Oh, on the way back, it's three hours again.” God, no, don't do it. Just don't, don't come. It's all right. I mean, we'll have other people another time. I mean, life is still long

and, well, depending on people, but… You know, I think we should enjoy life more. And, um, in general, governments don't think that way because, like you said it, there is, there is benefits to having more people coming in. And I understand why Mount Fuji now makes you pay. Of course, they should have them pay. I'm not against taking money. I'm definitely not. I, I think it's a good thing, and they should have done it before. And it's only a small thing, and it could help really, you know, maintain things. A lot of people go volunteer to help Mount Fuji go smoothly, you know, every year. So, um, I think money should be involved. I think everything is, could, could be monetized. It's, it's always money. It's a way of, of, of living, you know. 地元の人もそうですが、来る人たちにとってもそうです。火口を見るために車で 3 時間も移動するのが楽しいですか？つまり、そう、阿蘇は素晴らしいところですが、イライラしたり、うんざりしたりしながら、「まだ着かないの」なんて言うだけの価値が本当にあるでしょうか？「あ、帰りもまた 3 時間かかるんだ」。とんでもない、そんなのやめましょう。いっそのこと、来ない方がいい。大丈夫です。また別の機会に別の人たちが来てくれますから。人生はまだ長いですし、まあ人によりますけど…でも、もっと人生を楽しむべきだと思うんです。それに、一般的に政府はそういう風には考えません。おっしゃる通り、多くの人が来ることで利益が生まれるからです。富士山が今、通行料を徴収している理由もよく分かります。当然、払ってもらうべきです。私はお金を取ることに反対していません。決してそんなことはありません。良いことだと思いますし、もっと早くやるべきでした。少額のことですが、環境を維持するのに本当に役立ちます。毎年、富士山を円滑に維持するためにたくさんの人がボランティアに行っていますよね。だから、お金を絡めるべきだと思います。何でもマネタイズできる、あるいはすべきです。いつだって結局はお集まりお金の話になります。それが生きるということですから。

Interviewer (55:16): Sure. 確かに。

Nathalie (55:16): We live in a capitalist society. Let's not, "Oh no, no money, no, no." Let's just agree with each other. We can talk about money, it's fine, right? And I get paid as well to do my job. You do too. It's fine, right? But numbers, unfortunately, um, if, if you have a defined plan on where you're going. And I take, we go to Kiyomizudera, nothing fun about that. You just, you know, sardines in a box. Like we say in French. No, it's really English. But that's the thing. It, it, to me, too much is too much. A lot of tourism is good; the country is going to benefit from it, and we need it. We, we need foreign investment. We need people to come and spend their money. But if they come to not spend their money, why, why is that any good? I have friends from Singapore coming in: they rented a very nice hotel in Minamiaso. They're spending money. They have reserved a very good restaurant, they're spending money. And you know, it, it's, I think that's important. 私たちは資本主義社会に生きています。「あらいやだ、お金の話なんて、ダメダメ」というのはやめましょう。お互いに認め合いましょう。お金の話をしてもいいじゃないですか。私も仕事をしてお給料をもらっています。あなたもそうです。それでいいんですよね？でも残念なことに、人数に関しては、もしどこに向かうかの明確な計画がないと大変です。清水寺に行くとしたら、何の楽しさもありません。ただ箱に詰め込まれたイワシ（満員電車状態）のようになるだけです。フランス語の言い回しみたいですが、いや、本当は英語ですね。でもそういうことです。私に言わせれば、多すぎるものは多すぎます。ある程度の観光は良いことですし、国もその恩恵を受けます。それが必要なのです。海外からの投資が必要です。人々に来てもらってお金を使ってもらう必要があります。配置転換的に、もしお金を使わないために来ているのだとしたら、それに何の意味があるのでしょうか？シンガポールから友人が来ているのですが、彼らは南阿蘇のとても素敵なホテルを借りました。お金を使っています。とても良いレストランを予約して、そこでもお金を使っています。そういうことが重要だと思うんです。

Interviewer (56:17): So you're saying we could transition from, sort of, anybody can come, low-cost tours, to charging more money and getting a different type of tourist coming in that spends more money? つまり、誰でも来られるような低価格のツアーから、より多くのお金を請求し、より多くのお金を使ってくれる別のタイプの観光客を呼び込む形へと移行できるのではないか、ということですね？

Nathalie (56:31): It's one option. Well, we could continue this way, but it's not going to go well. I feel, I feel, you know… It's not a pushback; it's just saying, "Hey, we're selective. We are Japan, right?" Japan has so much to offer. But at the same time, many of the *onsen* are getting, you know, less energy. There's, it's, the, the warm hot springs are not that hot anymore. And we don't have enough water sometimes. And, so we know we have resources, but they're not, they're not, they're not… Until now, we thought everything was like, you know, forever. 一つの選択肢です。このまま続けることもできますが、うまくいかなくなるでしょう。私はそう感じています。これは拒絶ではなく、「私たちは選別をしています。ここは日本ですから」と言っているだけです。日本には提供できるものがたくさんあります。しかし同時に、多くの温泉でエネルギーが減少してきています。温泉の温度が以前ほど高くなくなってきているんです。時には水が不足することもあります。私たちは資源があることを知っていますが、それらは決して…これまでは、すべてが永遠に続くかのように思っていました。

Interviewer (57:07): Yeah. そうですね。

Nathalie (57:08): It's going… You, you can, you can take as much as you want. No, it's not true. Nature also has a stop. So Japan can put a stop to tourism as well and just say, "All right, if you want to come in, look, these are the rules." Japan is good with rules. いくらでも好きなだけ取っていい、なんてことはありません。自然にも限界があります。ですから、日本も観光に歯止めをかけて、「分かりました、もし来たいのなら、これがルールです」と言えばいいのです。日本はルールを作るのが得意ですから。

Interviewer (57:24): Certainly good at making rules. 確かに、ルールを作るのは得意ですね。

Nathalie (57:24): Yes. Yes. So let's do it! Let's make good rules for Japan so that we protect this country, protect the resources, protect the people. I mean, I think the, the, the Japanese government can do that. They have the power to do it. Because people are going to pay to come to Japan. そうです、そうです。だからやりましょうよ！この国を守り、資源を守り、祭りとして人々を守るために、日本のための良いルールを作りましょう。日本政府にはそれができるはずです。それを行う権限を持っています。なぜなら、人々はお金を払ってでも日本に来たがるからです。

Interviewer (57:43): Right. That's the one thing that we have right now that people really want. そうですね。それこそが、人々が今本当に求めている、私たちが持っている強みです。

Nathalie (57:43): Yeah. And the yen is so low now that you want them to spend it. Come on! Yeah. Because hotels' prices go up because tourists can pay for it. Local tourists, what do they do? Japanese people can't travel anymore. I think that's not fair, to be honest with you. And I don't want it to be a price for tourists and a price for, for, for locals. That's not what I'm talking about. Right, because that would be a very easy solution, but it's not fair. But if we want to help the Japanese population, then we need to kind of consider tourism in a different way. Um, it can be ecological, it can be… I mean, there's a lot of stuff possible. And, and I need, I think it, it asks for a lot of organization and energy that needs to be put in by the government. So that's hard. I know it's hard; I'm not saying it's an easy thing to do. ええ。それに今は円安ですから、お金を使ってもらいたいですよね。もっと使って！って。観光客が払えるからという理由でホテルの価格が上がっています。国内の観光客はどうするのでしょう？日本人が旅をできなくなってしまいます。正直に言って、それは公平ではないと思います。私は、観光客向けの価格と地元の人向けの価格を分ければいいと言っているわけではありません。それは安易な解決策ですが、公平ではありませんから。でも、もし日本の人たちを助けたいのであれば、観光というものを少し違う視点で考える必要があります。環境に配慮したものにすることもできますし、色々なことが可能です。それには政府による多大な組織力とエネルギーの投入が必要になると思います。だから難しい。難しいのは分かっていますし、簡単なことだと言っているわけではありません。

Interviewer (58:33): No, no. Uh, changing the subject a little bit: this idea of *omotenashi*. When you hear *omotenashi*, uh, what do you think? Or a better way of putting it is: is Japanese *omotenashi*, is this, uh, concept, is it, uh, is, is it appropriate for tourists coming in? いえいえ。ええと、少し話を変えますが、このおもてなしという考え方についてです。おもてなしと聞いて、どう思われますか？あるいは、言い方を変えると、日本のおもてなしというこの概念は、海外から来る観光客に適しているでしょうか？

Nathalie (58:59): Yes, of course. Probably what I enjoy the most about Japan. Me, as a foreigner. Still, still, I'm very Japanese, but at the same time, I'm still me, and, um, I can judge with a foreign brain sometimes. And I must say, having service that high should not go away. This is something that is, to me, if I were Japanese, it would be my pride to be able to say, "Yeah, we do it this way in Japan, haha," you know? And I want to say it for the Japanese people, because nowhere on earth you get that. Nowhere. It's like, no way, no way, no, nobody can do that. はい、もちろんです。おそらく、外国人としての私が日本で一番楽しんでいる部分ですね。今でも私はかなり日本人的ですけど、同時に自分らしさもあって、時々外国人の脳で判断することができます。それにしても、これほど質の高いサービスはなくすべきではないと言わざるを得ません。これは、もし私が日本人だったら、「そう、日本ではこういう風にするんだよ、ハハ」って胸を張って言える誇りになりますよね。日本人の代わりに私が言いたいくらいです。だって、地球上のどこを探してもそんなものは手に入りませんから。どこにもないです。絶対に無理、誰もそんなことできませんよ。

Interviewer (59:39): Not in Canada, that's for sure. カナダでは絶対に無理ですね。

Nathalie (59:41): Not in Belgium. Well, we're fun, but you know, yeah, we don't have the efficiency. And, and at the same time, there's again, because we don't have the communication skills in Japan, we are going to lose that. Because actually, *omotenashi* is communication. It's a way of making people feel welcome, whoever they are. There is no… As long as they stay in Japan and they spend their money here, if they are tourist here, we need to give them that opportunity to enjoy that. That's why I urge my friends: to spend their money on good hotels. Real Japanese experience sits there, not in those cheap whatever you can choose. Well, you know, and to some people, that's the Japanese experience, too. So, I'm not, that's not judgment. But just, you know, if you really want to know Japan, I think you need to spend the money for it. And I don't want to go high-end class, blah, blah, blah, because in the end, that you can get worldwide. If you have money, you can get the *omotenashi* of everywhere on earth, right? But in Japan, there is some that goes naturally, yeah. In very good restaurants, you're going to find that's such a delight, to have someone that actually listens to you and just enjoys, you know, serving you the good stuff they make. And that is something, um, you can't get anywhere. And I think we need to keep that and protect that as much as we can. And Aso has that a lot, in a lot of places. But you have to be able to communicate that with foreigners. Which means you need language skills, you need communication skills, you need PR. Because now we work on those things (holds up a smartphone), right? So if you need PR here, you need to know how to do that. Not sure, actually, all of us who can do that. ベルギーでも無理です。私たちは楽しい国民ですけど、効率性はありませんから。それと同時に、今の日本にはコミュニケーション能力が欠けているので、このままではそれを失ってしまうのではないかと思います。というのも、実はおもてなしとはコミュニケーションそのものだからです。どんな人であれ、歓迎されていると感じてもらうための方法なんです。そこには何の…日本に滞在してお金を使ってくれる限り、彼らが観光客であるなら、それを楽しむ機会を提供するべきです。だから私は友人たちに、良いホテルにお金を使うよう勧めています。本物の日本体験はそこにあります。安くて適当に選べるような場所にはありません。まあ、一部の人にとってはそれも日本体験なのでしょうから、批判しているわけではありません。ただ、本当に日本を知りたいなら、それなりのお金をかける必要があると思うんです。高級クラスがどうこう言いたいわけではありません。そんなものは結局、世界中で手に入りますからね。お金があれば、地球上のどこででもおもてなしは受けられますよね？でも、日本には自然に滲み出るものがあります。とても良いレストランに行くと、自分の話にちゃんと耳を傾けてくれて、心を込めて作った美味しい料理を提供することを楽しんでくれる人がいて、本当に嬉

しくなります。それはどこに行っても得られないものです。私たちはそれを維持し、できる限り守っていく必要があると思います。阿蘇には、多くの場所にそれがあふれています。でも、それを外国人に伝えられなければなりません。つまり、語学力やコミュニケーション能力、PR 力が必要だということです。今はこういうもの（スマートフォンを掲げる）を使って仕事をする時代ですよね？だからここで PR が必要なら、そのやり方を知る必要があります。実際、私たち全員がそれをできているかは怪しいところです。

Interviewer (1:01:21): Sure. Well, I mean, that's why you're here. I mean, this is… 確かに。だからこそ、あなたがここにいるわけですね。つまり、これは…

Nathalie (1:01:25): I'm also talking about Tokyo, right? Because in Tokyo, you can find places that are really like, off. It, it doesn't work. 東京のことも言っているんですよ。東京では、本当にずれているというか、上手くいっていない場所も見かけますから。

Interviewer (1:01:31): Well, this is the value that somebody like you brings, I think. なるほど、それこそがあなたのような人がもたらす価値なのだと思います。

Nathalie (1:01:34): Oh, I can try. お役に立てれば嬉しいです。

Interviewer (1:01:36): Yeah. Speaking about the challenges… For example, what challenges have you experienced building a new life here in, uh, in Aso? そうですね。課題といえば…例えば、ここ阿蘇で新しい生活を築く中で、どのような課題や苦労を経験されましたか？

Nathalie (1:01:47): Oh, it's going to go very, I'm going to go very concrete, um. My unfortunate knowledge, uh… I'm happy to know it, but, um… We do things differently in Europe, right? And basic, very concrete example: this building you see here. かなり具体的な話になりますね。私の残念な知識というか…知っていて良かったのですが…ヨーロッパではやり方が違いますよね。基本的な、とても具体的な例を挙げると、ここに見えるこの建物です。

Interviewer (1:02:07): Sure. なるほど。

Nathalie (1:02:09): That was hard. これが大変だったんです。

Interviewer (1:02:09): You're saying getting it built (was hard)? 建てるのが大変だったということですか？

Nathalie (1:02:11): Yeah. The way I wanted. Yeah, because I understand there are rules for, uh, seismic activity. I understand, of course. And I want to go with those. And then, at the same time, I want my house to be insulated, to not consume energy, to… God, we're far away (here in Japan). Um, so that to me was a very big challenge, but I'm happy we got, kind of, close to what we wanted. Again, still under construction, but, well, we're getting there. And I feel like there's a lot of—what do you call that, um—misunderstandings actually happening because, uh… What do you call that? Okay, again, my, my knowledge is my knowledge, yours is yours. When we communicate, we actually try to find common ground, right? And sometimes you, you lack some information. For example, if I don't have it, and we cannot get to that common ground. So, and that happens a lot with me lately, uh, in my job, in, uh… There's a lot of stuff that I, I think could be avoided, a lot of, um, time loss, which translates to energy and money loss, um, that actually just stem out of misinformation and miscommunication. I think these are actually the hardest challenges I find in my daily life in Japan. ええ、自分が望む通りにするのが。もちろん、地震に対する規則があるのは理解していますし、それに従いたいとも思っています。でも同時に、家を断熱して、エネルギーを消費しないようにしたくて…でも日本は（その点において）本当に遅れています。だから、それは私にとって非常に大きな挑戦でしたが、私たちが望んでいたものにかなり近い形にできて嬉しく思っています。まだ建設中ですが、まあ、完成に近づいています。誤解がたくさん生じているように感じます。何て言うんでしょ

う？私の知識は私のもの、あなたの知識はあなたのものです。コミュニケーションをとる時、私たちは共通の基盤を見つけようとしますよね。でも、時々情報が不足していることがあります。例えば、私に情報がなくて、その共通の基盤に達することができないような場合です。最近、仕事でも何でも、そういうことがよくあります。避けられたはずのことがたくさんあって、多くの時間のロスがあり、それがエネルギーやお金のロスにつながっていますが、それは実は誤った情報やコミュニケーション不足から生じているだけなのです。これらが、私が日本での日常生活で直面している最も大変な課題だと思います。

Interviewer (1:03:31): So, is this work-related, or… それは仕事関係のことですか、それとも…

Nathalie (1:03:33): Oh, private as well. It doesn't matter, it's, it's, it's actually everywhere. If you don't know how to, well, you know, give information to someone so that they can communicate with you, you're lost. プライベートでも同じです。どちらでも関係なく、本当にどこにでもあります。相手が自分とコミュニケーションをとれるように情報を伝える方法を知らなければ、どうしようもなくなります。

Interviewer (1:03:45): Can you give me, uh, an example? 何か例を挙げていただけますか？

Nathalie (1:03:47): Oh, right. Concrete example. Um, very concrete, very basic. Uh, I don't know, I'm coming back from my trip and, uh, I didn't give the information that I left a plant outside that my husband had to water for the 3 weeks I'm, I'm gone. I'm coming back, it's dead. そうですね、具体的な例を。とても具体的で基本的なことです。旅行から帰ってきたとします。私が留守にする 3 週間の間、夫に水をやってもらわなければならない植物を外に出しっぱなしにしたという情報を伝えていませんでした。帰ってきたら、枯れていました。

Interviewer (1:04:06): So, this is interpersonal communication just between you and your husband? つまり、これはあなたとご主人の間の対人コミュニケーションの話ですね？

Nathalie (1:04:13): But this can happen on any level. Uh, when I work with someone and they ask me to do a task but they don't give me the papers for it, I'm going to be lost. でも、これはどんなレベルでも起こり得ることです。誰かと一緒に仕事をしていて、あるタスクを頼まれたのに、そのための書類を渡されなかったら、私は困ってしまいます。

Interviewer (1:04:20): Sure. 確かに。

Nathalie (1:04:21): And I feel that sometimes, um, in Japan, it's rooted in those rules we have. That, uh, you have to do something a certain way, but that is not well communicated. And so sometimes you have this mismatches challenges. そして、日本では時々、それが私たちの間にあるルールに根ざしているように感じます。あることを特定のやり方でやらなければならないのに、それがうまく伝えられていない。その結果、こうしたミスマッチによる課題が生じることがあります。

Interviewer (1:04:37): Yeah. I've always said there's this giant book of rules on how to live in Japanese society that nobody wrote and nobody has given to us. And so you just find out by making mistakes, and you find out the hard way, it seems to me. Like, it seems that the way you learn to be Japanese is you go to Japanese elementary school, middle school, and high school. And by the time you get out, you have a pretty good idea of how to function. But if you come into society without that experience, you just have to learn it all. ええ。私はいつも、日本社会で生きていくためのルールが書かれた巨大な本があるけれど、それは誰も書いていないし、誰も私たちに渡してくれないと言っています。だから、間違いを犯すことで初めて気づくし、手痛い経験を通して知ることになるように思えます。まるで、日本人になるための方法を学ぶには、日本の小学校、中学校、高校に通うしかないようです。そこを卒業する頃には、社会でどう振る舞えばいいか大体分かっています。低も、その経験なしに社会に入ると、すべてをゼロから学ばなければなりません。

Nathalie (1:05:09): Yeah. And in, in the most… Well, I think some Japanese people suffer from it, too, It's not limited to foreigners coming into Japan, not knowing what to do. Um, you know, as a tourist, it's very enjoyable. You paid for it, you're enjoying the thing, all right. Once you come here and live here, all you need to know about the, the rules, right? Yeah. Uh, but as a Japanese, you're supposed to know the rules. So when that goes wrong, when you don't have the information to kind of build on it, I think that's the worst you can find as a social situation, because you're lost, and you don't know why, and it, it doesn't fit, it doesn't work. ええ。それに、これは日本人の中にも苦しんでいる人がいると思います。何をすべきか分からないのは、日本に来る外国人だけに限ったことではありません。観光客としてなら、とても楽しいものです。お金を払って、その場を楽しめばいいだけですから。でも、ここに来て暮らすとなると、知っておくべきはルールですよね。ええ。ただ、日本人ならルールを知っているはずだと思われています。だからそれが上手くいかない時、それを組み立てるための情報がない時、それは社会的な状況として最悪な状態だと思います。どうしていいか分からず、理由も分からず、噛み合わなくて上手くいかないからです。

Interviewer (1:05:45): So are you saying if you were in, for example, in Europe or in Belgium, that people would tell you when you were doing things wrong, or they would tell you how to do it right, or they, they wouldn't assume that you knew what to do? Would it be different? つまり、例えばヨーロッパやベルギーにいたら、間違ったことをしている時に誰かが指摘してくれたり、正しいやり方を教えてくれたり、あるいは最初からやり方を知っているとは決めつけないということですか？違っていたでしょうか？

Nathalie (1:05:57): There are not that many rules to, to, you know, apply on your, your life to be able to live in that society. So you, you're free to do, um, it whatever way you want, and people are going to be upset with you, and that's okay. Here… その社会で生きていくために、自分の人生に適用しなければならないルールがそれほど多くありません。だから、どんな方法であれ自分の好きなように自由にやればいいし、それで誰かが怒ったとしても、それは置いておけます。ここでは…

Interviewer (1:06:21): It's not okay. 問題ありますね。

Nathalie (1:06:24): I have the feeling that, yeah, it's not okay. I mean, for, to me, the Japanese society I live in needs to follow those rules to be smooth and to turn around well, right? To, to go, go on. And when you go against it, you actually get, end up, you know, be put out. そんな気がします、ええ、ダメなんです。つまり、私にとって、自分が暮らしている日本社会は、円滑にうまく回っていくためにそれらのルールに従う必要がありますよね。続いていくために。そして、それに反することをすると、結局のところ、排除されてしまうんです。

Interviewer (1:06:41): It's a *mura hachibu* society. 「村八分」の社会ですね。

Nathalie (1:06:42): Yeah. ええ。

Interviewer (1:06:48): And, um, that has good points and bad points, I'm sure. それには良い点も悪い点もあるのでしょうね。

Nathalie (1:06:48): Yeah. And I just, I just love it when, you know, for say, "I don't understand it," and you're like, "No, that's how that works. There's nothing to understand, you should know it." Yeah, because those rules are, like you said, unscripted. So, um, I feel that that's, that's the biggest challenge. But at, at some point, I was probably (inaudible) because I'm a good chameleon. Yeah, um, that I have a huge advantage being a chameleon in Japan. I kind of match what stands in front of me. ええ。それに、例えば「理解できない」と言った時に、「いや、そういうものなんだよ。理解するものじゃなくて、知っておくべきことなんだ」と言われるのが、何というか面白いですね。おっしゃる通り、それらのルールは明文化されていないからです。だから、それが最大の課題だと感じています。でも、ある意味で私はカメレオンのように適応するのが得意なので、（聞き取り不

能）だったのかもしれません。ええ、日本でカメレオンでいられることは大きな強みです。目の前にあるものに自分を合わせることができるんです。

Interviewer (1:07:18): Right. Right. なるほど、なるほど。

Nathalie (1:07:19): Yeah. If you speak long enough with you, I'm going to get your accent. ええ。あなたと長く話しすぎると、あなたの訛りがうつってしまいますよ。

Interviewer (1:07:22): Well, talking about communication and you being sort of an unofficial communication specialist, it seems to me that, uh, communication in this country is, uh, is very scripted. You know, "Oh, I know that you're younger than me, okay, so, right, you're *kōhai*, I'm *senpai*, okay, we use this communication pattern." "Oh, you're the boss, I'm the employer." Whereas I think, uh, especially, uh, in North American society, you have to negotiate every relationship with each person, and that's troublesome, but you also get really good at doing that. Whereas here, I feel like everything is so perfectly scripted that when somebody comes in that doesn't know the script, just, communication just becomes very difficult. コミュニケーションの話が出ましたが、あなたが非公式のコミュニケーション専門家のような存在であると考えると、この国のコミュニケーションは非常に台本通り（スクリプト化されている）だと私には思えます。「ああ、あなたは私より若いんですね。なるほど、あなたは後輩で私は先輩だから、このコミュニケーションパターンを使いましょう」とか。「ああ、あなたがボスで、私は従業員ですね」といった具合に。一方で、特に北米の社会では、一人ひとりとすべての関係性を交渉して築かなければならず、それは面倒なことですが、そのおかげで交渉がとても上手になります。それに対してここでは、すべてがあまりにも完璧に台本化されているため、その台本を知らない人が入ってくると、コミュニケーションが非常に難しくなってしまうように感じます。

Nathalie (1:08:08): And at the same time, I play on that all the time. I tend to go, you know, *yaburu*. I just, I just… Yes, because in some ways, I can permit that, you know, I'm, I'm the character that can do that. I'm white. I'm female. I'm not supposed to know the rules, right? So, uh, sometimes I play on it so that we kind of get to, um, like a balanced point between people. Because it can happen that it's actually necessary to kind of reset, uh, realities, right. When you have too much of… But, um, I tend to naturally blend in. Like I said, I'm a chameleon, so I can very easily take either each position wherever it stands. そして同時に、私はいつもそれを逆手に取っています。よく「破る」ことをするんです。ただ単に…ええ、ある意味で私にはそれが許されているというか、そういうことができるキャラクターですから。私は白人で、女性です。ルールを知らなくて当然だと思われていますよね？だから、時々それをうまく利用して、人との間にバランスの取れた着地点を見つけようとします。現実をリセットすることが実際に必要な場合もあるからです。あまりにも…という時には。でも、私は自然に溶け込む傾向があります。先ほど言ったようにカメレオンなので、どの立場であっても、それがどこにあろうと簡単にその役回りを引き受けることができます。

Interviewer (1:08:58): Sure. Sure. なるほど, なるほど。

Nathalie (1:08:58): It's, it's pretty easy for me. It goes naturally. And so I understand that people are lost in that in Japan. And at the same time, I think Japanese people also sometimes have a hard time to evaluate where they stand towards someone. 私にとってはわりと簡単なことです。自然にできますから。だから、日本で人々がその中で戸惑ってしまうのも理解できます。同時に、日本人自身も、誰かに対して自分がどの位置にいるのかを推し量るのに苦労することがあるのではないかと思います。

Interviewer (1:09:11): Well, this whole idea of *kūki wo yomu*, it means that there's Japanese people who can't do it very well. So, it's not just people coming from outside, it's people born here that also have the same difficulties. まさに、この「空気を読む」という概念自体、それがうまくできない日本人がいることを意味しています。ですから、外から来た人たちだけでなく、ここで生まれた人たちも同じような難しさを抱えているわけですね。

Nathalie (1:09:24): Yeah. So, it's, it's not very human, right? Those, those rules, those unscripted but scripted rules, are not very human. They're, they're just rules. So if you take everyone and you get to a human point, you get magnificent communication. I mean, that, that's also called sake, right? ええ。だから、あまり人間らしくないですよね？それらの明文化されていないけれど決まっているルールというのは、人間味がありません。ただのルールです。だから、皆をそこから引っ張り出して人間的なレベルで向き合えば、素晴らしいコミュニケーションが生まれます。つまり、それは「*酒*」とも呼ばれるものですよね？

Interviewer (1:09:46): Nomunication (nomu + communication). 「ノミュニケーション（飲む＋コミュニケーション）」ですね。

Nathalie (1:09:48): Yeah. Yeah, it's true. The, the, the situations I've witnessed… Because I don't drink. ええ、本当にそうです。私が目撃してきた状況というのは…私はお酒を飲まないので。

Interviewer (1:09:51): Me neither. 私も飲まないんです。

Nathalie (1:09:54): Okay. Yeah. Um, but I've seen many of my colleagues completely drunk. And it's a joy, of course. It's, it's very joyous. It's very… But it also is proof of the fact that you can get to an equilibrium and just say things that are not supposed to be said to that person or those others in that situation only. But you can do it there. And I love that. And at the same time, I got bored very easily because, you know, drunk people. そうですか、ええ。でも、同僚たちが完全に酔っ払っているのをたくさん見てきました。もちろん、それは楽しいものです。とても愉快で、とても…でもそれは、その状況においてのみ、その人や他の人たちに対して本来言うべきではないことを言ってもいいという、ある種の均衡状態に達することができる証拠でもあります。そこではそれが許されるんです。私はそれが大好きです。でも同時に、酔っ払った人たち相手だと、私はすぐに退屈してしまいますが。

Interviewer (1:10:26): Are annoying. I say more, more than boring, they're annoying. 迷惑ですよね。退屈というよりは、迷惑だと言いたいです。

Nathalie (1:10:27): They're annoying. Um, and at the same time, I enjoyed those. I don't have those anymore because, uh, well, my husband gets drunk very easily, but, uh, I don't need that. But I've seen, I've seen the situation where those rules are just gone. Which means that they're not definitely necessary. And at the same time, if you want Japanese society to stay as a whole, we need them. I need them. I'm not Japanese at all, but I love those rules when I know that you're coming in, (you) are my guests. So, I'm serving this way. I propose this thing, um. All right. But watch out again: I'm a foreigner, so I don't do it right. And I'm okay with it, and I use it. Wrong, right? So, um, the… When I see my mother-in-law—again, she's 83, um—bend over. She's 83… For someone (of that age)… Because she, you know, uses those rules of someone being of a higher level and having to serve them. I'm like, "Wow, she's 83." She could say… You know, in Belgium they would say, you know, like, "I'm old enough, I can do whatever I want." This doesn't happen here. This never happens unless there is sake involved, uh. Alcohol is everything. But I'm very, um, what do you say? How do you say that in English, um, admirative of her for that. I admire her capacity of still, at 83, respecting those unscripted scripted roles. 迷惑ですね。でも同時に、そういう場を楽しんでもいました。今はもうそういう機会はありません。夫はすぐに酔っ払いますけど、私には必要ありませんから。でも、そうしたルールが完全に消え去る状況を見てきました。それは、ルールが絶対に不可欠というわけではないことを意味しています。それでも同時に、日本社会を一つのまとまりとして維持したいなら、それらが必要なんです。私にも必要です。私はまったく日本人ではありませんが、あなたが来ると分かっていて、あなたが私のゲストである時に、それらのルールがあるのが大好きです。だから、こういう風におもてなしをする。これを提案する、と。なるほど。低ここでも注意が必要で、私は外国人なので正しくできません。それでも構わないし、それを都合よく使っています。間違っていますよね？それで、私のお義母さんですが、彼女は 83 歳なのですが、腰をかがめているのを見る時…83 歳ですよ…その年齢の人が…なぜなら彼女は、相手が上の立場で

あり、自分が仕えなければならないというルールに従っているからです。私は「わあ、彼女は83歳なのに」と思います。彼女ならこう言ってもいいはずです…ベルギーなら「私は十分に歳をとったんだから、好きなようにさせてもらうよ」と言うでしょう。ここではそういうことは起きません。お酒が入らない限り、絶対に起きません。アルコールがすべてなんです。低私は彼女のそういうところに、英語で何と言うか、感嘆しています。83歳になっても、そうした明文化されていないけれど決まっている役割を尊重し続けている彼女の能力を尊敬しています。

Interviewer (1:12:09): Right. Right. なるほど、なるほど。

Nathalie (1:12:09): It's just, it's magnificent. And at the same time, for me, sometimes, it's a challenge to say, "No, grandma, now you go, you go to sleep. It's fine, right?" So I, I have to impose myself and say, "Right now, not you, let me do that." And okay, “I'm younger than you, I don't know, but I'm going to do that, all right?” Because in my society, people of 83 don't do that. They are the ones we respect, where, whatever their, their, um, what do you call that, level. It's disgusting, but whatever the class is, you know. And, and whoever is standing in front of them, uh, we don't, we don't have people of 83, you know, bake a whole day for this or that option, I don't know, ceremony, whatever it may be. So that's something I find very interesting, because in Japan, it's still there. And, and, and you can choose to go with it or against it. 本当に素晴らしいことです。それと同時に、私にとっては時々、「おばあちゃん、もう寝ていいよ。大丈夫だからね」と言うのが難しかったりします。だから、私は自己主張して「今はあなたじゃなくて、私にやらせて」と言わなければなりません。「私はあなたより若いし、よく分からないけど、私がやるからね、いい？」と。なぜなら私の社会では、83歳の人にそんなことはさせないからです。彼らは私たちが尊重すべき存在であり、その…何て言うか、立場がどうであれ関係ありません。嫌な言い方ですが、階級がどうであれね。検品、目の前に誰が立っていようと、83歳の人に丸一日かけてあれこれ準備をさせたり、儀式か何かのために働かせたりはしません。だから、日本ではそれがまだ残っているのが非常に興味深いです。そして、それに従うか、あるいは反するかを選ぶことができるのです。

Interviewer (1:12:56): Or choose a middle path, which it seems like you're doing. あるいは中道を選ぶかですね。あなたがされているように。

Nathalie (1:13:06): Well, I try sometimes to be in favor of my, my family, you know. I want her to be happy. She's going to live probably, um, less, less years, she has less years left than me. I don't want her to have to spend those last years of her life, yeah, on boring tasks that, that she shouldn't have to do. She, she shouldn't have to. (She should) enjoy herself, and that's it. I don't want anything else for her. Yeah. そうですね、時々は家族のためにそうしようと努めています。お義母さんには幸せでいてほしいんです。彼女は私よりも残された人生の年数が少ないでしょう。そんな彼女の人生の最後の数年間を、やらなくてもいい退屈な雑用に費やしてほしくありません。そんな必要はないはずです。楽しんでほしい、それだけです。彼女にはそれ以外何も望んでいません。ええ。

Interviewer (1:13:34): Well, changing the topic a little bit, uh, more and more people are coming into Japanese society, not just as tourists, which we talked about, but also to live and work here because of all the problems that, uh, Japan has with demographics. Uh, what advice would, what advice would you give to newcomers to Japan on how to, you know, how to adapt? では、少しトピックを変えまして、先ほど話した観光客としてだけでなく、日本が抱える人口動態の問題（少子高齢化など）のために、ここに住んで働くために日本社会に入ってくる人が増えています。新しく日本に来る人たちに向けて、どのように適応すべきか、何かアドバイスはありますか？

Nathalie (1:14:00): Let’s talk. Let's talk. I definitely, I'll, I'll have everyone over, yeah. Um, I have a, I have the feeling that, um, people who now come to Japan are still the same that I was. Kind of, um, you know, young and, um, some of them very with the illusion that Japan, like, has so much to offer and will be the perfect country without any, uh, problems. But again, as a foreigner, as you and me now know, that's not how it happens. So, um, yeah, the first thing is: if you are going to work, don't work for a

Japanese company unless there is a very clear HR department where you have foreigners already. Because I did it without. Um, have your contract translated to English, you can ask for that. It's, it's, it's normal to ask. 話をしましょう。ぜひ話をしましょう。皆さんを我が家に招いたいくらいです、ええ。今日本に来る人たちも、かつての私と同じような感じがしています。何というか、若くて、人によっては日本には素晴らしいものがたくさんあって、何の問題もない完璧な国だという幻想を強く抱いているような。低、外国人として、今やあなたも私も知っているように、現実はそうではありません。だから、まず第一に、もし働くつもりなら、すでに外国人が在籍している非常に明確な人事部（HR）がない限り、日本の会社では働かないことです。私はそういうのがない状態でやってしまいましたから。それから、契約書を英語に翻訳してもらうことです。そう要求することは可能ですし、要求するのは当たり前のことです。

Interviewer (1:15:02): And so if you don't do these things, what are the consequences? もしそうしなかった場合、どのような結果が待っているのでしょうか？

Nathalie (1:15:07): Um, I think you're going to go against what actually is, um, your, uh, visa requirement. It's unruly. So, um, because I learned over the course of the years that there were some stuff I shouldn't have accepted in my work. Officially I shouldn't have, it's, it's, it was illegal. ビザの要件に実際に違反することになってしまうと思います。無秩序な状態です。何年にもわたる経験の中で、自分の仕事において受け入れるべきではなかったことがいくつかあったと知ったからです。公式には受け入れるべきではありませんでした。違法だったのですから。

Interviewer (1:15:27): Do you mean too many hours? 労働時間が長すぎたということですか？

Nathalie (1:15:28): Too many hours, not enough pay. Uh, not the same pay as my colleagues. Yeah, yeah, which is completely illegal. 労働時間が長すぎて、給与が不十分でした。同僚と同じ給与ではありませんでした。ええ、ええ、それは完全に違法です。

Interviewer (1:15:36): Because your nationality was different? 国籍が違っていたからですか？

Nathalie (1:15:40): Probably, because they, they didn't think my experience was enough. I was speaking more languages than all of them together. おそらくそうです。彼らは私の経験が十分ではないと考えたのでしょう。私は彼ら全員を合わせたよりも多くの言語を話していたのですが。

Interviewer (1:15:47): And paying you less. それでいて、あなたへの支払いを少なくしていたと。

Nathalie (1:15:49): Yeah. Uh, but I learned that after. I didn't actually… So I would recommend also to people who come to Japan to definitely know what your visa entitles you to, whatever it is. It can be any visa. I'm still working; I'm on a working visa still. I'm employed by a company as we speak. ええ。低、それは後から知ったんです。実際にはそうとは…だから、日本に来る人たちには、どんなビザであれ、自分のビザで何が認められているかを絶対に知っておくことをお勧めします。どんなビザでも構いません。私は今でも働いていますし、まだ就労ビザのままです。現時点で会社に雇用されています。

Interviewer (1:16:08): But you have a spousal visa? 低、配偶者ビザをお持ちなのでは？

Nathalie (1:16:09): No. いいえ。

Interviewer (1:16:10): Really? 本当ですか？

Nathalie (1:16:11): I am a worker, yeah. I'm a working individual. I'm not… I'm married, sure, to a Japanese. I own property in Japan. I have a daughter, uh. I own property in Okayama. If you're interested, I'm selling. Don't want to own anymore, too many taxes, not enough time to go. Um, but I'm

still a working, uh, individual. I don't have any other resource than that, that status on that visa, to change it. But, um, I would recommend knowing exactly what that entitles you to, and definitely not hesitate to go against the company that employs you, because they're at fault. And they have to respect some rules. We said, we were talking about those unscripted rules of Japan. But there are so many rules in the law that are scripted, that are there to defend you as a foreign individual, that you should know. Know the law before you come. Know, know… If you want, if you need a lawyer, get one. It's fine. You, you should do that. Because unfortunately, with immigration comes exploitation as well, right? So, um, I pretty sure most of the people are going to be okay. But if you want to be okay from the start, and just not go through that horrible phase of being exploited and then learning from it and growing over it, just know the law. Know the law. Know, know what you're supposed to do. Just negotiate, because there's a lot of people, for example, who work in animation… 私は労働者ですから、ええ。働く一人の個人です。違います…確かに日本人と結婚はしています。日本に資産も所有しています。娘もいますし、岡山に物件を持っています。もし興味があれば売りに出していますよ。もう所有したくありません、税金が高すぎるし、行く時間もありませんから。低、私はまだ働く個人です。それを変更するためのビザのステータス以外に、他の手段はありません。ですが、そのビザで自分にどんな権利があるのかを正確に把握し、自分を雇用している会社に対して声を上げることを決してためらわないようお勧めします。悪いのは会社の方ですから。会社側も一定のルールを守らなければなりません。先ほど、日本の明文化されていないルールについて話しましたよね。しかし、法律の中には明文化されたルールがたくさんあり、それらは外国人であるあなたを守るために存在しています。それを知っておくべきです。来る前に法律を知ることです。知っておくこと…もし必要なら弁護士を雇ってください。それで構いません、そうすべきです。なぜなら残念なことに、移民の流入には搾取もつきものだからです。大半の人は大丈夫だと思いますが、最初からトラブルを避け、搾取されるという恐ろしい段階を経てそこから学び、乗り越えるという経験をしたくないのであれば、とにかく法律を知ることです。法律を知りましょう。自分が何をすべきかを知るのです。交渉すればいいんです。例えば、アニメ業界で働いている人たちの中には、たくさんそういう人がいますから…

Interviewer (1:17:32): Who are being exploited? 搾取されている人たちが？

Nathalie (1:17:34): Yeah, it's a, it's a passion thing, right? You're, you're, you're passionate about your job, you love doing what you do, and so, "We don't need to pay you." “Huh?” First time I hear that, right? So that's the kind of things I want to, kind of, set before all the enjoyable parts of living in Japan. There's so many reasons I wouldn't leave this country. So many. But there's also rules that you should know so that you're safe and you're going to be okay working here. ええ、やりがいの搾取（パッション・シング）ですよね。仕事に情熱を注いでいて、自分のやっていることが大好きだから、「給料を支払う必要はない」と。「はあ？」って感じですよね、初めて聞きましたよ。だから、日本での楽しい生活のあらゆる側面の前に、そういったことをあらかじめ明確にしておきたいのです。この国を離れたくない理由はたくさんあります。本当にたくさん。低、ここで安全に、問題なく働くために知っておくべきルールもあるのです。

Interviewer (1:18:01): Well, you said the, the word, like, your first company was, you know, *buraku kigyō*. So you, you said… To be honest, um, we don't even have a word like that in Canada. I mean, some companies are good, some companies are bad, but this idea of a class of companies that you need to avoid, is this a bigger problem in Japan than (other countries)? あなたが最初の会社のことを「ブラック企業」と言っていましたよね。そう言っていました…正直に言うと、カナダにはそんな言葉すらありません。良い会社もあれば悪い会社もありますが、避けるべき会社のカテゴリーが存在するというこの概念は、他の国に比べて日本でより大きな問題なのでしょうか？

Nathalie (1:18:26): Yes. はい。

Interviewer (1:18:27): So why are companies able to abuse the laws here? では、なぜここでは企業が法律を悪用（無視）できるのでしょうか？

Nathalie (1:18:28): Because nobody goes against it. So, like you said, the law is abused, right? Um, the law is also not enforced. In Belgium, we have controls. If I employ you, they're going to check your salary every month, they're going to check that you get your holidays, they're going to check that you don't… If you do, um, *zangyō*, um, overtime, that it's paid. They're going to check everything. 誰もそれに反対しないからです。だから、おっしゃる通り法律が悪用されているわけですよね。法律が執行されてもいません。ベルギーでは取り締まりがあります。もし私があなたを雇用したら、当局が毎月あなたの給与をチェックし、休暇が取れているかチェックし、あなたが…もし残業、つまり時間外労働をしていれば、それが支払われているかをチェックします。すべてをチェックするんです。

Interviewer (1:18:56): And if they don't, you can go to this part of the government, and they will fight for you? もし会社が守らなければ、政府のしかるべき部署に行けば、彼らが代わりに戦ってくれるのですか？

Nathalie (1:18:55): Yes, they will, for free. I've been in Japan for, what, 10, almost 13 years. How many times has anyone checked what's on my visa and what I do? ええ、無料で戦ってくれます。私は日本に来て、何というか、10 年、もうすぐ 13 年になります。私のビザの内容や、私が何をしているかを誰かがチェックしに来たことが何回あったと思いますか？

Interviewer (1:19:08): You tell me. 教えてください。

Nathalie (1:19:09): Not once. Not once. And I've been… So that's, that's the thing I'm talking about. There's so many books about Japan, you know, exploiting people, blah, blah, blah, and everybody thinks it's like, you know, of course there's exaggeration. It's, it's, it's fiction most of the time, but it happens. Um, so you have to be careful with what you play with. Uh, once you have tools, to be able to use them correctly. Uh, know your tools. That's basically it. 一度もありません。ただの一度も。それで私は…だからそのことについて話しているんです。日本が人々を搾取しているといった類の本がたくさんあって、誰もが「もちろん誇張はあるだろう」と思っています。大抵はフィクションですが、実際に起きていることです。だから、自分が関わるものには注意しなければなりません。道具を手に入れたら、それを正しく使えるようにすること。自分の道具を知る。基本的にはそういうことです。

Interviewer (1:19:33): So why don't Japanese people, why don't they fight for their rights, you know? では、なぜ日本人は自分たちの権利のために戦わないのでしょうか？

Nathalie (1:19:38): That's a good question. それは良い質問ですね。

Interviewer (1:19:39): So, I mean, you were at a disadvantage. You're not from here, but you're telling people they should fight for their rights. But then people born here, why don't they fight? つまり、あなたには不利な点がありました。ここの出身ではないのに、人々に権利のために戦うべきだと言っている。しかし、ここで生まれた人たちは、なぜ戦わないのでしょうか？

Nathalie (1:19:46): They should.100%. If they think they're being abused, if they can compare salaries with colleagues of the same… Just basic example: women, right? They're going to do the same job for the same hours, they're going to get paid half. 戦うべきです、100%。もし自分が不当に扱われていると思うなら、同じ立場の同僚と給与を比較できるなら…ごく基本的な例を挙げると、女性ですよね。彼女たちは同じ時間、同じ仕事をしても、半分の給与しか支払われません。

Interviewer (1:20:10): Than what a man would be paid? 男性に支払われる額と比べてですか？

Nathalie (1:20:11): Why? What's that pay, pay gap? Why? What's the reason, besides the fact that she's a woman? But isn't she as, if not more qualified? なぜでしょうか？その賃金格差は何なのでしょ

う？彼女が女性であるということ以外に、どんな理由があるというのですか？彼女だって、男性と同等か、あるいはそれ以上の資格や能力を持っているのではないですか？

Interviewer (1:20:21): Nowadays, nowadays, more. The women, I think, can do as much or more than a lot of the men. 今の時代は、むしろ女性の方が上ですね。女性は多くの男性と同等か、それ以上のことができると思います。

Nathalie (1:20:27): Yeah, definitely as much. More, that's going to depend on people. But, you know, it's true that there are very qualified men as well. I'm not saying the, the contrary. But, but in Japan, since everything is so gendered, right? We have “theys,” right? We have people who do not, uh, take any gender. Good for them. But they're not represented in Japan. Not, not as we do in, in foreign countries, right? In Belgium, it's very, very clear that now we have sort of a gender revolution going on. All right, good for them. Then here, it's not the case. So when I talk about the pay gap, it's definitely men to women, or just men to minorities in general… I'm going to take (include) foreigners as well. Men, but foreigners, right? There's a pay gap, definitely. I, I hope one day we have numbers. ええ、間違いなく同等です。それ以上かどうかは人によりますが。低、非常に優秀な男性がいるのも事実です。反対のことを言っているわけではありません。ただ、日本ではすべてがあまりにもジェンダーで区別されていますよね。ノンバイナリーの人たちもいますよね、特定の性別を持たない人たちが。それはそれで素晴らしいことです。低、日本では彼らの存在が十分に認められていません。海外のようにはいかないんです。ベルギーでは、現在ある種のジェンダー革命が起きていることが非常に明確です。それは彼らにとって良いことです。しかしここでは、そうではありません。だから私が賃金格差について話す時、それは明らかに男性と女性の間、あるいは男性とマイノリティ全般の間…外国人を含めてもいいですね。男性であっても外国人、といった具合に。そこには間違いなく賃金格差があります。いつか具体的な数値が出るといいのですが。

Interviewer (1:21:09): Right. Yeah, I guess if there are no numbers… そうですね。数値がないとなると…

Nathalie (1:21:10): I wish we would know. Because definitely then we can ask the question, “why?” Because there is no, there is no rule. I'm okay with evaluating your workers and giving money to the ones that work best. 知ることができればいいなと思います。数値があれば、間違いなく「なぜか？」という質問ができますから。そこに何のルールも存在しないからです。労働者を評価して、最もよく働く人にお金を多く出すというのなら納得がいきます。

Interviewer (1:21:23): Ah, meritocracy. ああ、能力主義（実力主義）ですね。

Nathalie (1:21:26): Well, not, not only, but you know, okay, if you have bonuses, why does that guy from, that foreigner, why doesn't he get it? Why? Or why is she, because she's a woman, not, not…? “Because she's a woman.” But if, if it's because she's a woman, why, right? それだけではありませんが、例えばボーナスがあるとして、なぜあの外国人には支給されないのか？なぜなのか？あるいはなぜ彼女は、女性だからという理由で支給されないのか？「彼女が女性だから」と。低、もし女性だからという理由なら、なぜそれが理由になるのか、ということですよね？

Interviewer (1:21:39): It, it seems like we're in this weird place now where the whole seniority system, you know, the *nenkō joretsu*, so that's not working anymore, but meritocracy is not quite the rule. We're just in some very gray space right now, it feels like. 今の日本は妙な状況にあるように見えます。かつての年功序列システム、つまり年功序列がもう機能していない一方で、能力主義が完全に定着しているわけでもない。今はただ、非常にグレーな空間にいるような気がします。

Nathalie (1:21:56): Yeah. And I'm not saying meritocracy is the best, it's just that we should kind of have a harsh look at how people are treated in their company. If they're really rewarded the way they should be. I'm talking also about… I'm talking about money now, but there's holidays. Does everyone get that day off? Do they get to take that day off? Because we also know for a fact that countries where

people get holidays, that they work better. ええ。能力主義がベストだと言っているわけではなく、企業で人々がどのように扱われているかを厳しく見直すべきだと言っているんです。本当にふさわしい見返りを得られているかどうかを。また、今は会社のお金の話をしていますが、休暇のこともあります。全員がその日に休めているか？その休みを取ることができているか？なぜなら、人々が休暇を取れる国の方が、より良く働けるという事実を私たちは知っているからです。

Interviewer (1:22:25): Look at Germany. ドイツが良い例ですね。

Nathalie (1:22:26): Yeah. The guys in the north, Finland, Sweden… Those guys are fantastic. Not saying those countries are perfect; they have bad points, they have good points, but they have an approach to the time you spend working, and the quality of your work, that has a crazy balance. It's fantastic. Um, so please, let's just remind ourselves that there are examples somewhere on earth of other ways of doing where people are happy in their jobs because they get time off. And their jobs are done well, qualitatively. I, I think that's, yeah, I, I missed that. That's, that's what I missed when I came to Japan, I think. I, I dearly missed the way we could actually, uh, process our working time. I think that's a big challenge. ええ。北欧の人たち、フィンランドやスウェーデンもそうです。彼らは素晴らしいです。それらの国が完璧だと言っているわけではありません。悪い点もあれば良い点もありますが、彼らは働く時間と仕事の質に対して、とてつもないバランスの取れたアプローチを持っています。素晴らしいことです。ですから、地球上のどこかには、休暇が取れるために仕事に満足し、なおかつ仕事が質的にうまくこなされている別のやり方の例があるということを、どうか思い出してほしいのです。私は日本に来た時、まさにその部分が恋しかったです。私たちが実際に労働時間をどのように処理できるかというそのやり方が、心から恋しかったです。それは大きな課題だと思います。

Interviewer (1:23:09): Well, the work-life balance. いわゆるワークライフバランスですね。

Nathalie (1:23:10): Yeah, in general, you know. And it's moving, right? It's changing. There are companies, there are startups that change everything. There are people who work differently, but still… ええ、全般的にね。それに動きつつはありますよね？変わりつつあります。すべてを変えようとしている企業やスタートアップもあります。違った働き方をしている人たちもいますが、それでも…

Interviewer (1:23:21): A lot of resistance. Yeah. Um, certainly at the beginning of the Meiji period, there was, what was that, the Iwakura *shisetsudan*, where they sent people out all over the world to study the systems and bring back the best ideas. Uh, it seems like now, of course, it's easier than ever to do that, but we have a certain kind of pride: "No, no, no, we do things our way." But now our way needs to change. 大きな抵抗がありますね。ええ。確かに明治時代の初期には、何でしたかね、「岩倉使節団」があって、世界中に人々を派遣して制度を研究させ、最高のアイデアを持ち帰らせていました。今は当然、当時よりもはるかに簡単にそれができるはずですが、「いやいや、私たちは私たちのやり方でやる」というある種のプライドがあります。しかし今、私たちのやり方を変える必要があります。

Nathalie (1:23:46): Yeah, because it's not working anymore. ええ、だってもう機能していないのですから。

Interviewer (1:23:47): It's not working anymore. もう機能していませんね。

Nathalie (1:23:48): Obviously. I mean, the… I, I love Japan for so many things, and at the same time, I hate it because it's not moving. It's… To me, it's on the razor. You know that expression? 明らかにそうです。つまり、私は多くの点で日本が大好きですが、同時に変化がないので嫌いでもあります。私にとって、それはカミソリの上にいるような状態です。その表現を知っていますか？

Interviewer (1:24:02): (Standing on) the razor's edge. 「カミソリの刃の上（危機一髪の瀬戸際）」ですね。

Nathalie (1:24:03): So, we're here, and either we fall down with a horrible, horrible, um, what is it, um, population problem and a horrible economy, or we revolutionize ourselves. We made babies on our off time because we took (time) off from our jobs. But at the same time, we (foreign-born residents) work remote half of the, of, of the year, we were in a different country, so we learn and we bring that to Japan. And you know, there's, there's hope for that, because again, like I said, there, there are companies who do that, there, there are startups who are very, very, um, not, not avant-garde, but still, they're new. そう、私たちはここにいて、恐ろしい人口問題と恐ろしい経済によって転落するか、あるいは自分たちを革命的に変えるかのどちらかです。仕事から離れて休みを取ることで、プライベートな時間で子供を作ることができるようになります。しかし同時に、私たち（外国生まれの住民）は一年の半分をリモートワークで別の国で過ごしたりするので、そこで学んだことを日本に持ち帰ることができます。空間、それには希望があると思います。なぜなら、先ほども言ったように、そういうことをしている企業や、アバンギャルドとまではいかなくても、新しい試みをしているスタートアップが存在するからです。

Interviewer (1:24:40): They're trying something new. 新しいことに挑戦しているわけですね。

Nathalie (1:24:41): And there are many options, and you can do it like so many ways. Uh, like what do you call that again, the basic income, right? Basic income problem. I've been to a conference at the Doshisha University a few years ago. A few years back in Kyoto. A French guy who studied the problem in Japan, and he said it is possible with the actual… Well, it was before the pandemic, but it's possible with the economy to actually pay people 90,000 yen a month without losing anything. What are we doing, right? So I'm not saying we need basic income, I'm saying there are so many options to revolutionize Japan now. We need change now, because we're going… Again, we're really on, on that edge, and either we go A or we go B. But… そして多くの選択肢があり、いくらでもやりようがあります。例えば、あれは何て言いましたっけ、ベーシックインカムですよね？ベーシックインカムの問題です。数年前に同志社大学のカンファレンスに行ったことがあります。京都で数年前のことです。日本におけるこの問題を研究したフランス人の男性がいて、実際の…まあパンデミック前のことですが、当時の経済状況なら、何も失うことなく人々に月 9 万円を実際に支給することは可能だと言っていました。私たちは一体何をしているんでしょうね？ベーシックインカムが必要だと言っているのではなく、今の日本を革命的に変えるための選択肢はたくさんあると言いたいのです。今すぐ変化が必要です。なぜなら私たちは…繰り返しになりますが、本当に瀬戸際にいて、A の道へ行くか B の道へ行くかの岐路に立たされているからです。でも…

Interviewer (1:25:21): And the outcomes of A and B are quite different. A と B の結果はまったく異なりますね。

Nathalie (1:25:24): Oh, so diametrically opposite, opposite. But, but, but I think it's possible to really go for the good if we have that revolution. But where does it come from? Who's going to push it? That's not me. ええ、正反対、真逆です。でも、もしその革命を起こせるなら、本当に良い方向へ向かうことは可能だと思います。低、それはどこから湧き起こるのでしょう？誰がそれを後押しするのでしょうか？私ではありませんよね。

Interviewer (1:25:39): Somebody has to take… Well, it's got to come from inside Japan, obviously. 誰かが舵を取らなければ…まあ、当然日本の中から出てこなければなりませんね。

Nathalie (1:25:40): It has to come from inside Japan. It has to come from the people who actually are going to push this country up. And there are so many, but we need to hear their voices, we need to see them. They need to promote themselves, and that's hard in this… —oh Asoboi, (train passes by). Sorry, I love trains. 日本の中から出てこなければなりません。この国を押し上げようとする人々の中か

ら出てくる必要があります。そういう人たちはたくさんいますが、私たちは彼らの声を聞き、彼らの姿を見る必要があります。彼らは自分自身をアピールしなければなりませんが、この国ではそれが難しくて…あっ、「あそぼーい！」（電車が通り過ぎる）。ごめんなさい、私、電車が大好きなんです。

Interviewer (1:26:01): The train coming by, yeah. Um, so we talked a little bit about having, uh, babies. So, in France, the birth rate is higher than in Japan. 電車が通り過ぎましたね、ええ。ええと、子供を作ることについて少し話が出ましたが、フランスでは日本よりも出生率が高いですね。

Nathalie (1:26:13): Declining still, right? それでも低下しつつはあるんですよね？

Interviewer (1:26:14): (But actually) the only reason… The big reason, I should say, not the only reason—so there are many progressive policies in France, and their thinking about unwed mothers is different—but the real reason why there's not population decline in France like there is in Japan is because they accept immigrants, and have for decades. Uh, and so now the Japanese government is finally reaching that conclusion as well. So what advice would you give to Japanese people on accepting newcomers into their society to help solve some of these serious demographic problems we have? （しかし実際には）唯一の理由…唯一ではなく大きな理由と言うべきですが、フランスには多くの進歩的な政策があり、未婚の母に対する考え方も異なります。しかし、フランスで日本のような人口減少が起きていない本当の理由は、彼らが何十年にもわたって移民を受け入れてきたからです。そして今、日本政府もようやくその結論に達しつつあります。では、私たちが抱えるこれらの深刻な人口動態の幾つかを解決するために、新しい人々を社会に受け入れることについて、日本人にどんなアドバイスをしますか？

Nathalie (1:26:51): Be curious. You're only afraid of some stuff you don't know. I'm afraid of the Japanese population being afraid of immigrants, because that's basically it. Once you're not afraid, you just confront the problem. Be curious, ask questions: "Where are you from? What do you do? Why are you here? What do you think about Japan?" Just those four questions can actually start a whole conversation about how do we integrate those people. “What are your problems？” And then it goes. And then we need cities, or even it can be villages, you know. Aso is not a big city, with 24,000 people here, something like that, maybe more now, we hope. But if we bring in people, those people should feel welcome, and being able to settle in Japan is a huge accomplishment for anyone. For anyone. I'm not speaking about me, I'm speaking about people from now on. They're going to come here to help this country just stand up, you know. Because we're sitting down and we're almost dead. So, we just need those people. So, please communicate and make them feel welcome. Just be curious, it's not, it's not really complicated. 好奇心を持つことです。人は知らないものに対してのみ恐怖を抱きます。私は日本の人々が移民を恐れることを恐れています。基本的にはそれだけのことですから。恐れなくなれば、その問題に立ち向かうだけです。好奇心を持って、質問をしてみるのです。「どこから来たの？何をしているの？なぜここにいるの？日本についてどう思う？」という 4 つの質問をするだけで、それらの喜びをどのように受け入れるかについての会話が始まります。「どんな問題を抱えているの？」と。そこから進んでいくのです。そうすれば都市が必要になり、あるいは村でもいいかもしれません。阿蘇は大きな街ではなく、人口 2 万 4000 人かそこらで、今はもっと増えているといいのですが。低、もし人々を迎え入れるなら、その人たちが歓迎されていると感じられるようにすべきですし、日本に定住できるようになることは、誰にとっても大きな成果です。誰にとってもです。私のことではなく、これからの人たちのことを言っています。彼らはこの国が立ち上がるのを助けるためにここに来るのです。なぜなら私たちは座り込んでいて、死にかけているようなものですから。だから、どうしてもそういう人たちが必要なんです。ですから、どうかコミュニケーションをとり、歓迎されていると感じさせてあげてください。ただ好奇心を持つだけで、本当に複雑なことではありません。

Interviewer (1:27:58): It's not rocket science. 高度な科学（難しいこと）ではありませんね。

Nathalie (1:27:58): Oh, god. No. Communication is so easy, but you just need to think of it all the time. It has to be in the forefront. And I think Japan is changing there too. I don't know if you've seen those, um, schools where you have, uh, communication (inaudible), and it's written on those huge panels on the schools. They know they need communication. It's not the only one. It's not the only panel, but between the three they, they put on their front, it's communication. 本当にそうです。コミュニケーションはとても簡単なことですが、常にそれを意識しておく必要があります。最優先事項でなければなりません。そして、日本もその点で変わりつつあると思います。学校の校舎にある大きなパネルに「コミュニケーション（聞き取り不能）」と書かれているのを見たことがあるでしょうか。彼らはコミュニケーションが必要だと分かっているのです。それだけではありません。それだけがパネルに書かれているわけではありませんが、校舎の前に掲げられている 3 つのうちの 1 つはコミュニケーションです。

Interviewer (1:28:24): Oh, so you mean sort of the, the slogan of the school? なるほど、学校のスローガンのようなものということですね？

Nathalie (1:28:28): Yeah. You know that they put those panels up, you're like, "Hey, we do this a lot," or, "We do that." Okay. But communication is one of them. Yeah. Yeah. So, it's nice to analyze. It's nice to make a good synthesis of something, it's good. You're good. You're a good person. Now, try to communicate that synthesis to someone. Try to be clear about your points. Try to have the right words in, at the right time, to be able to be as clear as possible. The person coming into Japan is going to be fine. They're going to be okay. But everything has to be communicated, and to the Japanese people as well. I think learning languages is the basics if you really want to know what those people are coming here for. You know, we have those guys from the TSMC. Oh, that's a big panic. そうですね。そういうパネルを掲げられると、「ああ、私たちはこういうことをよくやっているな」とか「あれをやっているな」って思いますよね。なるほど。でも、コミュニケーションはそのうちの一つです。ええ、本当に。だから、分析するのはいいことですし、何かの優れた要約を作るのもいいことです、素晴らしい。あなたは素晴らしい人です。今度は、その要約を誰かに伝えてみてください。自分の言いたい点を明確にするようにしてみてください。できるだけ明確に伝えるために、適切なタイミングで適切な言葉を選べるようにしてみてください。日本に来る人は大丈夫です。なんとかなります。でも、すべてを伝えなければなりませんし、日本人の側にも伝える必要があります。そういう人たちが何のためにここに来るのかを本当に知りたいなら、言語を学ぶことは基本中の基本だと思います。ほら、TSMC から来ている人たちがいるじゃないですか。いやあ、大パニックですよ。

Interviewer (1:29:25): And I don't, I don't really know why because, you know, you talked about the, the Japanese Toyota manager who came and lived next to you. Well, they were just coming to work at a factory and go home. The TSMC people are mostly managers coming and then they're going to go back to Taiwan. They're not immigrants. They're just short-time residents, but— なぜそんなにパニックになるのか、僕にはよく分からないんです。だって、ほら、さっきあなたの隣に住んでいたトヨタの日本人マネージャーの話をしてくれたじゃないですか。彼らはただ工場に働きに来て、家に帰るだけでした。TSMC の人たちもほとんどが赴任してくるマネージャーで、そのうち台湾に帰る人たちです。移民ではありません。ただの短期滞在者なのに、でも——

Nathalie (1:29:39): But workers will be. Yeah. でも、労働者たちはそう（定住）なるでしょうね。ええ。

Interviewer (1:29:40): But hopefully some of the people coming in supporting industries will be here. So I feel like we're rolling out the red carpet for the wrong people. でも、周辺の支援産業で入ってくる人たちの一部は、ここに残るかもしれませんね。だから、なんだか間違った人たちのためにレッドカーペットを敷いて歓迎しているような気がするんです。

Nathalie (1:29:48): Well, yeah, but it starts with them, right? Because they're going to have power. They're going to be the ones who actually can bring other people with them. We need them to feel

comfortable to, to show that actually anybody can be comfortable in Japan. It's going to start with the bigger people. That's, that's always the case. まあ、そうですね。太平洋の波のように、彼らから始まるんじゃないですか？だって、彼らは権力を持つことになるわけですから。実際に他の人々を連れてくることができるのは彼らです。彼らに快適だと感じてもらうことで、実際には誰でも日本で快適に過ごせるんだということを示す必要があります。上の立場の人たちから始まるんです。いつだってそうですよ。

Interviewer (1:30:02): That's a good point. No, I appreciate that. That, that's right. なるほど、一理ありますね。いや、その視点はありがたいです。その通りですね。

Nathalie (1:30:12): But, but, but we shouldn't, you know… でも、でも、でも、私たちは……その、制限すべきではないですよね……

Interviewer (1:30:13): Limit it to them. 彼らだけに限定するのは。

Nathalie (1:30:14): It, it should, it should go, extend *omotenashi*. You know, I think Japanese people have such a kind heart because they're built into a society where there's peace. It's been a long time since there was war in Japan. There was a lot, horrible war. You know, with my tours, I go to Hiroshima regularly. It hurts me every single time. I can't go into that museum anymore. It's, it's traumatic to me. It's horrible. And we know that. And it's over this, that society, that we build now. So we know that when people come in, they're from a foreign country and they're going to have to adapt. They're going to become Japanese. They have to. This is how this country works. So we need to communicate that to them. We need to be very clear and ask, "How are you? All right. Now, you know, here we do it this way. Can you do that? All right. Can you not? Then we should find something else." And you know, immigration is always hard. It, it still is in Belgium. We got so many problems with immigration. It's, it's hard in every country. But I think because of the history of Japan and the state in which this country is right now—of course, there are international tensions like every country all the time—but we're not in war. We're not at war with anyone at the moment. So, we should enjoy this peace to welcome people peacefully and to show them that living as a Japanese, or close to—I'm trying—is, is happy, is a happy feat. そう、それは広げていくべき、おもてなしを広げていくべきんです。日本人って本当に優しい心を持っていると思うんです。なぜなら、平和がある社会の中で育てられているから。日本で戦争があったのは、もうずいぶん前のことです。たくさんの、悲惨な戦争がありました。ほら、私のツアーで、私は定期的に広島に行くんです。毎回、本当に心が痛みます。あの資料館にはもう入れません。私にとってはトラウマです。本当に恐ろしいことです。私たちはそれを知っています。その上に、今の社会が築かれているんです。だから、外国から人が入ってきたとき、彼らは適応しなければならないということが分かります。彼らは日本人にならなければいけない。そうせざるを得ないんです。それがこの国の仕組みだから。だから、そのことを彼らに伝える必要があります。はっきりとこう尋ねるべきんです。「調子はどう？よし。じゃあ、ここではこういう風にやるんだよ。それはできる？分かった。できない？それなら、別の方法を見つけよう」って。それに、移民の問題はいつだって大変です。ベルギーでも今でも大変ですよ。移民に関しては山ほど問題を抱えています。どの国でも大変なことです。でも、日本の歴史や、この国が今置かれている状況を考えると——もちろん、どこの国でも常にそうであるように国際的な緊張はありますが——私たちは戦争をしていません。現時点で誰とも戦争をしていません。だから、この平和を享受して、人々を平和的に迎え入れ、日本人として、あるいはそれに近い形で生きることが——私も努力していますが——幸せなこと、幸せな偉業なのだと彼らに見せるべきなんです。

Interviewer (1:31:32): Well, also, you know, first-generation immigrants always suffer from anxiety and stress and, you know, problems getting used to a new society, but your daughter won't. Your daughter will be able to function. She will be able to function in Japanese society quite smoothly. それに、ほら、第一世代の移民というのは、いつだって不安やストレス、新しい社会に慣れるための問題に苦しむものですが、あなたの娘さんは違いますよね。娘さんはうまくやっていけるでしょう。日本社会の中で、かなりスムーズにやっていけるはずです。

Nathalie (1:31:49): She does already. もうすでにやってますよ。

Interviewer (1:31:51): Of course. もちろんそうでしょうね。

Nathalie (1:31:53): She's very Japanese. 彼女はとても日本人らしいです。

Interviewer (1:31:54): Of course. 当然ですね。

Nathalie (1:31:55): She loves kimono. So, she goes, she takes her little kimono from when she was three. She goes (make a polite bow). 着物が大好きなんです。だから、3 歳のときの小さな着物を持ってきて、こうやって（丁寧にお辞儀をする）。

Interviewer (1:32:00): But she goes to, of course, a Japanese nursery school. でも彼女は、もちろん日本の保育園に通っているんですよね。

Nathalie (1:32:02): Uh, sometimes, yeah. We don't, we don't… Actually, my husband is very busy, and when I'm not here, she often skips school. And we actually… It's funny you talk about that. We're having, we're hosting an event today, um, with someone who is, um, a no-schooler, a homeschooler. And he's going to have a concert. Uh, I think, I think actually that's why it's so noisy next doors. Yeah, I think they must be coming in and then talk about the fact that you can homeschool kids. あ、時々ですね、ええ。私たちは、その……実は夫がとても忙しくて、私がここにいないときは、娘はよく園を休むんです。それに、私たちは実際……その話をされるなんて面白いですね。実は今日、ここでイベントを主催しているんです。ホームスクーラーというか、学校に行かない選択をした（不登校の）方と一緒に。それで、その人がコンサートをやる予定なんです。あ、だから隣がこんなに騒がしいんだと思います。ええ、皆が集まってきて、子供をホームスクールで育てることについて話しているんだと思います。

Interviewer (1:32:31): Interesting. 興味深いですね。

Nathalie (1:32:32): That's what we do here. We try to bring, um, opinions to this place, uh, so people from around here can actually see other things and try out other things. Yeah, that's what we do. But okay, uh, yeah, to get back to that immigration thing, um, probably if we can welcome, uh, well-paid people, we can welcome anyone. It's a human thing, right? So I'm asking myself—that's why it's a problem with my husband and me—uh, we're very concerned about how Aso is going to, uh, react (to growing immigration) and, uh, because nothing has been prepared. それが、私たちがここでやっていることです。この場所にいろんな意見を持ち込んで、この辺りの人たちが実際に他のものを見たり、他のことを試したりできるようにしているんです。ええ、そういう活動をしています。でも、まあ、そうですね、さっきの移民の話に戻ると、おそらく、もし私たちが高いお給料をもらっている人々を歓迎できるなら、どんな人だって歓迎できるはずです。人間の問題ですからね。だから私は疑問に思っているんです——それが夫と私の間でも問題になっているのですが——阿蘇が（増え続ける移民に）どう対応していくのか、ものすごく心配なんです。だって、何も準備がされていないですから。

Interviewer (1:33:08): There is no infrastructure to accept people. 人々を受け入れるためのインフラがないということですね。

Nathalie (1:33:09): Or just information to the locals. We don't have nothing. There was no information about who's coming, why, how, how it's going to evolve, what's the plan. Nothing. あるいは、地元住民への情報すらありません。何もないんです。誰が来るのか、なぜ来るのか、どうやって来るのか、これからどう発展していくのか、どんな計画があるのか、そういった情報が一切ありませんでした。ゼロです。

Interviewer (1:33:18): Well, keep in mind that the central government… Uh, so Prime Minister Kishida stated last week or the week before that, uh, there are no plans to enact an immigration policy. まあ、中央政府としては……ええと、岸田首相が先週か先々週に、移民政策を法制化する計画はないと明言したことを念頭に置いておく必要がありますね。

Nathalie (1:33:32): No, but we have TSMC. We need, we need an immigration policy. いえ、でもTSMCがあるじゃないですか。移民政策は絶対に必要です。

Interviewer (1:33:37): Of course. You know, doing stealth immigration is the wrong way to do it. People come in through the side door, but they stay. But, um, I agree 100% with what you're saying. For the local people, they have to be… They have… It has to be explained from the people who are widening the door and bringing people in. They have to explain to people in local communities why people are coming, what they're doing, how they're contributing. And then there has to be some kind of infrastructure, and just none of that is going at the right speed, I feel like. もちろんです。ステルス（隠れ）移民のようなやり方は間違っていますよね。人々は裏口から入ってきて、そのまま定住してしまう。でも、おっしゃることは100%同意します。地元の人たちに対しては、その……門戸を広げて人々を連れてきている張本人たちが説明しなければなりません。地元コミュニティの人々に対して、なぜその人たちが来るのか、何をするのか、どう貢献するのかを説明する義務があります。精度高く構築されているようなインフラが必要ですが、そのどれもが適切なスピードで進んでいないように感じられます。

Nathalie (1:34:13): Yeah. Because they're already building, right? So that, I mean, they, they're here. It's too late. They are here. It's not the before, it's, it, we are in it. And nobody here in Aso is actually very positive about (TSMC). There are ecological concerns that we have to put apart. But about the immigration part, um, it could be only positive if, if we're informed, right? And I have no problem with foreigners. Obviously, I am one, um. But, but, uh, I've met with the policemen who said they're, they're, they're actually getting ready because they know there are going to be problems. “How do you avoid, instead of getting ready for problems, how do you avoid the problems first?” That was, that was my question, asking: is there no kind of preparation course? How do those people get into Japan? What are they told, and what are the local people told, because that's where the friction occurs. Well, that's my question. ええ。だって、もうすでに建設を進めているわけでしょう？つまり、彼らはもうここにいるんです。遅すぎるんですよ。彼らはここにいる。始まる前ではなく、私たちはもうその渦中にいるんです。正式な決定の前に、ここ阿蘇の住民で（TSMCについて）本当に前向きに捉えている人は誰もいません。一旦置いておかねばならない環境への懸念もあります。でも、移民の部分に関しては、もし私たちが事前に知らされていれば、ポジティブなものにしかならないはずですよね？私は外国人に何の偏見もありません。言うまでもなく、私自身が外国人ですから。でも、警察官の人たちに会ったとき、彼らは問題が起きることを分かっているから、実際にその準備（備え）をしていると言っていました。「問題への備えをする代わりに、どうやって問題を未然に防ぐんですか？まずどうやって問題を回避するんですか？」それが私の疑問でした。何らかの準備講座みたいなものはないのかと。その人たちはどうやって日本に入国してくるのか？彼らは何を説明されているのか、そして地元住民は何を説明されているのか。なぜなら、そこで摩擦が起きるからです。それが私の疑問です。

Interviewer (1:35:01): Another part of it, too, is, uh, we bring in single men. We bring in young, single men. I'm pretty sure, actually, that the, the crime rate for young, single men, uh, is the same amongst some of these workers coming in than with young Japanese. It's just a factor of being a young, single man. Um, the approach that other countries and communities take is to bring in married families. You avoid a lot of those problems because people are already stable in family units, and both parents work, and the children go to school, and I'm pretty sure the crime rate for that demographic is quite low. もう一つの側面として、独身男性を連れてきているという点もあります。若くて独身の男性です。実際のところ、入ってくるこれらの労働者の若くて独身の男性の犯罪率は、日本の若い男性と変わらないと思います。それはただ「若くて独身の男性である」という要素にすぎません。他の国やコミュニティが取っているアプローチは、既婚の家族を呼び寄せることです。家族とい

う単位ですでに安定していて、両親が共働きで、子供が学校に通うため、そういったトラブルの多くを回避できますし、その層の犯罪率はかなり低はずです。

Nathalie (1:35:44): Yeah. Or you have programs with those young people. There must be workshops. They, they must want to learn Japanese, tea ceremony, shamisen, *shodō*. The Japanese culture has so many stuff to offer, and those people are not stupid. They're coming here to work, so they, they know that there is something to win there for them. So if, plus as a bonus, the company offers workshops all over the week, weekends, anytime, and little trips to discover Japan and understand the Japanese, I think that should be included in a contract when a company wants to settle in Japan. Because this country is so specific and has so much, you know, things to learn before you actually integrate yourself. Because rooting in Japan—I'm not rooted, I, I will never be—but some people actually aspire to that, of course. So, right, we need to give them those tools. And I don't understand why those companies that are accepted in Japan don't have a very specific sheet with a whole program for their workers to be, first of all, safe, because if they cause trouble, they're not going to be safe in Japan. And then for them to have a huge, um, what do you call that, bonus, you know, a physical and life, um, opening opportunity. Because money is okay. You can make money anywhere. I could fly to, I don't know, Canada. Just pay me. Um, I can work anywhere. It can, it can be a bonus for me anywhere. If I go back to Belgium, I work at the government, that's a bonus. But, you know, they don't, they don't… I don't think the company actually even thinks of it. They think they're going to bring their workers, they're going to work, that's fine. ええ。あるいは、そういった若い人たち向けのプログラムを用意するとか。ワークショップがあるべきです。彼らは日本語や茶道、三味線、書道を学びたいと思っているはずです。日本文化には提供できるものが本当にたくさんありますし、その人たちだって馬鹿ではありません。働きにここへ来ているわけですから、そこで得られるものがあることは分かっています。だから、それにプラスして特典として、会社が平日でも週末でもいつでもワークショップを提供したり、日本を発見して日本人を理解するためのちょっとした旅行を企画したりすればいい。企業が日本に進出したいと望むなら、それを契約に含めるべきだと思います。なぜなら、この国はあまりにも特殊で、実際に溶け込む前に学ぶべきことが本当にたくさんあるからです。日本に根を下ろすということは——私は根を下ろしていませんし、これからも絶対にしませんが——もちろん、それを心から望む人たちもいます。だからこそ、そういったツールを彼らに与える必要があります。日本への進出を認められた企業が、なぜ労働者向けの全プログラムを記載した具体的な計画書を持たないのか理解できません。何よりもまず安全に過ごすために。だって、トラブルを起こせば、彼ら自身が日本で安全に暮らせなくなりますから。そして、彼らにとって大きな……何て言うんでしょう、ボーナスというか、肉体的にも人生の面でも視野が広がる機会になるように。お金はまあいいです。お金はどこでだって稼げます。私だって、例えばカナダにだって飛べますよ、お給料さえくれれば。どこにいたって自分にとってのプラスになります。ベルギーに戻って政府で働いても、それはプラスです。でも、その……企業はそんなこと全く考えてさえいないと思います。労働者を連れてきて、働かせて、それで終わり、と考えているのでしょう。

Interviewer (1:37:23): Yeah. So, they wanted workers, they got people. I forget who said that, but it's a famous saying (Swiss novelist Max Frisch). But here's, uh, here's the problem with the way that we do things as I see it. Uh, I know I'm here to interview you, but, uh, the successful communities that I've studied, uh, the community selects the workers. The community has the final say: “this person, not this person.” And then the community provides aftercare. So employers, they don't have the power to just bring in somebody, and, you know, they can be, they can be part of the process, but it's the community that's considering this. The community is at the heart of this, this process. Whereas here we just have a bunch of brokers bringing people in. What do they care? Their profit and people's humanity are, are not necessarily related, so we get these problems. ええ。「彼らは労働者を求めたが、やってきたのは人間だった」。誰の言葉だったか忘れましたが、有名な格言（スイスの小説家マックス・フリッシュ）ですね。しかし、僕の目から見て、今のやり方の問題点はここにあります。あなたをインタビューしに来ているのは分かっているのですが、僕が研究してきた成功しているコミュニティでは、コミュニティが労働者を選別しているんです。コミュニティが最終決定権を持っています。「この人は受け入れるが、この人は受け入れない」と。そして、コミュニティがア

フターケアを提供します。ですから雇用主には、ただ誰かを連れてくるだけの権限はありません。プロセスの構成員にはなれますが、検討するのはコミュニティです。このプロセスの中心にあるのはコミュニティなんです。それに対してここでは、ただのブローカーたちが大勢の人を連れてきているだけです。彼らが気にすると思いますか？彼らの利益と人間の尊厳は必ずしも結びついていませんから、こういう問題が起きるんです。

Nathalie (1:38:05): Yeah, but what I find interesting is that Japan as a host didn't actually, you know, this sort of money just (inaudible). And to me, there had to be so much more. And, you know, it's easy to criticize because I'm not part of it. Must I be working there? Must I even be making the decisions? I wouldn't, I wouldn't think like this probably. So, I'm not the right person. But, um, I think if I had to employ someone, they'd have to be very motivated. Um, I don't at the moment, but actually, I'm hiring an English teacher. ええ、でも私が興味深いと思うのは、受け入れ側としての日本が、実際には……こういうお金がただ（聞き取り不能）。私にとっては、もっと多くのことがなされるべきだったんです。それに、私は当事者ではないので批判するのは簡単ですよね。もし私がそこで働いていたら？あるいは私が決定を下す立場だったら？おそらくこんな風には考えないでしょう。だから、私は適任者ではありません。でも、もし誰かを雇わなければならないとしたら、その人には強い動機があってほしいと思います。今は雇っていませんが、実は今、英語の先生を募集しているんです。

Interviewer (1:38:49): Excellent. 素晴らしいですね。

Nathalie (1:38:50): Because I'm not here a lot. Because I tour, but I still have my classes I need to furnish. So, I'm actually hiring. Um, but I want someone who's, that I'm going to pay for something that they actually are going to enjoy it, first of all. And then that my, uh, students are going to be able to follow and really agree (fit?) with that person, right? So, all my idea behind that actually comes back to the same thing: if I employ someone, I employ someone. It's, it's a person, right? It's not just a worker. It's not an English teacher only, that, that one hour that they're going to spend here. No, they're going to be on the way, they have their life, there's everything around it. That has to be considered somehow. So I take the opportunity here to say that, that if people somehow have a decision to make with, you know, everything that's actually, um, you know, in consideration. There is moving the people, bringing the factory, there's all those difficult things. And there's those unique individuals that are coming with all the character types and everything. So I think that (what we are doing now) is not enough. Well, it's HR, basically. It's HR, but it's never considered, and that brings problems, right? I mean, that's what's dangerous to me. 私はあまりここにいないですから。ツアーに出ていることが多いのですが、それでも提供し続けなければならないクラスがあります。だから実際に雇う予定なんです。でも、私が対価を支払う以上、何よりもまずその仕事を楽しんでくれる人がいいです。そして、私の生徒たちがその人についていくことができて、本当にその人に馴染める（合う）人がいいですね。だから、その根底にある私の考えは、結局すべて同じところに突き当たります。誰かを雇うということは、人間を雇うということです。ただの労働者ではありません。ここで過ごすその 1 時間だけの、単なる英語の先生ではないのです。違います、彼らはここに通ってくるわけで、彼らの人生があり、その周りにはあらゆる生活があります。それをどうにかして考慮しなければなりません。だからこの場を借りて言いたいのですが、もし人々が、実際に考慮されているあらゆる事柄を踏まえて何らかの決定を下さなければならないとしたら。人々を移動させ、工場を誘致し、そういった難しいことがたくさんあります。そして、様々な性格や背景を持った、唯一無二の個人たちがやってくるのです。だから、（私たちが今やっていることは）十分ではないと思います。まあ、基本的には HR（人事・労務）のことですよね。HR の話なのに全く考慮されておらず、それが問題を招いている。つまり、そこが私にとって危ういと感じる部分なんです。

Interviewer (1:40:01): Yeah. I think for some reason in Japan, there's this very strong tendency to use brokers. Just, "We'll just hire a company and they'll do the HR work" And I think you get what you pay for at the end of the day. ええ。日本ではなぜか、ブローカーを使う傾向が非常に強いように思

います。「会社を一つ雇えば、そこが HR の仕事をやってくれるだろう」という感じで。結局のところ、支払った金額なりのものしか得られないということだと思います。

Nathalie (1:40:14): They never do, right? 彼らは決してちゃんとやらないですよね？

Interviewer (1:40:15): No, of course, of course they don't. So, I mean, they're, they're, they're, you know, their rigai are different. Their… Yeah. Um, so I know you've got things to do today, so I just have a couple more questions. ええ、もちろん、もちろんやりません。つまり、彼らの……その、*rigai*（利害）が異なるわけです。彼らの……ええ。さて、今日はあなたも予定があると思いますので、あと数問だけ質問させてください。

Nathalie (1:40:27): Sure. Sure. いいですよ。どうぞ。

Interviewer (1:40:28): Uh, so you've talked about your, uh, your nationality as being both French and Belgian. Would you ever consider naturalizing and becoming a citizen of Japan? ご自身の国籍がフランスとベルギーの両方であるとお話しされていましたね。今後、帰化して日本の市民になることを考えたことはありますか？

Nathalie (1:40:40): No. ないです。

Interviewer (1:40:40): Why not? なぜですか？

Nathalie (1:40:42): Uh, I like being a foreigner here. It's extremely racist to say that. I'm aware of it, I'm so sorry. But to me, especially as a female—white female, um—my face actually says it already: I'm not Japanese. The funny thing is, on the phone I am. Until I say my name. I always get the little, "Eh?" you know. ここで外国人として過ごすのが好きなんです。こう言うとものすごく人種差別的に聞こえますよね。それは自覚しています、本当にごめんなさい。でも私にとって、特に女性として——白人女性として——私の顔がすでにそれを物語っています。私は日本人ではないと。面白いことに、電話口では日本人だと思われるんですよ。自分の名前を言うまでは。いつも「え？」ってちょっと聞き返されます。

Interviewer (1:41:10): So, in other words, you're saying that there's no hope of ever being accepted as Japanese, so why would you try? つまり、言い換えれば、日本人として受け入れられる見込みは決してないのだから、なぜわざわざ努力する必要があるのか、ということでしょうか？

Nathalie (1:41:17): I don't, I don't hope to, and I don't want to. I don't think I am Japanese. I am just, um… Well, I used to be French and Belgian living in Japan, now I don't know what I am. So, I'm a big mix of a lot of stuff, and I agree with that more and more every day. Um, on the technical side, um, there's a few things that actually scare me in Japan: going (getting) older. So, uh, I have this friend, this father of mine, uh, who once said he would naturalize (to become) Japanese if they put him in, in a, in a home for older people, just to be treated correctly. そんなこと期待していませんし、そうなりたくもありません。自分が日本人だとは思いません。私はただの……以前は日本に住んでいるフランス人とベルギー人でしたが、今は自分が何なのか分かりません。たくさんのものが混ざり合った大きな塊のようなもので、日を追うごとにその状態にしっくりきています。手続き上の面で言うと、日本で暮らす上で実はいくつか恐怖を感じることがあります。歳をとっていくことです。私の友人で、父親のような存在の人がいるのですが、彼はかつて、もし自分が老人ホームに入れられるようなことになったら、正当な扱いを受けるためだけに日本に帰化すると言っていました。

Interviewer (1:41:57): Oh, so he, he thinks that he would be treated better in a senior care home in Japan than in Belgium. おや、彼はベルギーの高齢者ケア施設よりも、日本の施設の方がマシな扱いを受けられると考えているということですか。

Nathalie (1:42:01): No, with a Japanese nationality. いえ、日本国籍を持っていれば、という意味です。

Interviewer (1:42:07): Oh, okay. Ah, I see what you mean. あ、なるほど。そういう意味ですね。

Nathalie (1:42:08): Keeping his Belgian nationality in that case would be of a danger. I, I do understand his point of view, and I don't completely disagree with it. Although it's too far, uh, for me. I don't know how the world will be in 30 years. I hope to live that long. Uh, we'll see. But in any ways, I think the, the Japanese society gives me so much every day as a foreigner, that actually I would lose more becoming Japanese. I would gain the right to vote. Which is big to me. It's very important. It's very important to vote, and I'm still processing, actually, the fact that I'll never be able to. It's hard for me, especially since we pay taxes. We agree? その状況でベルギー国籍を維持したままだと、危険が伴うかもしれないということです。彼の視点はよく分かりますし、完全に否定するつもりもありません。私にとってはまだ先の話すぎますが。30 年後に世界がどうなっているかは分かりません。それまで長生きしたいものです。どうなることやら。でもいずれにせよ、外国人として生きる中で、日本社会は毎日私に本当に多くのものを与えてくれているので、日本人になることで失うものの方が多い気がします。得られるのは参政権（投票権）です。それは私にとって大きなことです。投票することはとても重要です。自分が決して投票できないという事実に、実は今でも心が追いついていません。私たちも税金を払っているわけですから、余計につらいです。そうですよね？

Interviewer (1:42:50): We pay a lot. たくさん払っていますね。

Nathalie (1:42:51): Since, um, I have a daughter here, I want for her rights to be heard. Um, since she's still little. Were she 18, I wouldn't say anything. But I, I think my voice could count as hers, right? So the fact that I cannot vote is a big problem mentally for me. It's a challenge. But at the same time, I have this huge advantage being white. I mean, yeah, I don't have (to act like everyone else). Those rules don't apply to me if I don't want to. I can say that I can literally retire from society if I want. You know, it's racist, it's horrible what I'm saying, but it's true. It's a reality. And I can use my privilege anytime I want. I try not to. I try not to. I try to never. But if I want, I can take my privilege and just go away. ここに娘がいますから、彼女の権利が聞き届けられてほしいんです。彼女はまだ小さいですから。もし彼女が 18 歳なら何も言いません。でも、私の声が彼女の声の代わりになり得ると思うんです。だから、自分が投票できないという事実に、精神的に大きな問題です。試練ですね。でも同時に、私は白人であるという非常に大きなアドバンテージを持っています。つまり、周りと同じように振る舞う必要がないんです。自分が望まなければ、そういったルールは私には適用されません。その気になれば、文字通り社会から一歩身を引くことができると言えます。人種差別的で、ひどいことを言っているのは分かっていますが、本当のことです。現実なんです。そして、私はいつでもこの特権を使うことができます。使わないようにしています。使わないように、決して使わないように努めています。でも、その気になれば、特権を利用してただ立ち去ることだってできるんです。

Interviewer (1:43:36): Well, you use the word racist, which I think is interesting, because I think race is at the heart of the definition of who is Japanese. So you can say that you're being racist by not, uh, you know, taking on more Japaneseness. But the other side would be, would anybody let you? If being Japanese means being born in Japan, being born to Japanese parents, then that's also racist also, isn't it? 人種差別的（ラシスト）という言葉を使されましたが、それは興味深いですね。なぜなら、「誰が日本人か」という定義の核心には人種があると思うからです。だから、これ以上「日本人らしさ」を取り入れないことで自分自身が人種差別的になっている、と言うこともできます。しかし逆の視点から見れば、そもそも誰かがあなたを日本人として認めてくれるでしょうか？もし日本人であることが「日本で生まれること」「日本人の親のもとに生まれること」を意味するなら、それ自体もまた人種差別的ですよね？

Nathalie (1:44:07): Yeah, it's racist, and it's good because I think it's true. Because, in the actual Japanese society, me being me, I'll never be Japanese. And I don't want to. Again, I don't want to, because I know it, it's to no avail. I, I can try as much as I want, wear kimonos, go blah, blah, blah, do my *shodō* perfectly, speak perfect Japanese, write every kanji you want, can read (everything). You can do all of that (and still), I'll never get there. I'm already more Japanese than my husband, to be honest with you. He's 47, but oh my, “are you a foreigner?” And, um, in that sense, it's interesting. And people often tell me, "You're so Japanese." And I'm okay with that, even if it hurts, because I don't want to be Japanese. I don't… It's not on purpose, I just, I'm a chameleon, so I tend to do what I see. And I've been living with Japanese people for more than 12 years. Obviously, I'm mimicking them all the time. And I find myself disgusting. ええ、人種差別的ですし、それが真実だと思うのでそれでいいんです。なぜなら、実際の日本社会において、私が私である以上、決して日本人にはなれないからです。それに、そうなりたくもありません。繰り返しになりますが、なりたくないんです。なぜなら、それが無駄な努力だと分かっているから。どれだけ努力して、着物を着て、あれこれやって、書道を完璧にこなして、完璧な日本語を話し、どんな漢字でも書き、何でも読めるようになったとしても。そのすべてをこなしたとしても、決してそこには到達できません。正直なところ、私はすでに夫よりも日本人らしいですよ。彼は 47 歳ですが、「あなた外国人なの？」って言いたくなるくらい。その意味では面白いですね。よく人から「すごく日本人っぽいね」と言われます。そう言われるのは、たとえ複雑な気持ち（心が痛む）になっても構いません。日本人になりたいわけではないですから。わざとやっているわけではなく、私はカメレオンのような性質なので、目にするものを真似してしまう傾向があるんです。もう 12 年以上も日本人に囲まれて暮らしていますから。当然、常に彼らの真似をしています。そんな自分が嫌悪感を覚える（嫌になる）こともあります。

Interviewer (1:45:06): Oh. That, uh, oh, I didn't expect that. おや。それは……おっと、そんな言葉が返ってくるとは思いませんでした。

Nathalie (1:45:11): Well, no. If I look at myself, I don't like it. いえ、本当に。自分自身を見つめ直したとき、それが好きになれないんです。

Interviewer (1:45:13): Uh, well, because your identity is based on something very individual. It's not based on being a member of a group. That's probably part of it. それは、あなたのアイデンティティが非常に個人的なものに基づいているからでしょうね。集団の一員であることに基づいていない。おそらくそれも理由の一部だと思います。

Nathalie (1:45:22): Yeah, and, and, and at the same time, I, I also admire other foreigners for being so Japanese, you know, for being so much integrated in this country and being able to navigate that easily. ええ、それと同時に、他の外国人の人たちがものすごく日本人らしく振る舞っているのを見て、この国に見事に溶け込んで器用に立ち回っている姿を尊敬もしているんです。

Interviewer (1:45:33): You know, I agree with that 100%. I feel exactly that way. I'm not that way, and I respect people who make an all-out attempt and, to some degree, succeed. それには 100%同意します。僕も全く同じように感じます。僕はそんな風にはなれませんが、全力で挑戦して、ある程度それを成功させている人たちのことを尊敬します。

Nathalie (1:45:44): Mhm. ええ。

Interviewer (1:45:45): Isn't that interesting? Well, to finish up today, I always ask people, uh, likes and dislikes. What do you like about Japan? What do you dislike about Japan? Anything okay. 面白いですね。さて、今日の締めくくりとして、私はいつも皆さんに好きなところと嫌いなところを伺っています。日本のどんなところが好きですか？どんなところが嫌いですか？何でも構いません。

Nathalie (1:45:57): Um, very big number one: safety. Again, as a woman, um, and white women especially, probably more than a Japanese. うーん、圧倒的な第 1 位は「治安の良さ（安全）」です。これも女性として、そして特に白人女性としては、おそらく日本人の女性以上にそう感じます。

Interviewer (1:46:09): Whiteness has come up a lot. That's interesting. I never (consider my "whiteness"). 「白人であること」という話がよく出てきますね。興味深いです。僕は自分の「白人性」を意識したことは一度もありません。

Nathalie (1:46:11): It's a big difference. そこには大きな違いがありますよ。

Interviewer (1:46:13): I never think about it, but it… Maybe I should. 考えたこともなかったですが、でも……意識すべきなのかもしれませんね。

Nathalie (1:46:15): You know, I used to be shocked when I came home and saw myself in the mirror, because you see so many Japanese faces that you identify with them. No, no, I have had that. It's dysmorphia. You get dysmorphia from Japan, yeah, yeah. 家に帰って鏡に映った自分を見たとき、よくショックを受けていたんです。周りに日本人の顔があまりにも多いので、自分を彼らと同一視してしまうから。いや、本当にそういう経験があるんです。身体醜形障害（ディスモルフィア）のようなものです。日本にいると一種のディスモルフィアになりますよ、本当に。

Interviewer (1:46:28): Or you, you see somebody who looks different and you go, "Oh, a foreigner." And then you look in a mirror and you're like, "Oh my goodness?" あるいは、自分と違う外見の人を見て「あ、外国人だ」と思って、その後に鏡を見て「おっと、自分もか！」となったり。

Nathalie (1:46:34): Yeah, "I'm a foreigner." And then you, you, you have a step back. No, but it's true. You get dysmorphia from Japan. It's very dangerous. So getting back to myself, uh, sometimes it's good, yeah. That's why I go back home sometimes, see other people, and really, Belgium shocks me every time I go home. It's like, "Oh, there's no Japanese around." Shock. そう、「私も外国人だった」って。それで一歩引いて我に返るんです。でも、これ本当ですよ。日本にいるとディスモルフィアになります。とても危険です。だから自分自身を取り戻すために、時々実家に帰るのがいいんです。他の人たちに会うために。実際、ベルギーに帰るたびに毎回ショックを受けます。「あ、周りに日本人が一人もいない」って。衝撃を受けるんです。

Interviewer (1:46:53): Do, do you ever, you know, walk through, for example, a shopping mall and look around and suddenly think, "Geez, there's a lot of Japanese people here"? I have that happen sometimes. 例えばショッピングモールを歩いていて、周りを見回したときに「うわ、ここ日本人だらけだな」って突然思うことってありますか？僕はたまにそういうことがあるんです。

Nathalie (1:47:07): When I get back from a foreign country, right? Or, um, I, I'm on a tour with foreigners, right? I, I tour with foreigners mainly. So when they go home, I get, um, okay, I say bye-bye in Narita, and then I go to Haneda on the train. And I'm putting in my earphones, and I'm like, "Oh god, I'm back into Japan," and into my Japan, right? I'm back home. And it, it's funny. Yeah, I like it. But, but safety, is such a delight. Because I can put my earphones and nobody's gonna (bother you). I, I didn't know that, but I met an American girl. She's, she, she lives in Kumamoto, and she said that to me. She said, "You, you can be on your bicycle or walk with your earphones in, and you're safe. And I realized it's true. Yeah, it's true. Anywhere in Japan and at night. You know, and then you're going to be a drunk that goes "ahhh!," and you're like, "Yeah," and that's it. That's like the, the most dangerous thing you get, and… "Thank you, Japan." I mean, that's to me very, very important. And then, well, there's also the fact that now I enjoy family life as well. So to me, Japan, Japan has, has offered me the opportunity to give life and to be a mom, which is again a delight. She's, she, she fantastic. My daughter is… 外国から帰ってきたときなんかはそうですね。あるいは、外国人のツアーに同行しているときとか。私は主に外国人を案内していますから。彼らが帰国して、成田でバイバイして、それから電車で羽田に向かうんです。イヤホンを耳につけて、「ああ、日本に戻ってきたんだな」って感じま

す。自分の日本に、我が家に帰ってきたんだって。不思議な感覚ですが、好きですね。それにしても、安全であるということは本当に素晴らしい喜びです。イヤホンをつけていても、誰も（邪魔をしてこない）。知らなかったのですが、熊本に住んでいるアメリカ人の女の子に会ったとき、彼女にそう言われました。「自転車に乗っていても、イヤホンをつけて歩いていても安全だよ」って。それで、本当にその通りだと気づいたんです。ええ、本当です。日本のどこであっても、夜であっても。たまに酔っ払いが「うわー！」って言っているのに出くわして、「はいはい」ってやり過ごすくらい。それが遭遇する最も危険なことと言ってもいいくらいで……「日本よ、ありがとう」と言いたくなります。つまり、それは私にとってものすごく重要なことです。それから、今は家族との生活を楽しめているという事実もあります。私にとって日本は、新しい命を授かり、母親になる機会を与えてくれた場所であり、これもまた大きな喜びです。娘は本当に素晴らしい子で……

Interviewer (1:48:18): Of course, change your life. 当然、人生が変わりますよね。

Nathalie (1:48:19): What a thing, yeah. So that I will never be able to get, you know, in any other way, and that is one of the most positive… Those two things, probably. 本当にすごいことです、ええ。他の方法では決して得られなかった経験ですし、最もポジティブな……おそらくその 2 つが大きな要素です。

Interviewer (1:48:30): Okay. なるほど。

Nathalie (1:48:30): Um, then there's of course, you know, um, the gentleness of the people in general. All those capacities they have in making you feel comfortable and, uh, *omotenashi* is just something you (encounter). And then there's *onsen*, right? So those are the points I would bring up most when I am asked about Japan, okay, um, in a positive way. And then something that really negatively impacts me is… It's again, that, but it is, it's the non-communicative way, uh, that Japanese people may have. Uh, not trying to understand foreign things or not trying to imagine there's another life outside of Japan. Uh, just thinking Japan is the best all the time is good, definitely, but there's also another way of looking at it. So, I love when Japanese people are actually pretty critical about the country, and that shows that they have had a reflection about how Japan actually is literally. Like, like what's the reality of Japan. Um, a lot of people live in that, you know, *heiwa boke* kind of thing, and it's not positive at all. It's one of the most dangerous things that are, that exist. So I would be afraid of that. Um, and then, definitely, um, as a woman, oh god. Rights for people like me. Japanese women really, um, sometimes anger me because they suffer so much, um, in silence. And I think there needs to be something done about that. Um, like literally, not just passing laws, we need effective action on the train, you know. I think we're far behind. Far behind. それからもちろん、人々の全体的な優しさもあります。他者を心地よくさせるためのあらゆる能力、そしておもてなしはまさに（直面する）素晴らしいものです。それから温泉もありますよね。ポジティブな面で日本について聞かれたら、私が真っ先に挙げるのはこういった点です。逆に、本当にネガティブな影響を受けていることといえば……これもまた裏返しなのですが、日本人が時として見せる「非コミュニケーション的」な態度です。外国のことを理解しようとしなかったり、日本の外にも別の生活があるという想像力を持とうとしなかったり。いつでも「日本が一番」と考えているのは確かに良いことでもありますが、別の見方だってあります。だから、日本人が自国に対してかなり批判的であるのを見ると、私は嬉しくなります。それは、彼らが日本の実際の姿、日本の現実についてちゃんと思考を巡らせている証拠だからです。多くの人が、いわゆる平和ボケのような状態で生きていますが、これは決して良いことではありません。存在する中で最も危険なことの一つです。私はそれを恐れています。それから間違いなく、女性として、もう本当に。私のような人間に対する権利の問題です。日本の女性たちには時々怒りを覚えることすらあります、というのも、彼女たちはあまりにも多くを、静かに耐え忍んでいるからです。それに関しては何とかしなければならないと思います。文字通り、ただ法律を通すだけではなく、電車内での実効性のある対策とかが必要なんです。私たちは遥か後ろに取り残されていると思います。ずっと遅れています。

Interviewer (1:50:09): Well, the world rankings certainly indicate that. 世界のランキングも確かにそれを明確に示していますね。

Nathalie (1:50:13): Yeah. But just, just my—I don't even know the numbers—but my personal, um, experience, uh, with friends of mine. Um, I've heard things that I didn't want to hear. And god, if we could change that, you know, make those people really, um, at home and, um, give our girls… Because I happen to have a daughter, um, who is Japanese as well as Belgian-French. I hope that she gets, as an adult, the opportunities that I had. Uh, because as a foreigner, I can stomp down doors so easily. She will not, right? ええ。でも数字なんて知らなくても、私の友人たちとの個人的な経験だけで十分分かります。聞きたくなかったような話をたくさん耳にしてきました。それを変えることができたらどれほどいいか。そういった人たちを本当に居心地よくさせて、私たちの娘たちに……私には、日本人であり、ベルギー・フランス人でもある娘がいます。彼女が大人になったとき、私が得られたような機会を得られることを願っています。なぜなら、私は外国人としてなら、とても簡単に既成のドアをぶち破ることができますが、彼女はそうはいかないでしょう？

Interviewer (1:50:46): Sure. Sure. 確かに、その通りですね。

Nathalie (1:50:48): So I, I hope that she'll have those, those opportunities offered to her as a woman. So we'll see. But that, I think, is, yeah, one, two of the most negative points I found here. だから、彼女が女性としてそういった機会を与えられることを願っています。どうなるか見てみましょう。でも、それが私が見つけた最もネガティブな 1 つか 2 つのポイントだと思います。

Interviewer (1:51:00): Final question. You talked a little bit before about passports. So here in Japan, uh, people often talk about how useful a Japanese passport is, and that's true. You can use a Japanese passport to go to many countries. Uh, you had a slightly different opinion about that. So you were talking about how you would never give up your French passport or Belgian passport. Can you talk a little bit about that? 最後の質問です。先ほどパスポートについて少しお話しされていましたね。ここ日本では、日本のパスポートがいかに便利かということがよく話題に上りますし、それは事実です。日本のパスポートがあれば多くの国に行くことができます。あなたはそれについて少し異なる意見をお持ちでした。ご自身のフランスやベルギーのパスポートを決して手放さないとおっしゃっていましたが、そのことについて少し詳しくお話しいただけますか？

Nathalie (1:51:27): Well, yeah, because now I know that, um, I can, I, I can manage a way to stay in Japan, um, probably for a long time. Um, so I'm fine. I don't need a Japanese passport. Um, but if I give up my two other nationalities and I, I take a Japanese passport, I can never again stay more than 3 months in my home country. Who would want that? Um, I think, I think it would impact myself very negatively. (Camera stops and restarts). Yeah, yeah. Um, so again, and I, I think, um, the only thing that would actually really, um, bother me is that I can't spend time in my home country anymore if I do that. And, at the same time, probably the Japanese passport is the most useful (passport in) all of the earth, because you have almost no restrictions, right? Thinking of the other one country there (North Korea?). But otherwise, yeah, it, it's, it's… I think my daughter would be fine with the, with the Japanese passport, right? And if she needs to reside in, in Belgium at some point or, uh, France for that matter, which I never did, um, you know, you can find ways, uh, like I did in Japan. ええ、だって、今の時点で私は日本に、おそらく長期間にわたって滞在し続ける方法を自分で確保できると分かっていますから。だから私は大丈夫です。日本のパスポートは必要ありません。でも、もし他の 2 つの国籍を放棄して日本のパスポートを取得してしまったら、私は自分の母国に二度と 3 ヶ月を超えて滞在することができなくなります。誰がそんなことを望むでしょうか？自分自身にとって非常にネガティブな影響を与えると思います。（カメラが一時停止して再開）ええ、そう。だから繰り返しますが、もしそれをやってしまったら、一番本当に困る唯一のことは、自分の母国で時間を過ごせなくなるということです。それと同時に、おそらく日本のパスポートは地球上で最も便利なパスポートですよね。制限がほとんどありませんから。例のあの 1 つの国（北朝鮮？）のことを考えなければ。でもそれ以外は、ええ、本当に……私の娘は日本のパスポートがあれば問題ないと思います。そして、もし彼女がいつかベルギーや、あるいは私が一

度も住んだことのないフランスに住む必要が出てきたとしても、私が日本でやったように、いくらでも方法を見つけることができるはずです。

Interviewer (1:52:35): So if Japan were to let you have a Japanese passport, let you naturalize without giving up your French passport or Belgian passport, would you consider that option? では、もし日本がフランスやベルギーの国籍を放棄することなく、日本のパスポートの所持や帰化を認めてくれるとしたら、その選択肢を検討しますか？

Nathalie (1:52:46): Of course. もちろんです。

Interviewer (1:52:47): Oh, okay. お、なるほど。

Nathalie (1:52:48): Well, I signed a petition, uh, a few years back, uh, for the double national visa be authorized because of my daughter. I, for myself, I don't really care, cuz again, um, I'll manage to live here, uh, being a foreigner as well. That's fine. I don't need to be Japanese, and I don't see the point in general. Um, again, because if, if, if it's not needed, it's not needed, right? But, but if, if I can get both nationalities, of course, that's an easy way to go. If I can keep my Belgian and French one and then be Japanese as well, it would ease a lot of things probably. 数年前に署名活動に参加したことがあるんです。娘のために二重国籍のビザ（承認）を認めてほしいという。私自身のためなら、正直どちらでもいいんです。繰り返しになりますが、外国人としてだってここでなんとか生きていけますから。それで十分です。日本人になる必要はありませんし、大体においてその意味が見出せません。必要がなければ必要ない、それだけですよね？でも、もし両方の国籍を持てるというなら、もちろんそっちの方が簡単な道です。ベルギーとフランスの国籍を維持したまま、日本人にもなれるなら、おそらく多くのことがずっと楽になるでしょうね。

Interviewer (1:53:24): Yeah, I feel exactly the same way. Nathalie, thank you so much for your time today. ええ、僕も全く同じ気持ちです。ナタリー、今日は貴重なお時間をいただき、本当にありがとうございました。

Nathalie (1:53:31): Your welcome. どういたしまして。

Interviewer (1:53:32): I really appreciate it. 本当に感謝しています。